

平城京発掘調査報告書Ⅰ

－平城京右京三条四坊六坪の調査－

采判

2026 年 3 月

奈良大学文学部文化財学科

平城京発掘調査報告書Ⅰ

— 平城京右京三条四坊六坪の調査 —

2026年3月

奈良大学文学部文化財学科

序 文

奈良大学に考古学研究室が設置された昭和 44 年 (1969) 以降、教員と学生による発掘調査を実施してきました。この経験は、卒業後に文化財専門職に就く学生にとって貴重な経験となり、考古学的な知識と技術の習得や、人材育成という教育的意義もありました。

本学のある奈良市内の平城京跡においても、過去に 10 数件の調査を実施していましたが、現地調査後に行う出土品の整理や報告書作成は、学業との両立や、学生の卒業によって滞り、報告書が未刊行なものも多く残されていました。

本学の卒業生でもある相原が令和 2 年 (2020) に奈良大学に着任したことを契機に、過去の発掘調査の再整理と報告書作成を、卒業生・在校生と共に計画しました。本書は、旧宝来キャンパス周辺（平城京右京三条四坊六坪）で実施した発掘調査の報告書で、本校が刊行する平城京の発掘調査報告書としては、『菅原遺跡』『平城京左京四条三坊十一坪発掘調査報告書』につづいて 3 冊目となります。

しかし、調査から既に 40 年ちかくの時間が経過しております。現在の調査精度からみると不備な点もありますが、当時としてはしかたのない所です。また、調査記録等の一部が不明になっている箇所もあり、現時点で残されている資料を基に報告をしています、発掘調査の成果を公開することが重要であると考えております。

本書の刊行が、平城京の調査研究の一助となり、学生のスキル向上に資することができれば幸いです。

奈良大学文学部文化財学科 相 原 嘉 之

例 言

1. 本書は奈良市宝来3丁目11-9他に所在する平城京右京三条四坊六坪の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社ベターライフの申請による大型量販店店舗（ベターライフ）建設に伴って、奈良大学内に設置された平城京右京三条四坊六坪発掘調査会によって昭和63年（1988）3月7日～4月27日まで実施した。現地調査終了後は、整理調査を引き続き実施したが、中断していた。
その後、再整理作業を令和3（2021）～令和7（2025）年度まで実施し、本書の作成を令和6（2024）年度～令和7（2025）年度に、奈良大学文学部文化財学科において行った。
3. 発掘調査・整理調査及び、再整理調査の参加者は第1章に記す。
4. 本発掘調査・整理調査・再整理調査・報告書作成にあたって、下記の機関及び個人より援助を受けた。
奈良国立文化財研究所（現奈良文化財研究所）、奈良県教育委員会文化財保存課（現奈良県地域振興部文化財課）、奈良市教育委員会文化財課
池田裕英、稲垣美麻、井上昌子、上垣幸徳、植野浩三、魚島純一、岡田雅人、金村浩一
工藤 晃、神野 恵、瀬口眞司、田村昌宏、丹羽崇史、原田憲二郎、三好美穂、山口等悟
吉川敏子（称略・五十順）
5. 本書の執筆は、相原嘉之、魚島純一（以上、文化財学科教授）、森山そらの（現大津市）、松田青空（現千葉県教育振興財団）、植木実果子（現守山市教育委員会）、則包遙菜（現春日大社）、中田優菜（文化財学科4回生）、高橋夏樹（文化財学科3回生）が分担し、目次および執筆箇所の末尾に示した。編集は相原が担当した。
6. 再整理にあたっては、当時の調査参加者の協力を得て行ったが、一部の調査資料の散逸などもあり、詳細が不明な点もあった。現時点で残されている資料と出土品の再整理を基に、本報告書を作成した。やはり早期に報告書を作成する必要性を痛感している。
7. 本書に使用した土器・瓦等の分類・編年・年代観については、主に以下の文献を参照した。
古代の土器研究会 1992 『古代の土器1 都城の土器集成』
奈良国立文化財研究所 1976 『平城宮発掘調査報告Ⅶ－内裏北外郭の調査－』
奈良国立文化財研究所 1982 『平城宮発掘調査報告Ⅺ－第1次大極殿地域の調査－』
奈良国立文化財研究所 1996 『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』
奈良国立文化財研究所 1991 『平城宮発掘調査報告ⅩⅢ－内裏の調査Ⅱ－』
奈良文化財研究所 1993 『平城宮発掘調査報告ⅩⅣ－第二次大極殿院の調査－』
奈良市教育委員会 2014 『南都出土中近世土器資料集－奈良町高天町遺跡（HJ第559次調査）出土資料－』
文化庁文化財部記念物課・奈良文化財研究所 2010 『発掘調査のてびき』
8. 出土遺物の写真は、佐藤右文氏（アートフォト右文）による。
9. 出土遺物及び関係書類・図面等は奈良大学文学部文化財学科にて保管している。
10. 本書の再整理事業及び報告書の刊行にあたっては、奈良大学特別研究「奈良市における平城京の調査研究」（令和4～7年度）の助成を受けている。
11. 表紙は、平城京右京三条四坊六坪出土墨書土器「采判」である。

目 次

序 文

例 言

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯と経過	(相原・森山・松田・植木・則包) … 1
第2節 調査体制と報告書の作成	(相 原) … 4
第2章 位置と環境	6
第1節 地理的環境	(高 橋) … 6
第2節 歴史的環境	(高 橋) … 7
第3節 周辺の主な調査	(高 橋) … 8
第3章 検出遺構	13
第1節 各地区の概要	(相 原) … 13
第2節 古代の遺構	(中 田) … 15
第3節 中世の遺構	(森 山) … 24
第4章 出土遺物	26
第1節 瓦磚類	(相 原) … 26
第2節 土器類	(高橋・則包・森山) … 29
第3節 特殊土器・土製品	(相 原) … 37
第4節 石製品	(相 原) … 39
第5章 考 察	41
第1節 平城京右京三条四坊六坪の占地と性格	(相 原) … 41
第2節 右京三条四坊六坪出土の小型瓦について	(松 田) … 45
第3節 右京三条四坊六坪出土の陶棺について	(植 木) … 51
第6章 自然科学分析	(魚 島) … 53
第7章 総 括	(相 原) … 54

図 面 目 次

- 第1図 調査位置図（1：20000）
- 第2図 周辺調査位置図（1：3000）
- 第3図 全体平面図（1：200）
- 第4図 第Ⅰ調査区 平面図（1：100）
- 第5図 第Ⅰ調査区 S E 101（1：20）
- 第6図 第Ⅱ調査区 平面図（1：100）
- 第7図 第Ⅱ調査区 S E 201（1：20）
- 第8図 第Ⅲ調査区 平面図（1：100）
- 第9図 第Ⅲ調査区 S E 302（1：20）
- 第10図 第Ⅲ調査区 S E 301（1：20）
- 第11図 第Ⅳ調査区 平面図（1：100）
- 第12図 第Ⅳ調査区 S X 401（1：20）
- 第13図 軒丸・軒平瓦（1：3）
- 第14図 小型瓦（1：3）
- 第15図 塼（1：4）
- 第16図 第Ⅰ調査区 S E 101 出土土器①（1：4）
- 第17図 第Ⅰ調査区 S E 101 出土土器②（1：4）
- 第18図 第Ⅲ調査区 S E 301・302・S K 302～304 出土土器（1：4）
- 第19図 第Ⅱ調査区 S K 205 出土土器（1：4）
- 第20図 第Ⅲ調査区 S D 301 出土土器（1：4）
- 第21図 土製品（1：4）
- 第22図 陶棺（1：4）
- 第23図 石製品（1：4）
- 第24図 調査地と奈良市 222 次（1：400）
- 第25図 平城京右京三条四坊六坪の占地（1：1000）
- 第26図 平城京内における小型瓦の分布

挿 図 版 目 次

- 写真1 現地調査参加者集合写真
- 写真2 再整理遺物洗浄作業
- 写真3 再整理実測作業
- 写真4 遺物写真撮影
- 写真5 陶棺のデジタルマイクロスコープ画像
- 写真6 奈良三彩の蛍光X線分析結果

表 目 次

- 第1表 右京三条四坊内の調査一覧

図 版 目 次

- 図版1上 I区 調査区全景（南西より）
- 図版1下 I区 調査区全景（北東より）
- 図版2上 S D101（南東より）
- 図版2下 S E101 検出状況（南より）
- 図版3上 S E101 遺物出土状況（西より）
- 図版3下 S E101（南西より）
- 図版4上 II区 調査区全景（南より）
- 図版4下 II区 調査区全景（東より）
- 図版5上 S E201 完掘状況（北より）
- 図版5下 S E201 底部曲物（北より）
- 図版6上 S K205 堆積状況（西より）
- 図版6下 S K205 遺物出土状況（西より）
- 図版7上 III区 調査区全景（北西より）
- 図版7下 III区 調査区全景（南西より）
- 図版8上 S E301 断割状況（南より）
- 図版8下 S E301 枠内断割状況（南より）
- 図版9上 S E301 枠内底部（南より）
- 図版9下 S E301 遺物出土状況（南より）
- 図版10上 S K302（北東より）
- 図版10下 S K304（南東より）
- 図版11上 S B301（南より）
- 図版11下 S D301・302（西より）

- 図版12上 IV区 調査区全景（東より）
図版12下 IV区 調査区全景（北東より）
図版13上 S B 401（東より）
図版13下 S X 401（北より）
図版14上 軒丸・軒平瓦
図版14下 塼
図版15上 小型瓦
図版15下 小型丸瓦
図版16 S E 101 出土土器
図版17上 S E 301・302 出土土器
図版17下 S K 302 ～ 304 出土土器
図版18上 S K 205 出土土器
図版18下 S D 301 出土土器
図版19 墨書土器・施釉陶器・製塩土器・土馬・陶硯
図版20上 陶棺
図版20下 石製品（石器・砥石）

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と経過

A. 発掘調査に至る経緯

奈良市宝来3丁目11-9他に、株式会社ベターライフは大型店舗建設を計画した。しかし、この地は奈良時代の平城京右京三条四坊六坪内に位置することから、奈良県教育委員会・奈良市教育委員会では、発掘調査が必要と判断し、株式会社ベターライフと協議を重ねてきた。その結果、発掘調査について合意が得られ、その調査を奈良大学の水野正好教授に打診された。本校としても、学生の発掘知識・技術の習得においても有益と考え、これを受託した。

B. 発掘・整理調査の経過

発掘調査は、諸手続きを経た後、昭和63(1988)年3月7日に開始し、4月27日に現地調査を完了した。整理作業は発掘調査終了後から本格的に開始し、1989年度末までに一旦完了させたが、調査参加者の学業・卒業にともなう、報告書の刊行までには至らず、遅延・中断されていた。

C. 再整理作業に至る経緯

本学は、奈良市内の平城京跡において、過去に15件程度の調査を実施してきた。しかし、大学が主体となる発掘調査では、現地調査後に出土品の整理を行い、報告書を刊行することは、学業との両立や、学生の卒業によって滞り、報告書が刊行できていないものも多い。調査参加者が卒業後も出土品の整理を地道に継続して、報告書を刊行したものもあるが、未刊行なまま残されている調査もあった。

本学の卒業生でもある相原が、令和2年(2020)に奈良大学へ着任したことを契機に、整理途中で留まっていた過去の発掘調査の報告書作成を、調査に参加していた卒業生の助言を得て計画した。そこで文化財学科学生有志の参加を得て、出土品の再整理と報告書作成を実施することになった。この作業は、将来文化財の専門職員を目指す学生にとっても有益なことであり、さらに卒業生と協働して行うことは、卒業生・在校生の交流を生むことになると考える。そこでまずは、旧宝来キャンパス周辺(平城京右京三条四坊)で実施した発掘調査の報告書作成を計画した。

出土品整理の経過については後述するが、当時の調査参加者の助言を得るものの、30年以上も前の発掘調査であることや、当時の調査状況を知らない教員・学生による再整理であること、宝来キャンパスから高の原キャンパスへの大学移転や倉庫移転に伴う出土品の度重なる移動などから、令和3年(2021)度は、出土品及び関係書類の確認作業から始めた。その後、令和4年(2022)度から、本格的に整理作業を実施した。

なお、本研究は、令和4～7年度奈良大学特別研究(地域課題解決型プロジェクト共同研究)に採択され、大学からの助成を受けている。(相原)

D. 再整理作業の経過

令和3年(2021)度 準備作業

過去に奈良大学が行った平城京発掘調査の記録類・出土品は、大学構内に散逸していた。そのため、各種資料の確認と保管状態の確認を行った。その結果、遺構平面・断面図、遺物実測図、写真は遺構ごとにまとめられており、トレース、レイアウトが未完成の状態で保管されていることを確認した。また、出土品は約500箱のコンテナに収納されていた。これらは考古学実習室、ドライエリア、文化財倉庫に分散して収納されており、キャンパス移転等の際に仮置きしたまま未整理だったと考えられる。出土品は、その多くが洗浄済みであったものの、一部未注記のものや紙箱の劣化による散乱を確認した。このことから、再整理実施の可否を判断するために、保管資料の把握を行うこととなった。

作業の経過 作業は、令和3(2021)年度から開始し、週に1回程度、長期休暇中には1週間ほどのまとまった期間を設けて実施した。まず4月からは、文化財倉庫内のコンテナの把握と収納配置図の作成を行った。8月には倉庫整理と並行して、図面類の把握作業に着手した。翌年の2月からは写真資料整理を行い、1年間で把握できた記録資料と遺物の残存状態を一覧にしてまとめた。3月中旬には以上の作業が終了し、残存状態が良好であったことから再整理可能と判断した。(森山)

令和4年(2022)度 整理作業

整理作業の概要 令和3年度の作業によって、平城京発掘調査の再整理が可能であるという判断に至った。また、未報告遺跡のうち、平城京右京三条四坊内の遺跡をまとめて報告することを念頭に、図面、遺物(約120箱)の再整理を実施することとなった。主な遺跡は、平城京右京三条四坊六坪(通称:ベターライフ)、七・十坪(通称:西川)、十五坪(通称:マクド・山崎屋・ガソリンスタンド)である。なお、通称名は、発掘調査原因となった開発行為に由来するもので、発掘調査当時から通称名として使用していた。

作業の経過 作業は、週に1回、長期休暇中には1~2週間ほどのまとまった期間を設けて実施した。再整理にかかる準備として令和3(2021)年3月末から作業に着手した。まずは調査地の全容を把握するため、遺構平面図原本を1/100スケールの縮図で作成した。4月からは、前年度に得た情報から調査地の位置を現在の地図に落とし込む作業を実施した。また、5月からは、再整理の参加者を増員し、出土品の洗浄と再分類をおこなった。洗浄は遺跡単位でおこない、一遺跡終了ごとに出土品の再抽出を行った。6月には、池田裕英氏(奈良市教育委員会)に当時の調査状況を伺うことができ、さらに上垣幸徳(滋賀県教育委員会)・岡田雅人(草津市教育委員会)の両氏からも、当時の調査についてのご教示いただいた。令和5(2023)年1月からは、各遺跡の遺物洗浄を実施した。(森山)

令和5年(2023)度 整理作業

整理作業の概要 令和5年度は、前年度に引き続き平城京右京三条四坊六坪(通称:ベターライフ)の遺物洗浄を行い、各遺跡の実測遺物を抽出した。その中でも、ベターライフの現場からは、多くの出土品があり、報告する遺物が膨大になることが予想された。従ってこれまで数現場の報告を合冊する計画であったが、ベターライフについては、単独の報告書作成へと方針を変更した。そして、整理・報告はベターライフの現場から作業を進めることとした。

作業の経過 作業は週1日、長期休暇中は1週間から2週間程度まとまって行うことを基本に作業を実施した。また、今年度も新たに3年生・1年生の参加者を増員して作業を実施した。

夏季休暇までにベターライフの遺物洗浄を終えたため、当初予定していた出土品の洗浄をすべて完了したことになる。夏季休暇中には、実測遺物の再抽出作業を行った。この過程で、ベターライフの出土品について、実測・報告遺物が膨大になることが見通されたため、報告書作成全体計画の見直しを図った。

9月以降、ベターライフの遺物の接合と実測作業を並行して開始した。さらに、この時期から新たに加わった参加者は、遺物の取り扱いに慣れるように、土器接合作業から始め、その後に、土器の実測練習を兼ねて、実測作業にも加わった。(松田)

令和6年(2024)度 整理作業

整理作業の概要 令和6年度は、前年度に引き続き平城京右京三条四坊六坪(通称:ベターライフ)で出土した遺物の実測を行なった。ベターライフは平城京右京三条四坊内の他の現場よりも報告する遺物が多量であるため、先んじて整理作業を進め、当初予定を変更して、単独での報告書作成とし、令和8(2026)年3月の刊行を目指した。

作業の経過 作業は週に1日、長期休暇中は1週間から2週間程度まとまって作業を実施した。さらに、今年度も新たに3回生・1回生の参加者を増員して作業を進めた。

前年度に引き続き遺物の実測を行っているが、実測・報告遺物の数が多く、週一日の作業日には間に合わないため、作業日までの一週間で各々が実測を行い、作業日に確認・修正を行うこととした。

新しく参加した1回生は、土器の観察の仕方とその取り扱いに慣れるために、まずは遺物洗浄に参加し、その後に土器実測の練習を行っている。また、1回生を対象に、8月2日に平城宮跡資料館・いざない館において、平城京及び出土品の現地研修を実施した。また、原田憲二郎氏(奈良市埋蔵文化財調査センター)から出土瓦の指導を得た。ベターライフの遺物実測はおおむね終了し、報告書の執筆作業の準備を進めた。(植木・則包)

令和7年(2025)度 整理作業

整理作業の概要 令和7年度は、前年度に残されていた遺物の実測図を作成し、遺構・遺物の検討、報告書原稿の作成、図版の作成を経て、令和8年3月に本書を刊行した。遺物の検討にあたっては、神野恵・丹羽崇史・原田憲二郎・三好美穂・山口等悟氏からのご教示を得て、当時の調査参加者には、報告原稿の確認もしていただいた。(相原)

第2節 調査体制と報告書の作成

A. 調査体制

発掘調査は株式会社ベターライフの依頼を受けて、奈良大学内に平城京右京三条四坊六坪発掘調査会を設置し、昭和63（1988）年2月23日に株式会社ベターライフと発掘調査に関する覚え書きを交わした。調査会の組織は下記の通りであり、水野正好教授のもと、奈良大学学生が調査補助員として参加した。

平城京右京三条四坊六坪発掘調査会 委員名簿

顧問	町田 章	奈良国立文化財研究所 平城宮跡発掘調査部長
	長谷川彰一	奈良県教育委員会 文化財保存課長
会長	水野 正好	奈良大学 文学部文化財学科 教授
副会長	石橋 義徳	奈良県教育委員会 文化財保存課 課長補佐
委員	館野 和巳	奈良市教育委員会 文化課長
	毛利光俊彦	奈良国立文化財研究所 技官
	土橋 理子	奈良県教育委員会 文化財保存課 技師
	今尾 文昭	奈良県教育委員会 文化財保存課 技師
	立石 堅志	奈良市教育委員会 文化課 技師
	森下 恵介	奈良市教育委員会 文化課 技師
事務局長	酒井 龍一	奈良大学 文学部文化財学科 助教授

B. 報告書の作成

発掘調査報告書は、既に記したような経緯を受けて、調査直後から実施していたが、報告書の刊行には至らずに長期間が経過した。奈良大学に相原嘉之が着任したことから、令和3（2021）年度から改めて再整理事業を進めた。再整理及び、報告書作成にあたっては、当時の調査参加者の意見も踏まえながら、目次に記した者が分担して担当した。

調査参加者

1987（～1988）年度発掘調査（所属は1987年度当時）

金村浩一、上垣幸徳、高梨清志（以上、文化財学科4年）、岡田雅人、田村昌宏、井上昌子（以上、文化財学科3年）、池田裕英、稲垣美麻、稲生洋子、岩橋隆浩、柏原正民、佐伯博光、高橋知之、深江英憲、森本徹（以上、文化財学科2年生）、工藤晃、小林裕介、鈴木恵子、清喜裕二、瀬口眞司、谷口幸代、田村陽子、藤城泰（以上、文化財学科1年生）、今西隆行、小野紀男（以上、文化財学科新入生）

2021年度（所属は当時）

佐野詩音（以上、文学部4年生）、内田菜々子、小田祐亮、新田井一輝、瀬部和宏、辻本知潤、森山そらの（以上、文学部3年生）、松田青空（以上、文学部2年生）

2022年度（所属は当時）

内田菜々子、小田祐亮、新田井一輝、瀬部和宏、辻本知潤、森山そらの（以上、文学部4年生）、後藤弘一郎、原田岳、松田青空、山内悠雅（以上、文学部3年生）、植木実果子、

押田詩織、中村日和、則包遥菜（以上、文学部2年生）

2023 年度（所属は当時）

森山そらの（以上、大学院修士1年）、後藤弘一朗、原田岳、松田青空、山内悠雅（以上、文学部4年）、植木実果子、押田詩織、中村綾音、中村日和、則包遥菜、渡部孝哉（以上、文学部3年）、高橋夏樹、内藤沙月、永島早姫（以上、文学部1年）

2024 年度（所属は当時）

森山そらの、澤井祐輝（以上、大学院修士2年）、植木実果子、則包遥菜、渡部孝哉（以上、文学部4年）、中田優菜（以上、文学部3年）、高橋夏樹、内藤沙月、永島早姫、（以上、文学部2年）、赤嶺杏、天本愛子、岩上心路、碓井颯季、奥香奈絵、助實陽花、田中美羽（以上、文学部1年）

2025 年度（所属は当時）

中田優菜（文学部4年）、高橋夏樹、内藤沙月、永島早姫、村本史（以上、文学部3年）、赤嶺杏、天本愛子、岩上心路、碓井颯季、助實陽花（以上、文学部2年）

（相原）



写真1 現地調査参加者集合写真



写真2 再整理遺物洗浄作業



写真3 再整理実測作業



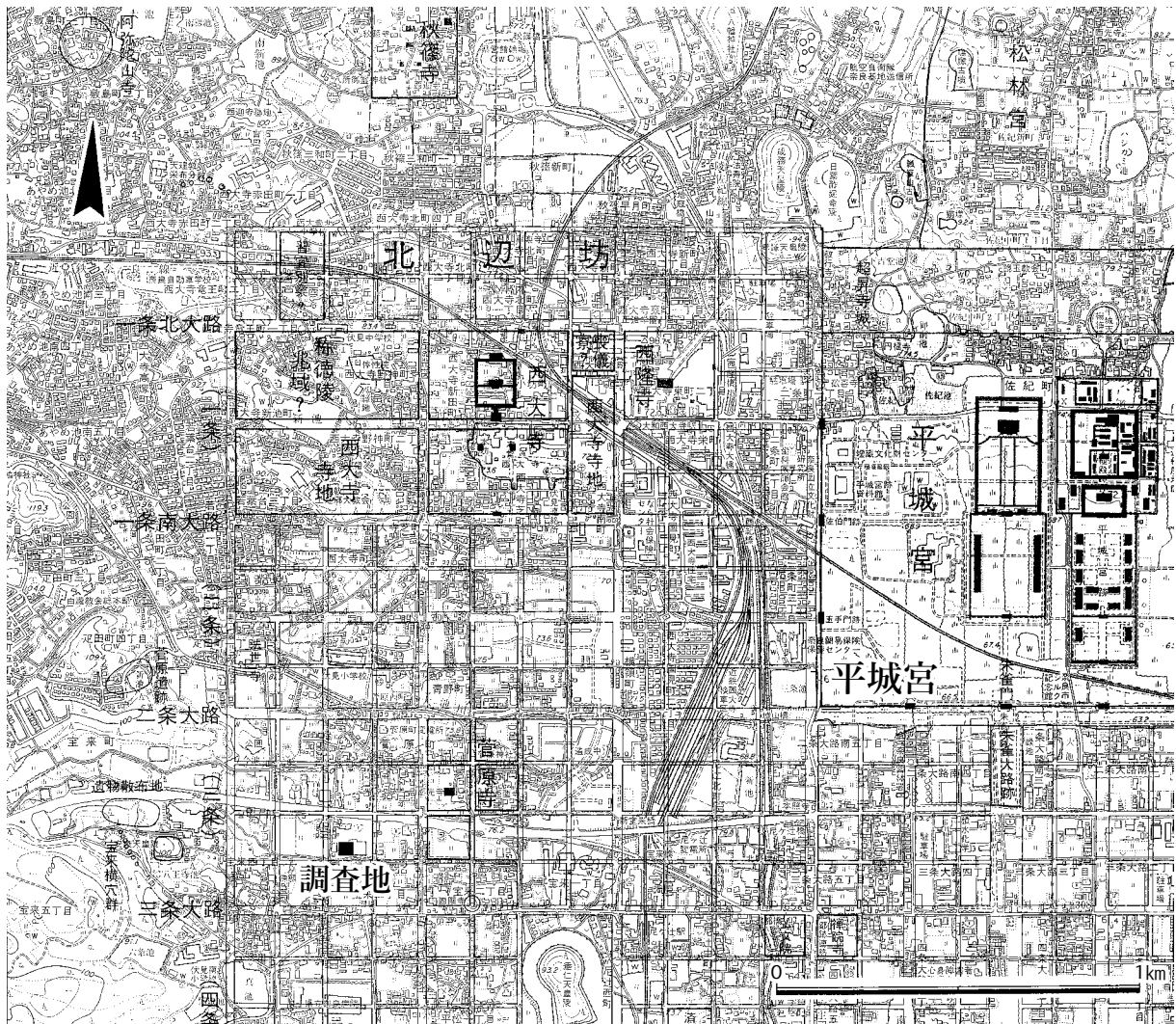
写真4 遺物写真撮影

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境（第1図）

今回の発掘調査は奈良市宝来3丁目11－9他で実施した。調査地は、奈良盆地北端部の西側に位置し、南北にのびる西ノ京丘陵の東側緩傾斜面地にあたる。この緩斜面地には、西側から東へ流れる多くの小河川が浅い浸食谷を形成し、細い沖積地の連なる複雑な地形を形成する。

現在の地形は、奈良時代の平城京の条坊施工や中近世の灌漑事業による改変も受けており、遺存する地割や微地形、さらに発掘調査の成果を踏まえて、旧来の地形復元も試みられている（奈文研1981）。
（高橋）



第1図 調査位置図（1：20000）

第2節 歴史的環境

ここでは調査地周辺を中心とした奈良盆地北端の歴史的環境について概観する。

旧石器時代 この地域における旧石器時代の代表的な遺跡に、法華寺南遺跡がある。ここでは、奈良時代の遺構面より下層から、ナイフ型石器をはじめとする後期旧石器時代に属する大量の石器が出土している（奈文研 2003）。法華寺南遺跡以外は、単発的な出土ではあるが、平城宮跡の南東部付近に比較的まとまっている傾向がみられる。これ以外にも、後世の遺物に混在して、旧石器時代とみられる遺物の検出例が報告されている。

縄文時代 縄文時代草創期の有茎尖頭器の出土は複数例報告されているが、いずれも遺構に伴うものではない。また、早期から前期にかけての明確な遺構・遺物も確認されていない。中期以降になると、東紀寺遺跡（奈文研 1994）、佐紀池下層遺跡（奈文研 1981）、菅原東遺跡（奈良市 1995）などで土器や石器の出土が報告されている。後期から晩期になると、遺跡数は増加し、秋篠川流域の宝来遺跡（奈良市 1999）、菅原東遺跡（奈良市 1995）、秋篠・山陵遺跡（秋篠・山陵遺跡調査会 1998）、西隆寺下層遺跡（奈文研 1993）などがある。佐保川流域では左京三条五坊三坪下層（榎考研 1996）、油阪遺跡（奈良市 2004a）、左京四条三坊十一坪下層（平城京左京四条三坊十一坪調査会 1991）などで出土している。

弥生時代 弥生時代前期の遺構・遺物が確認できた例としては、秋篠川流域の菅原東遺跡（奈良市 1995）や佐紀遺跡（奈文研 1965）、佐保川流域の平城宮壬生門北方（奈文研 1981）、左京四条一坊四坪下層（榎考研 1991）、左京五条二坊十五坪・十六坪下層（大安寺西遺跡）（榎考研 2006）などがあり、竪穴建物や土坑、溝などが検出された。佐紀遺跡・大安寺西遺跡は後期まで引き続き遺構・遺物が継続的に確認できることから、この地域では中核的な集落であったと考えられている。中期から始まる遺跡には、左京五条一坊十六坪下層（柏木遺跡）（奈良市 1999）などがある。後期では、右京四条一坊一坪下層（横領遺跡）（奈良市 1991）や左京四条五坊十二坪下層（杉ヶ町遺跡）（奈良市 1998）など、それまでと同じく沖積地に立地する遺跡があげられる。また、六条山遺跡（榎考研 1980）のように盆地の縁辺から丘陵部にかけても遺跡がみられるようになった。

古墳時代 古墳時代の集落立地は、弥生時代とほぼ同じ傾向を示す。秋篠川右岸の菅原東遺跡（奈良市 1995）では、前期の方形区画居館や建物の他に、後期の埴輪窯（奈良市 1992a）も検出されている。さらに、盆地東部にも三条遺跡（奈良市 2004b）、東紀寺遺跡（榎考研 2002）、南紀寺遺跡（奈良市 1992b）、古市遺跡（奈良市 1997）などの集落遺跡が展開し、南紀寺遺跡では豪族居館が確認されている。

一方、古墳は盆地北部の平城山丘陵から盆地東部の台地上にかけて多く築造されている（今尾 2014）。西ノ京丘陵には、大型前方後円墳の宝来山古墳とその陪塚が築造され、近年注目された富雄丸山古墳（奈良市 2022）もある。前期後半からは、平城山丘陵の西部で佐紀陵山古墳、佐紀石塚山古墳、五社神古墳など大型前方後円墳を中心とする佐紀古墳群の造営が始まり、盆地東部の台地でも、鶯塚古墳、古市方形墳、石ヶ平古墳などが出現する。中期にもこの両地域で継続して古墳が営まれた。後期になると平城山丘陵では大型古墳の造営が終わり、赤田横穴群（奈良市 2016）、宝来横穴群（前田・絹嶋 2021）などが、西ノ京丘陵から平城山丘陵にかけての盆地北西部の丘陵上に営まれるようになる。特に、この地域では陶棺が多く出土しており、土師氏の墓域と推定される。

飛鳥時代 飛鳥時代の遺構は、菅原東遺跡で掘立柱建物と井戸などの遺構・遺物が確認されている（奈良市 2002）。盆地縁辺部では瓦の出土する姫寺跡、海龍王寺、平松廃寺などの寺院が造営された。また、奈良盆地を南北に縦断する下ツ道・中ツ道・上ツ道が確認され、近年の調査結果から、下ツ道の敷設時期が7世紀初頭にまで遡る可能性も指摘されている（榎考研 2010）。

奈良時代 奈良時代になると、平城京遷都と共に、条坊施工・宅地造成・河川改修などの土地改変が行われた。右京三条三坊には菅原寺が所在し、現在の喜光寺を中心とし、右京三条三坊九・十・十四・十五・十六坪が寺地とされている（奈良県 1969）。また調査地周辺には、条坊遺構が施工されたと推定されるが、明確な遺構は少ない。特に西四坊大路については、その位置自体は想定されているものの、発掘調査では確認されていない。西四坊大路の西側の京外の丘陵上には、行基にかかわるとされる菅原遺跡（菅原遺跡調査会 1982・元興寺 2023）がある。

平安時代以降 長岡京・平安京遷都が挙行されるが、平安初頭までは、旧平城京域に多くの住民が居住していたと考えられる。これ以降は生活痕跡が乏しく、多くは耕作地となったことが推測される。これに対して、一部では、中世の建物跡などが検出され、中世集落が点在していた景観が復元されている。（高橋）

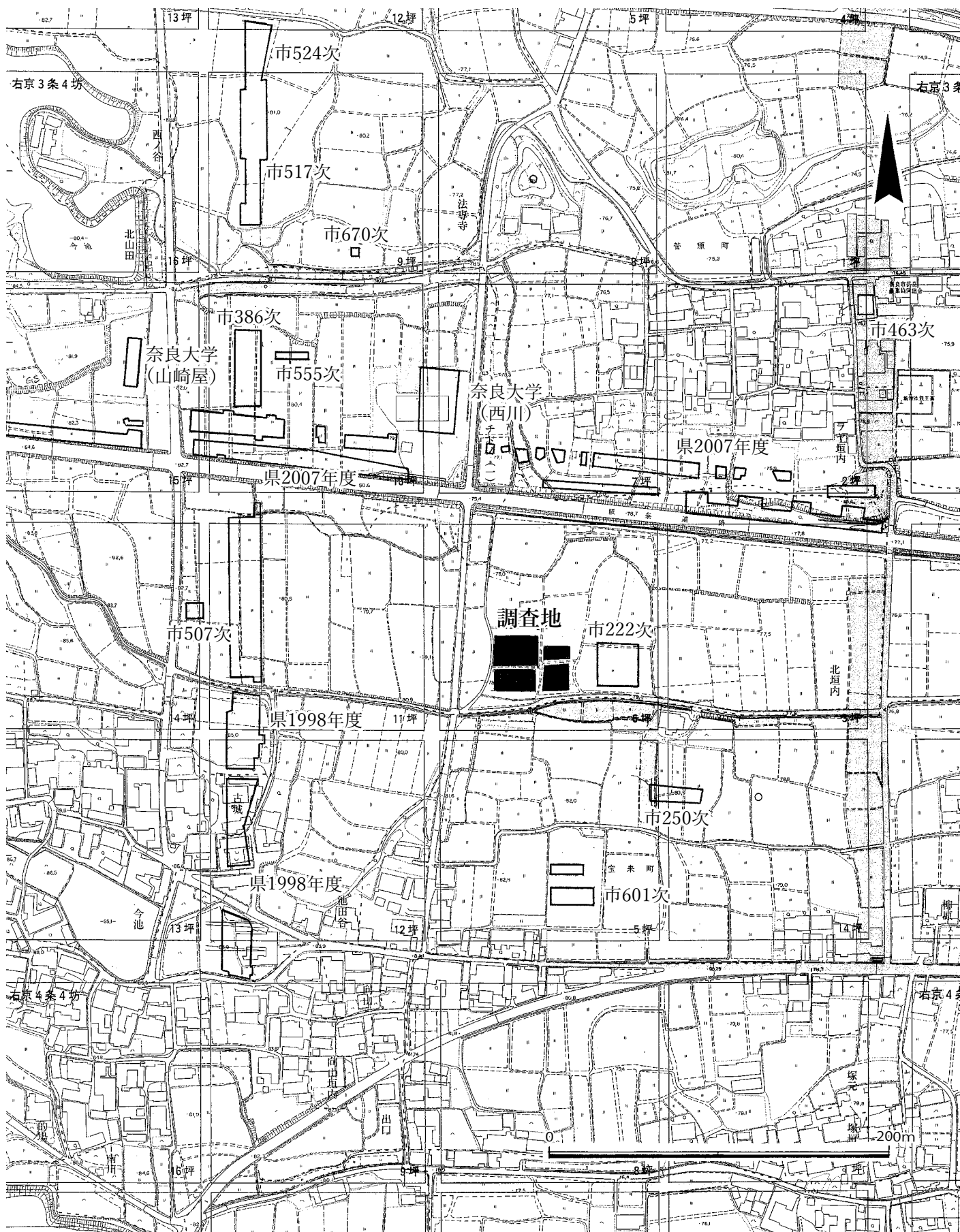
第3節 周辺の主な調査（第2図）

今回の調査地周辺の発掘調査では、これまでに奈良市教育委員会による 222 次、250 次、386 次、517 次、524 次、奈良県立橿原考古学研究所による国道 308 号線の整備に伴う調査成果などが報告されている。ここでは主要な調査について概要を記す（表 1）。

調査地の東側、同じ右京三条四坊六坪に位置する奈良市 222 次調査では、奈良時代の掘立柱建物 9 棟、溝 2 条、土器埋納土坑 2 箇所などが検出された。ここでは土師器皿、高杯、須恵器杯・碗・平瓶・壺・甕などの土器類に加え、瓦塼類が出土した。

奈良市 250 次調査では、掘立柱塼、掘立柱建物、井戸、溝、土坑、小穴が検出された。奈良時代の須恵器・土師器・瓦・塼、14 世紀の土師皿 8 点・陶器・瓦器・瓦質土器、16 世紀の陶器・瓦質土器・土師器・砥石が出土している。また、中世以降と考えられる溝 S D 0 6 からは土師器・須恵器のほかに軒平瓦、「菅原寺」銘の軒丸瓦が出土した。この調査地は平城京右京三条四坊四坪の西端部に位置し、西四坊坊間東小路の東側溝にあたる溝が検出されると考えられる。調査では、南北方向にのびる溝として奈良時代の S D 0 1 と時期不明の S D 0 7 の 2 箇所が確認された。そこで、S D 0 1 を西四坊坊間東小路の東側溝に想定した案と、S D 0 1 から東 4.8 m の位置にある南北溝 S D 0 7 を東側溝にあて、S D 0 1 を西側溝とする案の二案を提示している。それぞれの造営単位尺を求め、従来の研究と比較しても妥当な数値であると評価されるが、両案ともに西四坊坊間東小路に伴う側溝について明確にするには至っていない。

奈良市 386 次調査では掘立柱建物 10 棟、掘立柱塼 2 条、井戸 3 基、溝 2 条、土坑 1、溝状の遺構 1、自然流路 2 が確認された。大半の遺構は奈良時代のものだが、溝状の遺構は古墳時代以前と考えられ、その下層からは縄文時代後期初頭の土坑 1 基を検出した。奈良時代の遺構からは、土馬脚部・胸部、黒色土器片、軒丸瓦、土師器、須恵器、木簡、荷札、建築部材、棒状加工品、金属製釘、木製しゃもじ、漆用パレットに転用した須恵器杯などが出土している。古墳時代以前の遺構である溝状遺構からは、縄文～弥生時代のもので、二次堆積したと考えられるサヌカイト製石器 1725 点が確認された。さらにその下層で検出した縄文時代の土坑からは、板状の花崗岩、



第2図 周辺調査位置図 (1 : 3000)

第1表 右京三条四坊内の調査一覧

調査担当	調査地	遺 構 ・ 遺 物	特記事項	文献
橿考研 1998 年度	十一・十二坪	(11 坪) 奈良：建物・堀・土器埋納 中世：大溝 (12 坪) 奈良：柱穴 中世：建物・大溝	1/8 → 1/4 宅地に変遷 三条大路？	文献 1
橿考研 2007 年度	二・七・十 ・十五坪	(10 坪) 奈良・平安：建物・堀・井戸 (15 坪) 奈良：建物・堀・井戸		文献 2
奈良市 161 次	八坪	遺構・遺物なし		文献 3
奈良市 222 次	六坪	奈良：建物・溝・土器埋納、埴	奈良時代後半の宅地	文献 4
奈良市 250 次	四・五坪	奈良：建物・堀 中世：井戸・溝	西四坊坊間東小路？	文献 5
奈良市 386 次	十坪	奈良：建物・堀・井戸、木簡 縄文：土坑、石器	南北に三分割する溝	文献 6
奈良市 463 次	二坪	奈良：溝 中世：土坑・溝 近世：溝	西三坊大路西側溝？	文献 7
奈良市 507 次	十四坪	奈良：堀・溝	西四坊坊間西小路西側溝	文献 8
奈良市 517 次	九坪	奈良：建物・溝 中世：水田 縄文・弥生・石器		文献 9
奈良市 524 次	九坪	中世：水田		文献 9
奈良市 555 次	十坪	平安：堀		文献 10
奈良市 601 次	五坪	奈良・平安：建物・堀・溝 中世：井戸・溝	東西 1/3 の区画溝	文献 11
奈良市 670 次	九坪	遺構・遺物なし		文献 12
奈良大学 85 年度	十五坪	奈良：建物・溝	(ガソリンスタンド)	未報告
奈良大学 86 年度	十五坪	奈良：建物	(マクドナルド)	未報告
奈良大学 87 年度	七・十坪	奈良：建物・溝	(西川)	未報告
奈良大学 87 年度	十五坪	奈良：柱穴・土器埋納遺構	(山崎屋)	未報告
奈良大学 88 年度	六坪	奈良：堀・井戸、墨書土器・小型瓦 中世：建物	(ベターライフ)	本 書

文献 1：橿原考古学研究所 1999「平城京右京三条四坊・四条四坊」『奈良県遺跡調査概報 1998 年度（第一分冊）』

文献 2：橿原考古学研究所 2011『平城京右京三条三坊・四坊－国道 308 号整備事業に伴う発掘調査報告書（Ⅳ）－』

文献 3：奈良市教育委員会 1989「平城京右京三条四坊八坪の調査 第 161 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和 63 年度』

文献 4：奈良市教育委員会 1992「平城京右京三条四坊六坪の調査 第 222 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 3 年度』

文献 5：奈良市教育委員会 1993「平城京右京三条四坊四坪の調査 第 250 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 4 年度』

文献 6：奈良市教育委員会 1999「平城京右京三条四坊十坪・宝来遺跡の調査 第 386 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 10 年度』

文献 7：奈良市教育委員会 2004「平城京跡（西三坊大路）の調査 第 463 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 13 年度』

文献 8：奈良市教育委員会 2006「平城京跡（右京三条四坊十四坪）の調査 第 507 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 15 年度』

文献 9：奈良市教育委員会 2007「平城京跡（二条大路・右京三条四坊九坪）の調査 第 517・524 次」

『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 16 年度』

文献 10：奈良市教育委員会 2009「平城京跡（右京三条四坊十坪）の調査 第 555 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成 18(2006) 年度』

文献 11：奈良市教育委員会 2010「平城京跡（右京三条四坊五坪）の調査 第 601 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成 19(2007) 年度』

文献 12：奈良市教育委員会 2016「平城京跡（右京三条四坊九坪）の調査 第 670 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成 25(2013) 年度』

敲石、青色チャート礫が据えられた状態で出土したほか、中津式に属すると考えられる縄文時代後期初頭の精製・粗製深鉢、サヌカイト製の石鏃、剥片、碎片が出土した。

奈良市 517 次と 524 次では、古墳時代以降の素掘り溝 3 条、土坑 3 基、奈良時代の掘立柱建物 1 棟、掘立柱列 2 条、土坑 1 基、流路 1 条、鎌倉時代の水田 5 面、畦畔 2 条、室町時代以降の土坑 1 基、時期不明の土坑 3 基を検出している。出土遺物は、縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器・埴輪、奈良～平安時代の土師器・須恵器・土製品・灰釉陶器、鎌倉時代の土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器、江戸時代の国産陶磁器、奈良時代および平安時代以降の瓦埴類、銭貨、時期不明の金属製品・鑄造関連遺物、縄文時代の石器、弥生時代の石包丁、時期不明の砥石などが確認された。

県による調査報告書では、右京三条四坊二・七坪の調査区から多くの遺構が検出された。調査区 1・2 区の溝と井戸からは布留 2～3 式土器が出土し、古墳時代前期後半頃のものであると考えられる。一方、3 区以西では古墳時代の遺構は確認されなかった。今回確認した遺構については、現在の菅原東遺跡の範囲外にあたる。しかし、検出された南北溝・東西溝については、周辺の調査と地形観察から、遺跡中心部から続く流路の一部であると想定され、調査地付近まで菅原東遺跡関連の遺構が広がることが確認された。

また、右京三条四坊十・十五坪の様相については、条坊道路と宅地状況の観点から考察がなされている。条坊道路は十・十五坪内に存在すると想定されていた西四坊大路、西四坊坊間路、西四坊坊間西小路、三条条間路は確認できず、想定地では建物と堀の跡を検出した。また西四坊大路以西に建物などの遺構が一切確認できないことから、検出した建物遺構には、京の西端が意識されていた可能性がある。宅地状況は奈良時代Ⅰ期（奈良時代前期）、Ⅱ期（奈良時代中期）、Ⅲ期（奈良時代後期）、Ⅳ期（平安時代中頃）の 4 時期の変遷がみられる。

右京三条四坊十坪の出土土器と瓦について、この調査区では、飛鳥時代から奈良時代初頭の遺物が少量出土した。この時期の平城京内の建物は寺院など一部に限られ、通常の集落はほとんど確認できない。本調査区で可能性のある遺構は A 期の溝のみだが、周辺で平城京遷都以前何らかの営みがあったとも考えられている。また、他の祭祀具は伴わないが、奈良時代の土馬が出土している。軒瓦は 9 点出土した。このうち 6129 A 型式は平城京内でも出土が稀なものが 4 点まとまって確認され、京内からはほとんど出土しない鴟尾もみられた。丸・平瓦の出土も少なく、出土した遺構は一般的な宅地だが、付近に寺院が存在した可能性が考えられる。周辺の寺院には菅原寺（現喜光寺）がある。寺域内の調査で同様の軒瓦は、本堂南方から一点出土したのみである。6129A 型式の出土が比較的集中する平城京壬生門の所用瓦は明らかにされていないが、藤原宮式のものが多いを占めるようであり、6129A 型式の軒瓦は少数派となる。本調査地と壬生門は二条大路に近接する点で共通している。（高橋）

参考文献

秋篠・山陵遺跡調査会 1998 『秋篠・山陵遺跡－奈良大学附属高等学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』

秋篠・山陵遺跡調査会・奈良大学文学部考古学研究室・学校法人正強学園

今尾文昭 2014 『ヤマト政権の一大勢力 佐紀古墳群』新泉社

元興寺文化財研究所 2023 『菅原遺跡－令和 2 年度発掘調査報告書－』

菅原遺跡調査会 1982 『菅原遺跡－平城京西方丘陵基壇建物跡の発掘調査－』菅原遺跡調査会・奈良大学考古学研究室

奈良県教育委員会 1969 『菅原寺－喜光寺旧境内緊急発掘調査書－』

奈良県立橿原考古学研究所 1980『六条山遺跡』

奈良県立橿原考古学研究所 1991「平城京左京四条一坊十四坪」『奈良県遺跡調査概報 1990 年度（第一分冊）』

奈良県立橿原考古学研究所 1996「平城京 1995 年度調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1995 年度（第一分冊）』

奈良県立橿原考古学研究所 2002「東紀寺遺跡試掘・発掘調査概要」『奈良県遺跡調査概報 2001 年度（第一分冊）』

奈良県立橿原考古学研究所 2006『平城京左京五条二坊十五・十六坪』

奈良県立橿原考古学研究所 2010『奈良市平城京朱雀大路跡・下ッ道－国道 308 号線整備事業に伴う発掘調査報告書－』

奈良県立橿原考古学研究所 2011『平城京右京三条三坊・四坊－国道 308 号線整備事業に伴う発掘調査報告書（Ⅳ）』

奈良国立文化財研究所 1965「昭和 39 年度平城宮発掘調査概要」『奈良国立文化財研究所年報 1964』

奈良国立文化財研究所 1981『平城宮発掘調査報告 X』

奈良国立文化財研究所 1993『西隆寺発掘調査報告書』

奈良国立文化財研究所 1994『東紀寺遺跡』

奈良文化財研究所 2003『平城京左京二条二坊十四坪発掘調査報告－旧石器時代偏（法華寺南遺跡）－』

奈良市教育委員会 1991「平城京右京四条一坊一坪の調査 第 197 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 2 年度』

奈良市教育委員会 1992a「菅原東遺跡の調査 第 200 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 3 年度』

奈良市教育委員会 1992b「南紀寺遺跡の調査第 2 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 3 年度』

奈良市教育委員会 1994「平城京右京三条三坊・菅原東遺跡の調査 第 257-3 次」
『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 5 年度』

奈良市教育委員会 1995「平城京左京二条三坊四坪・菅原東遺跡第 293 次 縄文時代の調査」
『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 6 年度』

奈良市教育委員会 1997「古市遺跡の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 8 年度』

奈良市教育委員会 1998「柏木遺跡・平城京左京五条一坊十六坪の調査 第 338・370 次」
『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 9 年度』

奈良市教育委員会 1999「平城京右京三条四坊十坪・宝来遺跡の調査 第 386 次」
『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 10 年度』

奈良市教育委員会 2002「菅原東遺跡・平城京跡（右京三条二坊十一坪）の調査 第 443-7 次」
『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 12 年度』

奈良市教育委員会 2004a「油坂遺跡・平城京跡（左京三条四坊十三坪・東四坊大路）の調査 第 461・465・479 次」
『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 13 年度』

奈良市教育委員会 2004b「三条遺跡・平城京跡（左京四条五坊七坪）の調査 第 462-1～3・464 次」
『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 13 年度』

奈良市教育委員会 2016『赤田横穴墓群・赤田 1 号墳』

奈良市教育委員会 2022『富雄丸山古墳発掘調査報告書 第 1～5 次調査』

平城京左京四条三坊十一坪発掘調査会 1991『平城京左京四条三坊十一坪発掘調査報告書』
平城京左京四条三坊十一坪発掘調査会・奈良大学考古学研究室

前田俊雄・絹畠歩 2021「宝来横穴墓群出土陶棺」『森本六爾関係資料集Ⅳ』由良大和古代文化研究協会

第3章 検出遺構

第1節 各地区の概要（第3図）

調査区は建設予定地内で、現地形（水田畦）を考慮し、第Ⅰ～Ⅳ調査区を設定した。第Ⅰ調査区を北東側、第Ⅱ調査区を南東側、第Ⅲ調査区を北西側、第Ⅳ調査区を南東側に配置した。

A. 第Ⅰ調査区

第Ⅰ調査区は調査地の北東に東西16 m、南北7～9 mの128 m²の調査区を設けて調査した。基本層序は上から、耕土・床土・青灰色砂質土・黄灰褐色砂質土・灰黄褐色砂質土・灰黄褐色粘質土と堆積し、遺構はG L－40～50 cmの黄灰褐色砂質土上面から掘り込まれている。ただし、遺構検出にあたっては、これより下の灰黄褐色粘質土上面で検出した。

検出した遺構には、調査区の北東で古代の井戸、北西で斜行する溝（北西への落ち込み）があるのみで、遺構密度は低い。特に南半は、遺構検出段階で過度に掘り下げたためと考えられる。

B. 第Ⅱ調査区

第Ⅱ調査区は調査地の南東に東西14 m、南北15 mの210 m²の調査区を設けて調査した。基本層序は上から、耕土（黒褐色土）・床土（黄茶褐色粘質土）・暗赤褐色粘質土・暗灰褐色砂質土・暗灰茶褐色砂礫土・暗茶褐色粘質土・淡灰褐色粘土と堆積する。遺構面は二層あり、G L－90 cmの暗茶褐色粘質土上面で古代の遺構が、G L－40～50 cm暗灰茶褐色砂礫土上面から中世の遺構が掘り込まれている。

検出した遺構には、調査区南辺で古代の土坑・井戸・東西溝を、また北半で中世の掘立柱建物・堀・土坑などがある。この他に、組み合わない小柱穴がいくつか散在しているが、柱穴形態からみて、中世に属するものであろう。

C. 第Ⅲ調査区

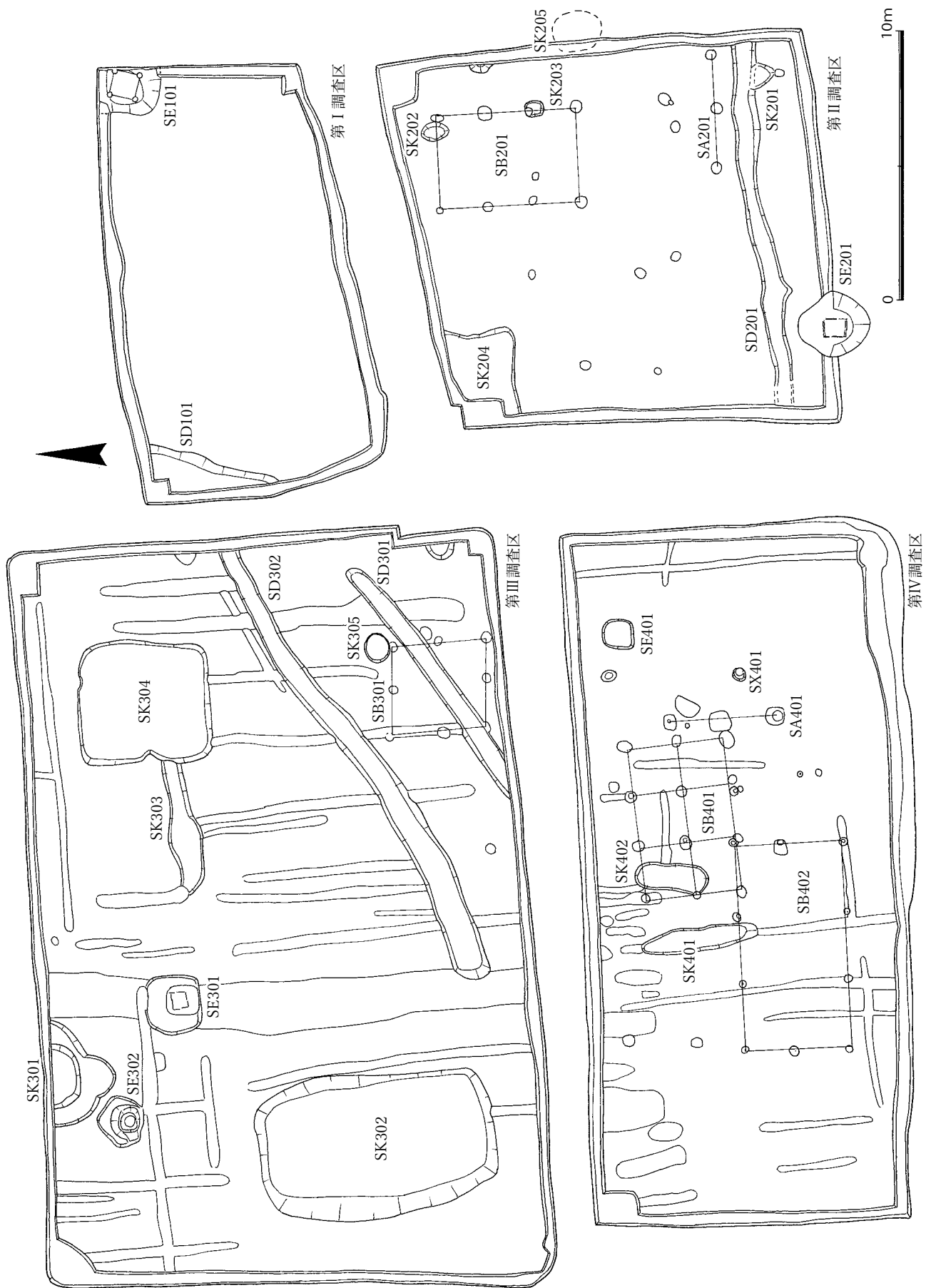
第Ⅲ調査区は調査地の北西に東西27 m、南北18 mの486 m²の調査区を設けて調査した。基本層序は上から、耕土（黒灰色土）・黄赤褐色粘質土（床土）・暗灰褐色砂礫土・暗灰茶褐色粘土と堆積し、遺構はG L－100～110 cmの暗灰茶褐色粘土上面から掘り込まれている。

検出した遺構には、古代の土坑・井戸、中世の掘立柱建物・土坑・斜行溝がある。中世の遺構は調査区の南東に集中する。この他、調査区全域で耕作に伴う多数の素掘溝がある。

D. 第Ⅳ調査区

第Ⅳ調査区は調査地の南西に東西26 m、南北12 mの312 m²の調査区を設けて調査した。基本層序は上から、耕土（黒灰色土）・黄赤褐色粘質土（床土）・暗灰褐色砂質土・暗灰褐色砂礫土・暗茶灰褐色粘土と堆積し、遺構はG L－100 cmの暗灰茶褐色粘土上面から掘り込まれている。

検出した遺構には、古代の掘立柱堀、中世の掘立柱建物・土坑などがある。この他に、小柱穴がいくつかあるが、建物等にはまともらない。柱穴形状からみて、中世に属するものであろう。また、調査区西半に、耕作に伴う東西南北の素掘溝が多数掘られている。（相原）



第3図 全体平面図 (1:200)

第2節 古代の遺構

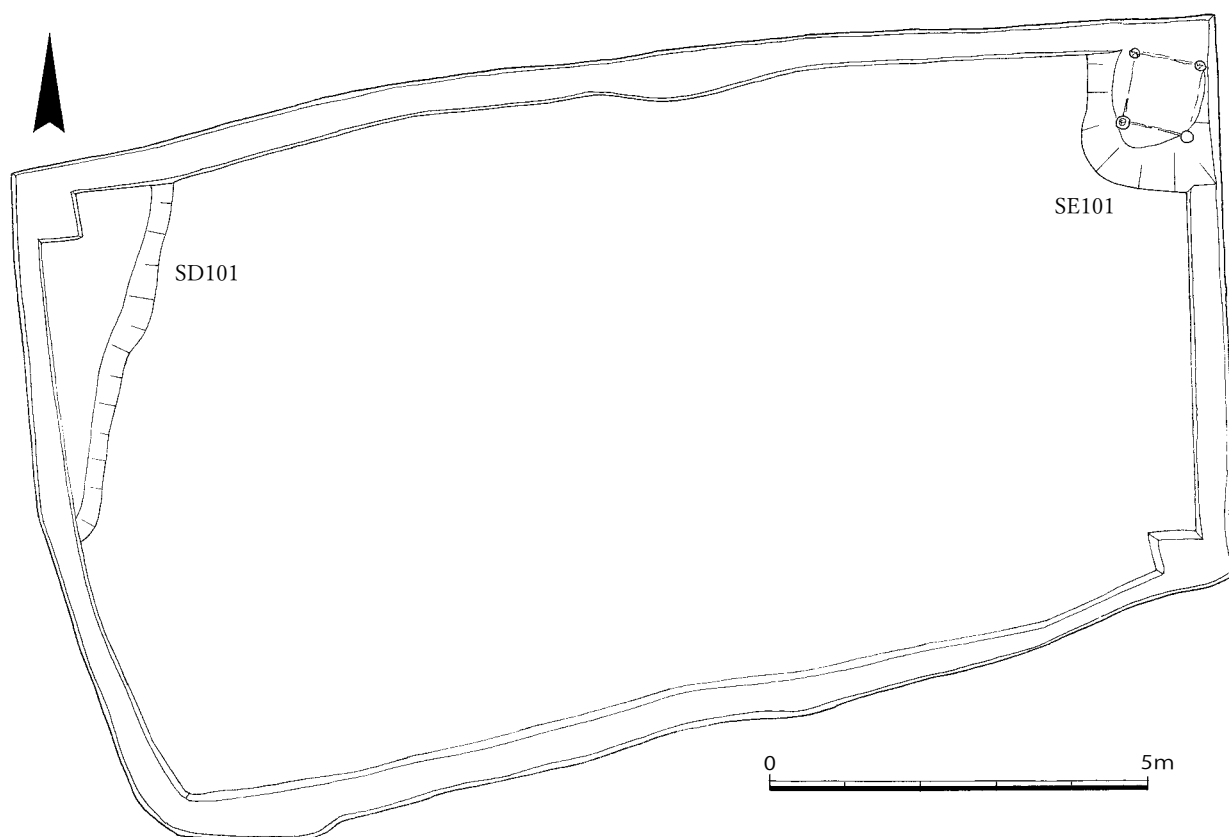
A. 第Ⅰ調査区（第4・5図）

斜行溝 SD 101 調査区の北西隅で検出した溝で、南西から北東へと伸びる。西肩が未確認であるため、落ち込みの可能性もある。検出長 5.0 m、幅 2 m 以上、深さ 40 ～ 50 cm である。埋土は上から淡灰黄褐色砂質土（礫混じり）・暗灰茶色砂礫土、暗灰茶色砂礫と堆積する。

井戸 SE 101 調査区の北東隅で検出した方形縦板組の井戸である。東面の井戸枠は、内側に押し倒されて、現位置を保っていないが、内寸法 90 cm の井戸である。掘形は調査区の関係で確定できないが、一辺 1.8 m 以上の隅丸方形を呈し、深さは 1.7 m で、ほぼ垂直に掘削されている。この中の四隅にほぞ穴を孔けた 8 cm 程度の角柱を立て、5 cm の角材を横棧とする。その外側の隙間に、幅 15 ～ 20 cm の縦板を 7 枚程度立てる。井戸枠内の埋土は上から黄灰粘砂質土と暗灰砂質土が堆積する。出土遺物としては、大量の土師器皿の他、製塩土器・奈良三彩壺・埴・砥石などがある。奈良時代中頃～後半に属する。

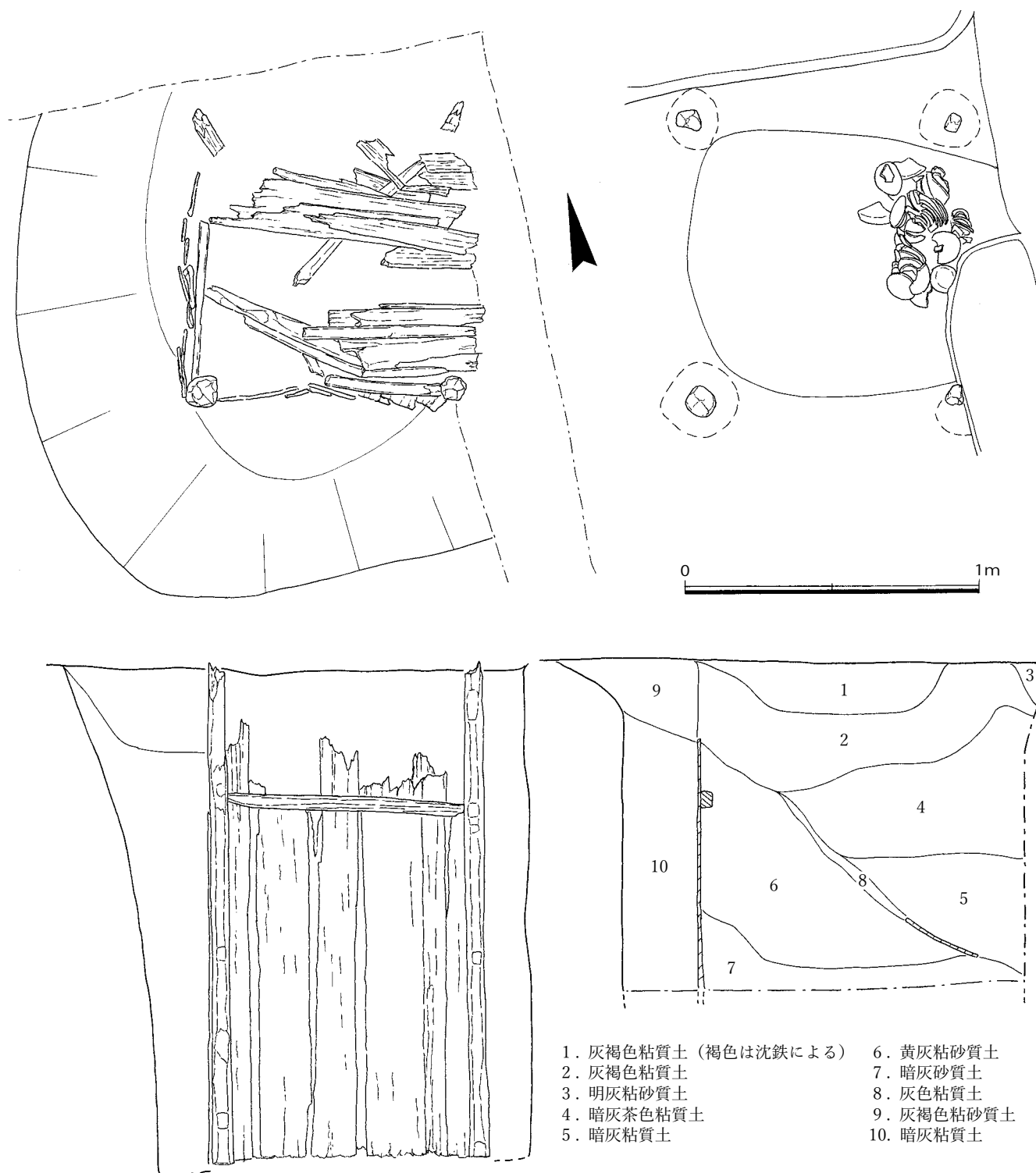
B. 第Ⅱ調査区（第6・7図）

素掘溝 SD 201 調査区の南側で検出した東西溝である。方位に対して、東でわずかに北へ振れる。長さ 14m、幅 60 ～ 90cm（壁面観察では 1.5 m）、深さ 40cm。埋土は暗灰褐色砂質土が堆積し、土坑 S K 201 よりも新しい。



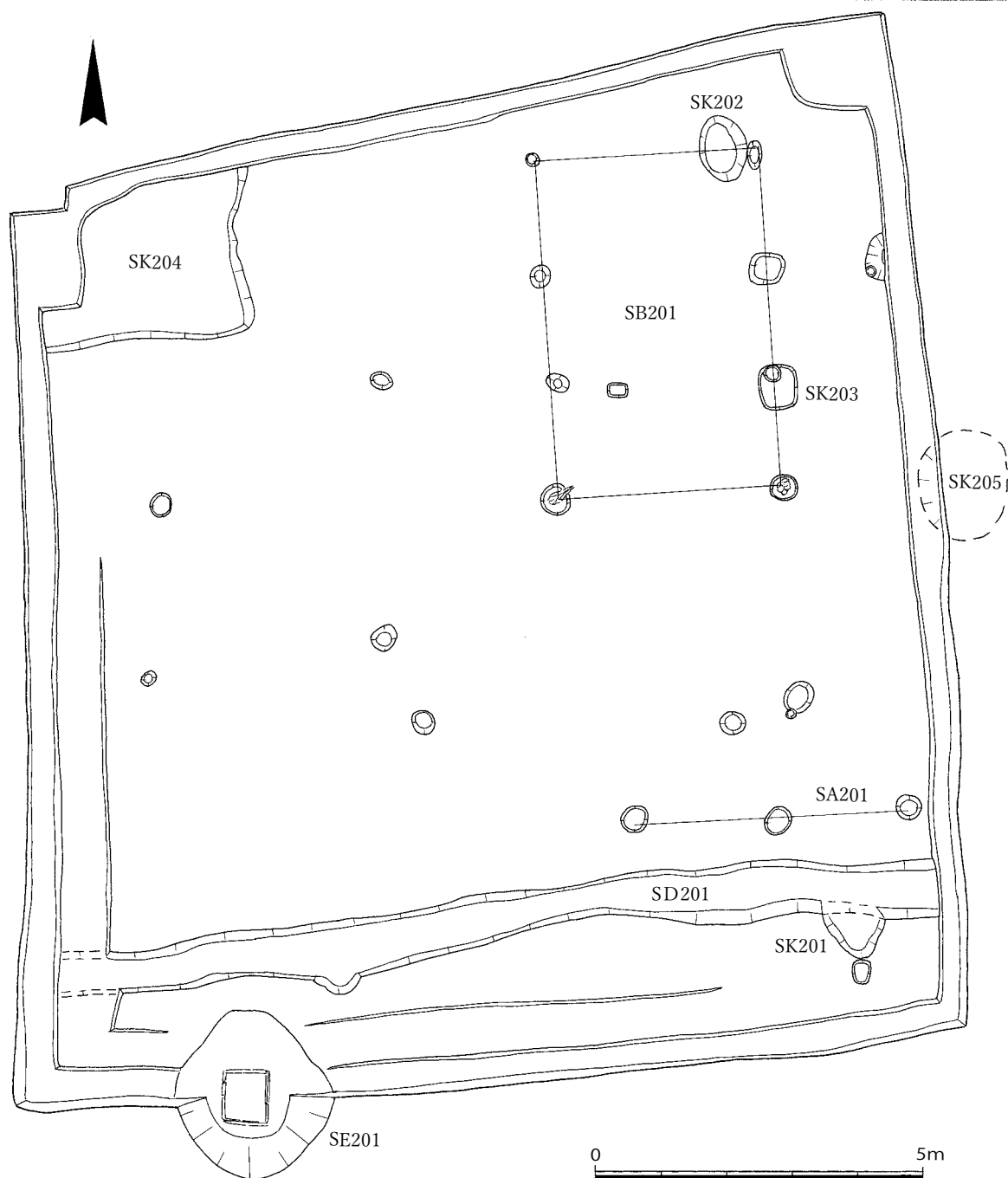
第4図 第Ⅰ調査区 平面図（1：100）

井戸 SE 201 調査区の南西部で検出された方形縦板組の井戸である。井戸の内寸は南北 74cm、東西 58cm と平面長方形である。掘形の平面形は直径 2.4 m の歪な円形を呈し、深さ 2.1 m である。東側は二段の階段状に掘削しているが、西側は下部ほど狭くなる。井戸枠の下部に集水施設のための長方形の掘形（南北 60 cm、東西 70 cm）を掘削して、曲物を据える。掘形埋土は暗灰茶色粘質土である。

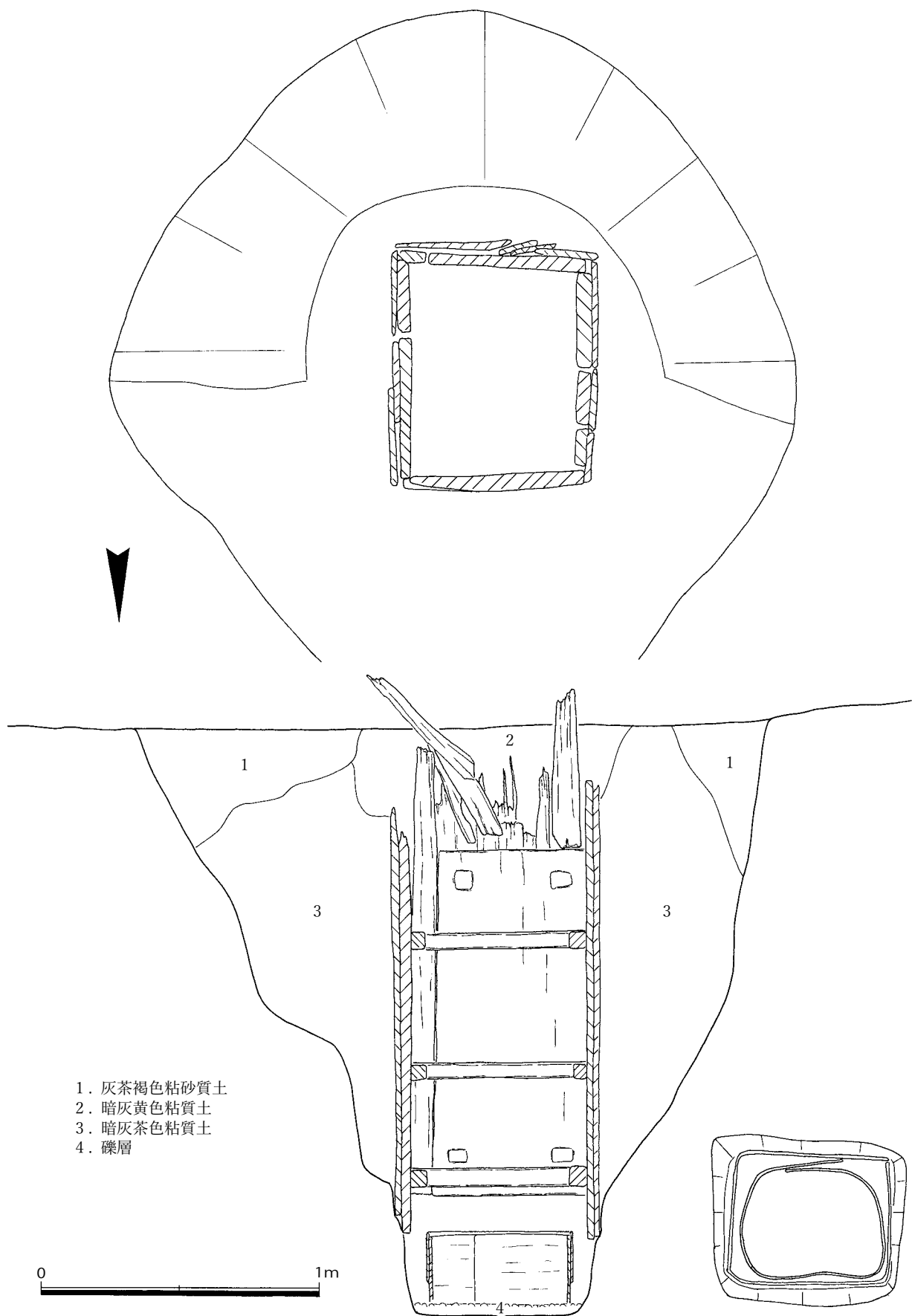


第5図 第I調査区 SE 101 (1:20)

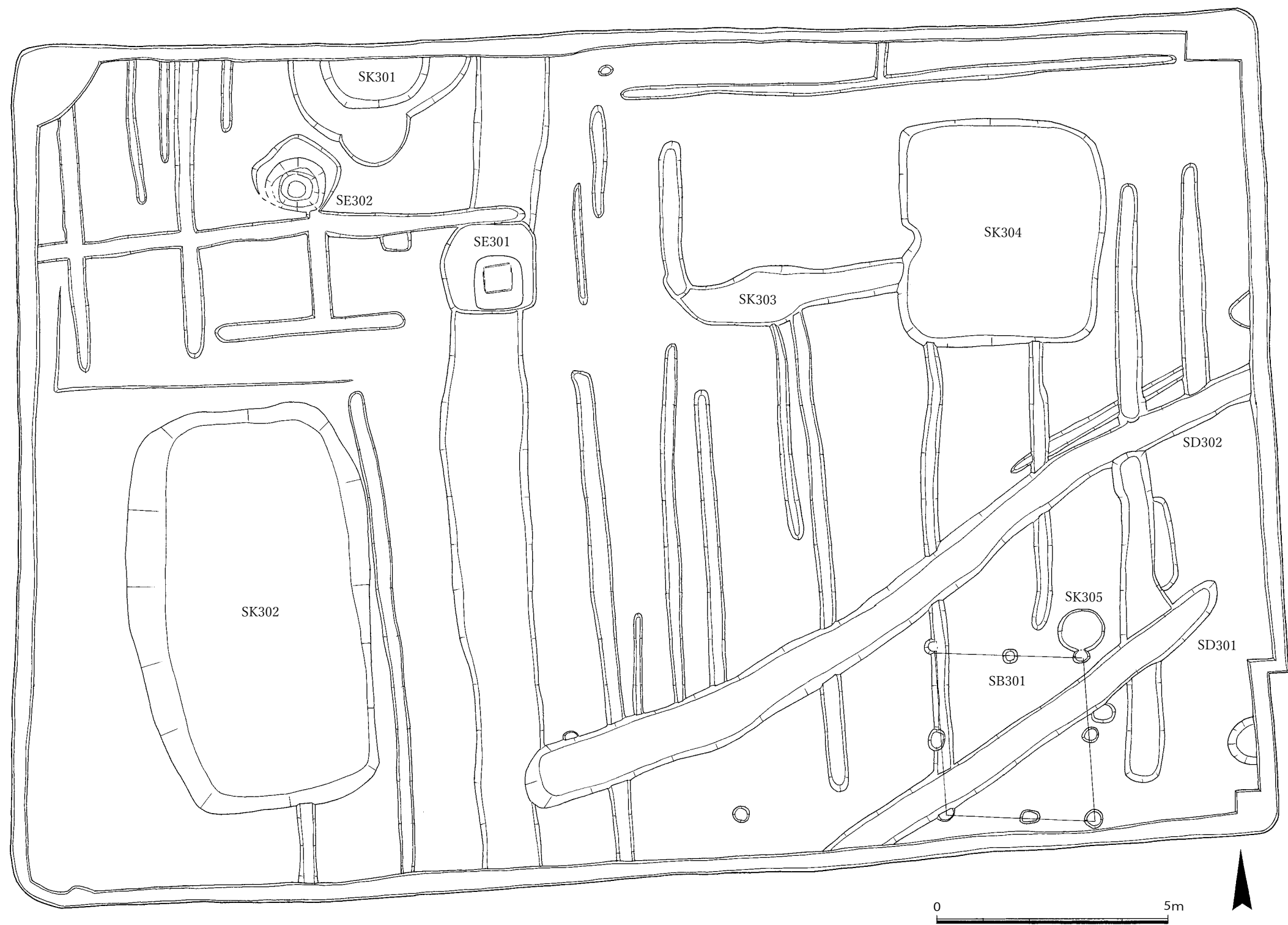
掘形底部に2～5cm程度の礫を敷き、その上に高さ25cm、厚み1cmの曲物を、南北35cm、東西50cmの隅丸長方形に設置している。この集水施設の上に井戸枠を据えるが、南面は長さ1.2m、幅55cm、厚み5cmの縦板1枚と、幅10cmの縦板によって構成される。特に、幅50cmの縦板には上下2箇所ずつ、計4箇所の方形孔が空けられていることから、転用材と考えられる。南面は幅65cm、厚み5cmの一枚板で構成する。これに対して、東面・西面は長さ140～160cm、幅10～55cm、厚み5cmの縦板を複数枚並べている。さらに東・西・北面の井戸枠の外側には、幅30～40cmの薄い縦板が重ねられている。これらの縦板材は、一辺5cmの各材を横棧として、三段で



第6図 第II調査区 平面図 (1:100)



第7図 第Ⅱ調査区 S E 201 (1 : 20)



第8図 第Ⅲ調査区 平面図（1：100）

固定する。軒平瓦 6727A が出土している。

土 坑 S K 201 調査区の東南で検出した南北 70cm、東西 80 cm、深さ 15cm の土坑である。S D 201 よりも古い。

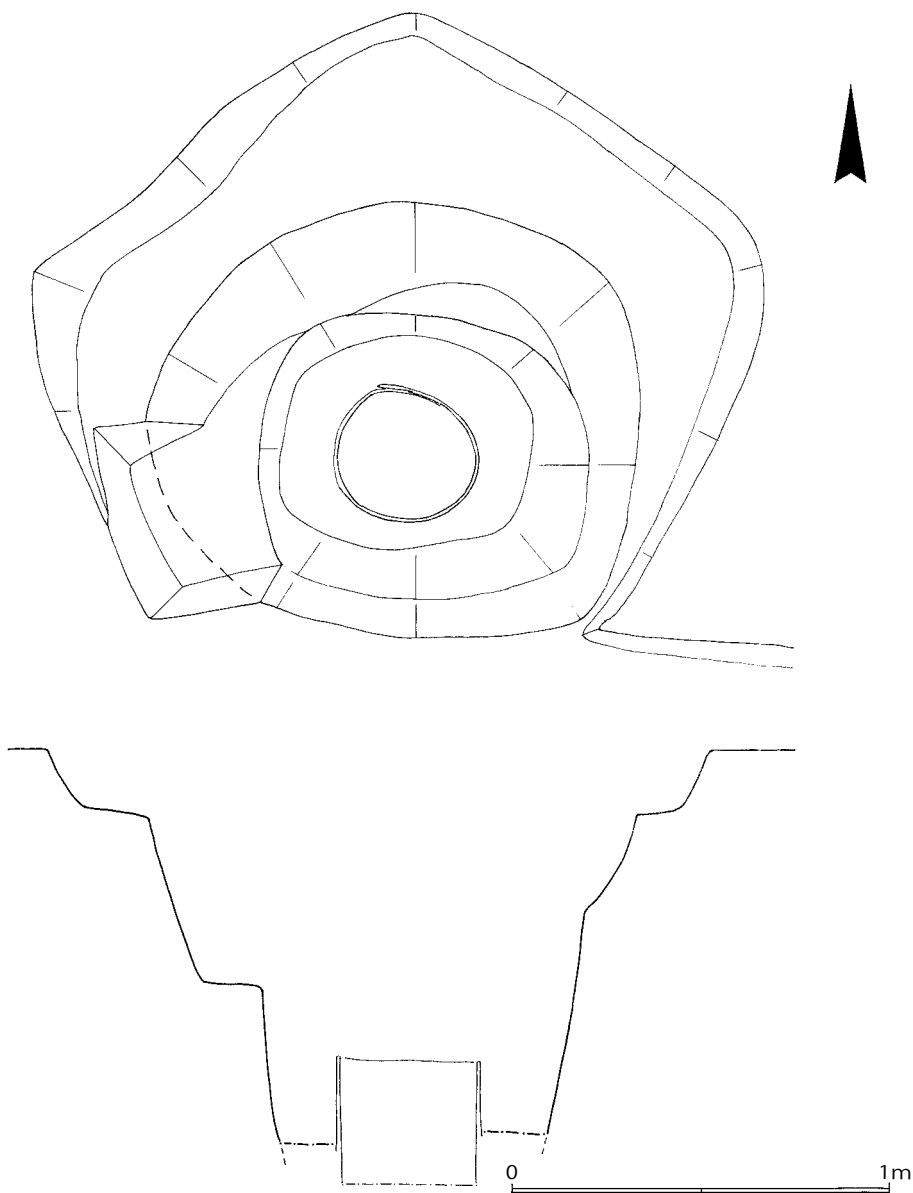
土 坑 S K 202 調査区の北東で検出した南北に長い楕円形をした土坑である。南北 1 m、東西 70cm、深さ 24cm である。S B 201 柱穴との位置関係から、古代のものと推定した。

土 坑 S K 203 調査区の南側で検出した南北 70 cm、東西 60 cm、深さ 5.5cm の隅丸方形の土坑である。S B 201 の柱穴と重複し、S K 203 が古い。

C. 第Ⅲ調査区（第 8～10 図）

井 戸 S E 301 調査区の北西で検出した方形縦板組の井戸である。内寸は南北 50cm、東西 60 cm で、井戸枠の深さ 1.1 m となる。掘形は隅丸方形で、断面は井戸底に向けて、湾曲して掘られている。掘形埋土は、上から淡黄褐色粘質土・暗灰茶色粘土・暗灰黒色粘土と堆積する。井戸枠は下部に高さ 35 cm 程度の横板を組み、上部には長さ 75 cm、幅 10～20 cm 程度の縦板を 3～5 枚立てて井戸枠とする。一方、北面のみ、幅 55 cm の大型の板材を使用している。下部と上部の井戸枠の境界付近に、7 cm 角の横棧で井戸枠を留めているが、東横棧は調査時には外れて井戸底に落下していた。出土遺物には、軒丸瓦 6308C・墨書土器・製塩土器などがあり、奈良時代末～平安時代初頭の土器が出土する。

井 戸 S E 302 調査区の北西で検出された曲物の井戸であるが、この曲物は、井戸枠の下層に設置された集水施設であった可能性もある。掘形は南北 1.7 m 以上、東西 1.95 m で、やや隅丸方形を呈している。掘形断面は三段の階段状を呈するが、これは井戸枠の抜き取り痕跡の可能性が高い。井戸枠の曲物は、この底部に設置されており、直径 35 cm、高さ 35 cm を有す

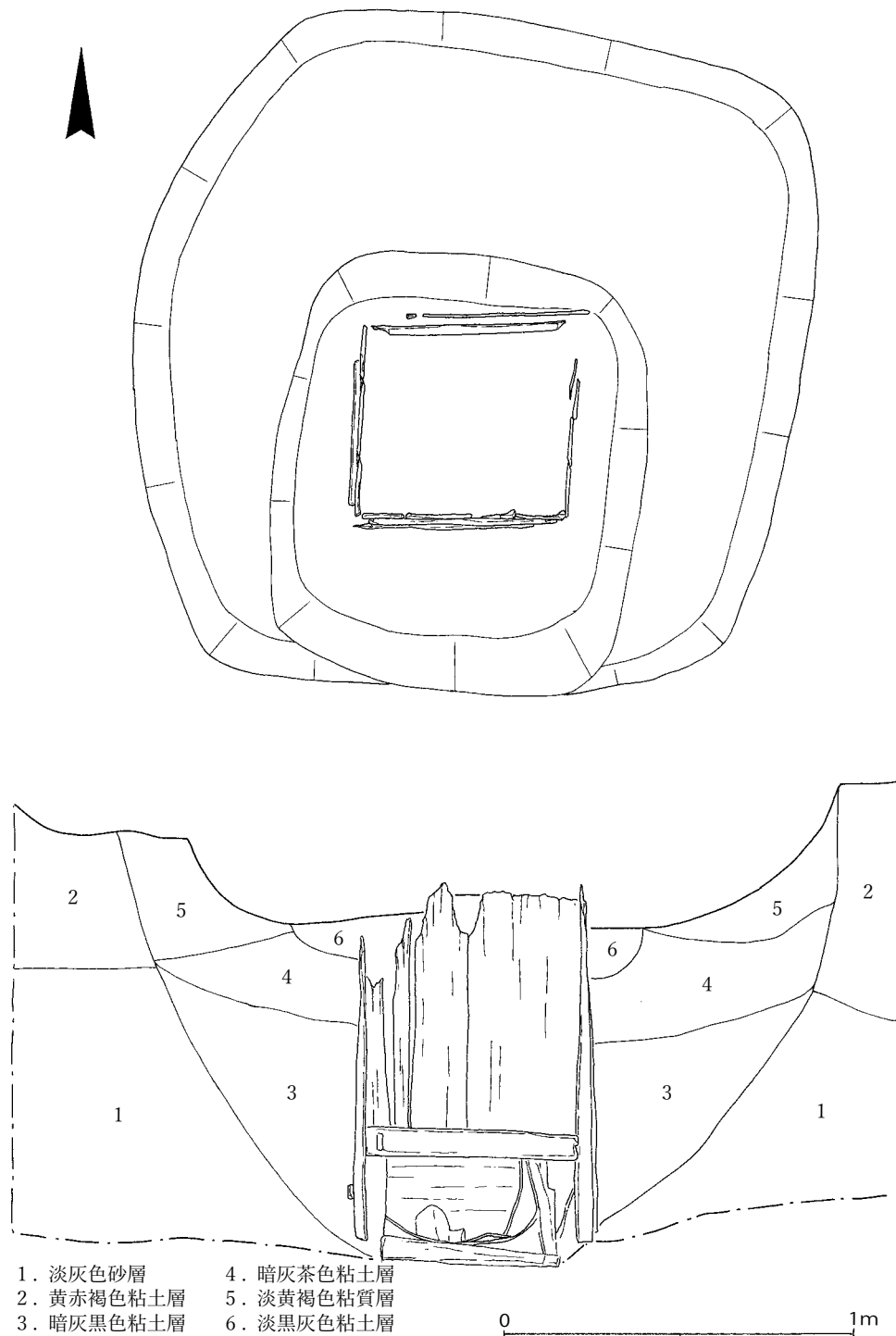


第 9 図 第Ⅲ調査区 S E 302（1：20）

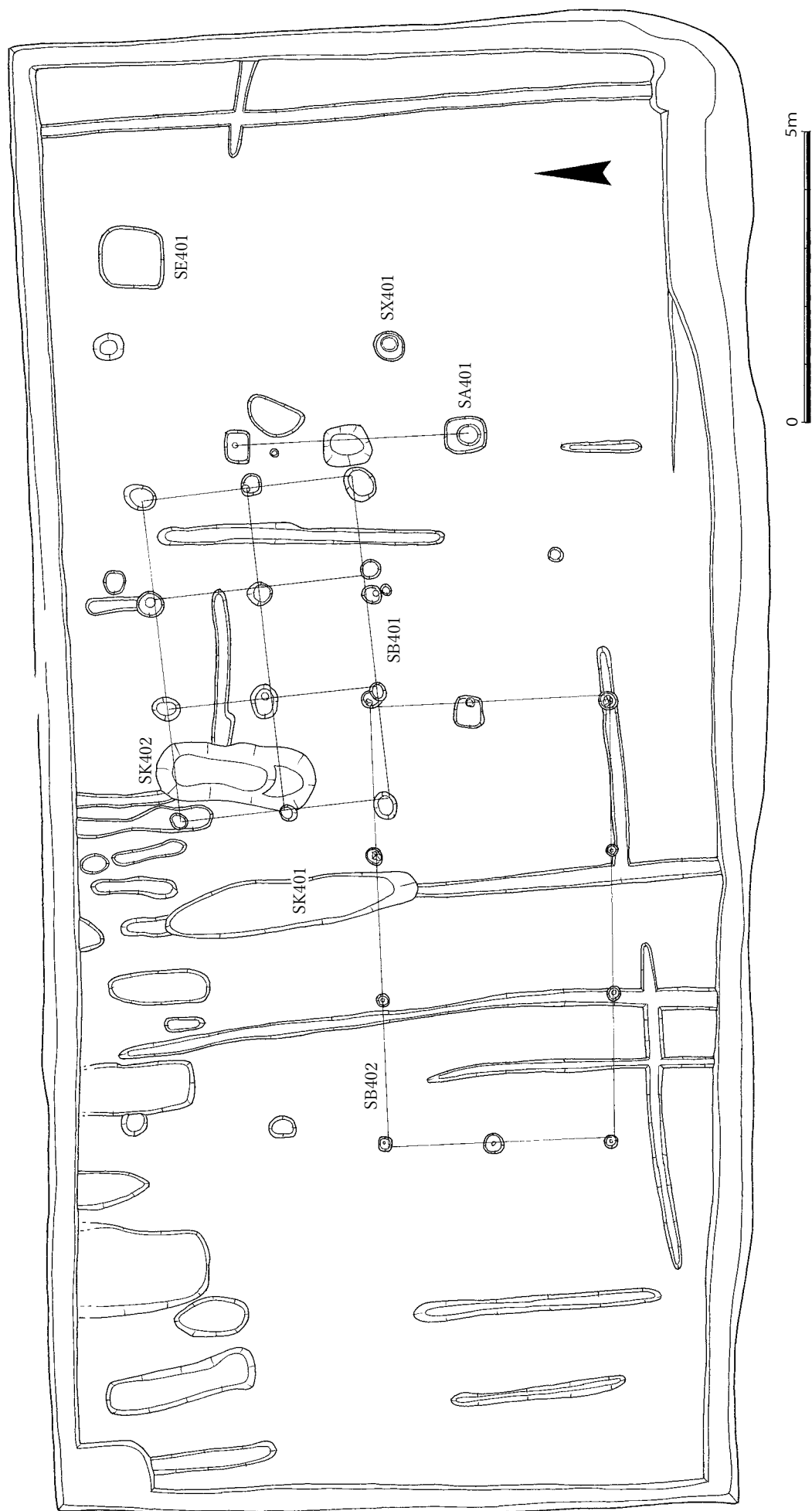
る円形を呈する。出土遺物には、軒丸瓦 6140A・軒平瓦 6664H・埴などがあり、奈良時代末～平安時代初頭の土器が出土する。

土 坑 S K 301 調査区の北辺で検出した南北 2.6 m 以上、東西 3.8 m、深さ 30cm の円形の土坑である。北半は、調査区外に広がる。断面形は二段になっており、上段は浅い窪みの可能性があり、その中央に東西 2.4 m の円形（北半は調査区外）で、深さ 20 cm である。

土 坑 S K 302 調査区の西南で検出した南北 8.6 m、東西 5.3 m、深さ 25cm の隅丸



第 10 図 第Ⅲ調査区 S E 301 (1 : 20)



第11図 第IV調査区 平面図 (1 : 100)

長方形の大型の土坑である。埋土は灰褐色粘土である。出土遺物には軒丸瓦 6140A や塼、円面硯がある。奈良時代末～平安時代初頭に属する。

土 坑 S K 303 調査区の北東で検出した南北 70 ～ 120 cm、東西 5 m、深さ 8 cm の東西に長い溝状の土坑である。この土坑は、東端で土坑 S K 304 と重なっており、S K 303 の方が古い。奈良時代末～平安時代初頭の土器が出土する。

土 坑 S K 304 調査区の北東で検出した南北 4.9 m、東西 4.5 m、深さ 8 cm の隅丸長方形の大型の土坑である。この土坑は、西端で土坑 S K 303 と重なっており、S K 304 の方が新しい。出土遺物には塼・製塩土器・土馬があり、奈良時代末～平安時代初頭の土器が出土する。

D. 第Ⅳ調査区（第 11 図）

掘立柱塼 S A 401 調査区の東側で検出した 3 基の柱穴で構成される南北掘立柱塼である。一辺 40 ～ 75 cm の隅丸方形の掘形で、直径 10 cm の柱痕跡がある。柱間寸法は 2 m である。他にこれに組み合う柱穴はみられない。

土 坑 S K 401 調査区のやや北側で発見された南北 4.3 m、東西 90 cm、深さ 40 cm の南北に長い楕円形をした溝状の土坑である。 (中田)

第 3 節 中世の遺構

A. 第Ⅱ調査区（第 6 図）

掘立柱建物 S B 201 調査区北東部で検出した桁行 3 間 (5.2 m)、梁行 1 間 (3.5 m) の南北棟掘立柱建物である。梁行寸法はやや広いが、南北の妻柱が確認できなかったため、1 間とみる。柱穴は径 30 ～ 40 cm 程度の円形を呈する。桁行の柱間寸法は 1.7 m である。南西隅の柱穴には 15 cm 程度の柱根が残る。S K 203 よりも新しい。

掘立柱塼 S A 201 調査区南東部で検出した東西 2 間の柱列である。周辺に組み合う柱穴がないことから、東西に伸びる掘立柱塼であると推定され、東は調査区外にのびる可能性がある。柱穴は径 40 cm の円形を呈し、深さは、検出面より約 12 ～ 15 cm である。柱間寸法は、2.1 m である。

土 坑 S K 204 調査区北西隅で検出した方形遺構である。平面形状は隅丸方形を呈し、南東角のみ確認できた。検出時は南北辺 2.6 m、東西辺 3.2 m、深さは検出面より 18 cm である。北西部分は調査区外に続くため、全貌は不明。

土 坑 S K 205 調査区東端中央の壁面で検出した土坑である。平面規模は残存箇所では南北 140 cm、深さ 60 cm を測り、楕円型を呈する。12 世紀前半～中頃の瓦器椀・土師器羽釜が出土している。

B. 第Ⅲ調査区（第 8 図）

掘立柱建物 S B 301 調査区南東隅で検出した桁行 2 間 (3.5 m)、梁行 2 間 (3.2 m) の、ややゆがむ南北棟掘立柱建物である。柱穴は径 30 ～ 45 cm の円形を呈する。柱間寸法は桁行 1.8 m、梁行 1.7 m である。S D 301 よりも古い。

斜行溝 S D 301 調査区の南東部分で検出した西南から北東へ流れる斜行溝である。南西部は調査区外に続く。S D 302 とは、溝心々で 3.9 m 離れて並行する。検出長 9.5 cm、幅 70 cm、深さは 35 cm である。軒平瓦 6765A・塼・製塩土器・土師器皿、土師器羽釜・瓦器椀・土師器甕

片が出土する。S B 301 より新しい。

斜行溝 S D 302 調査区の南東部分で検出した西南から北東へ流れる斜行溝である。北東部は調査区外に続く。S D 301 と並行する。検出長 18m、幅 70 cm～1 m、深さは 20 cm である。幅は西肩ほど広く、東に向かうほど狭くなる。出土遺物は、須恵器杯、蓋が出土している。

土坑 S K 305 調査区南東部で検出した南北 95 cm、東西 110 cm、深さ 15 cm の円形の土坑である。S B 301 の柱穴との前後関係は明確ではない。

C. 第IV調査区（第 11・12 図）

掘立柱建物 S B 401 調査区中央部で検出した桁行 3 間（5.5 m）、梁行 2 間（3.5 m）の総柱の東西棟掘立柱建物である。柱穴は 30～40 cm の円形を呈する。柱間寸法は桁行 2 m、梁行 1.7 m である。柱穴からは、瓦器椀や土師皿が出土している。S B 402 より新しい。

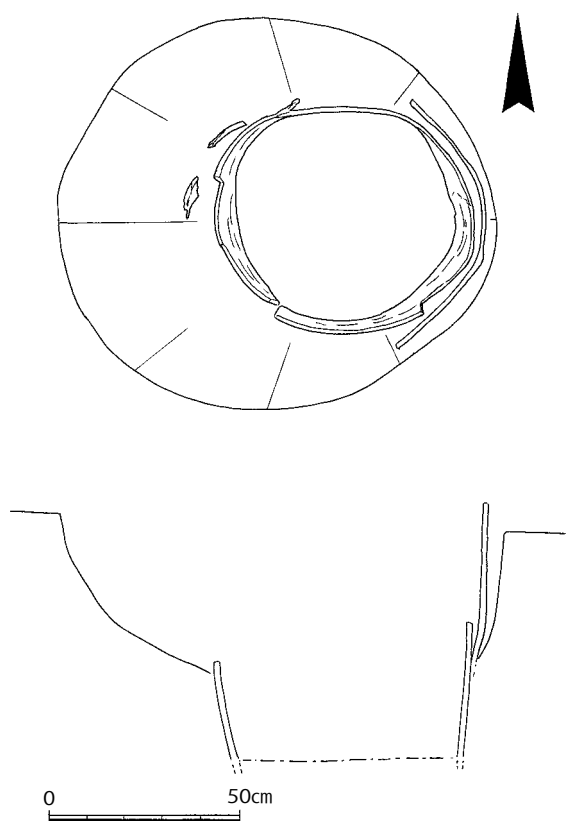
掘立柱建物 S B 402 調査区中央部南寄りで検出した桁行 3 間（7.5 m）、梁行 2 間（3.8 m）の東西棟掘立柱建物である。柱穴は径 30 cm の円形を呈し、間は桁行 2.5m、梁行 1.8m である。S B 401 より古い。

井戸 S E 401 調査区北東隅で検出した井戸である。平面は隅丸方形を呈する。掘形は一辺 110 cm を測り、深さは検出面より 60 cm を測る。

土坑 S K 402 調査区中央北寄りで検出した土坑である。長径 2.7 m、短径 1 m の南北に伸びる楕円形を呈し、深さ 25 cm である。S B 402 より古い。小型瓦 6681S が出土している。

不明遺構 S X 401 調査区東半で検出した径 110 cm の円形土坑である。土坑の東寄りに、径 60～70cm の木製曲物が据えられている。曲物は二段に積み上げられていたことがわかる。出土遺物は瓦器椀、土師皿が出土している。

（森山）



第 12 図 第IV調査区 S X 401（1：20）

第4章 出土遺物

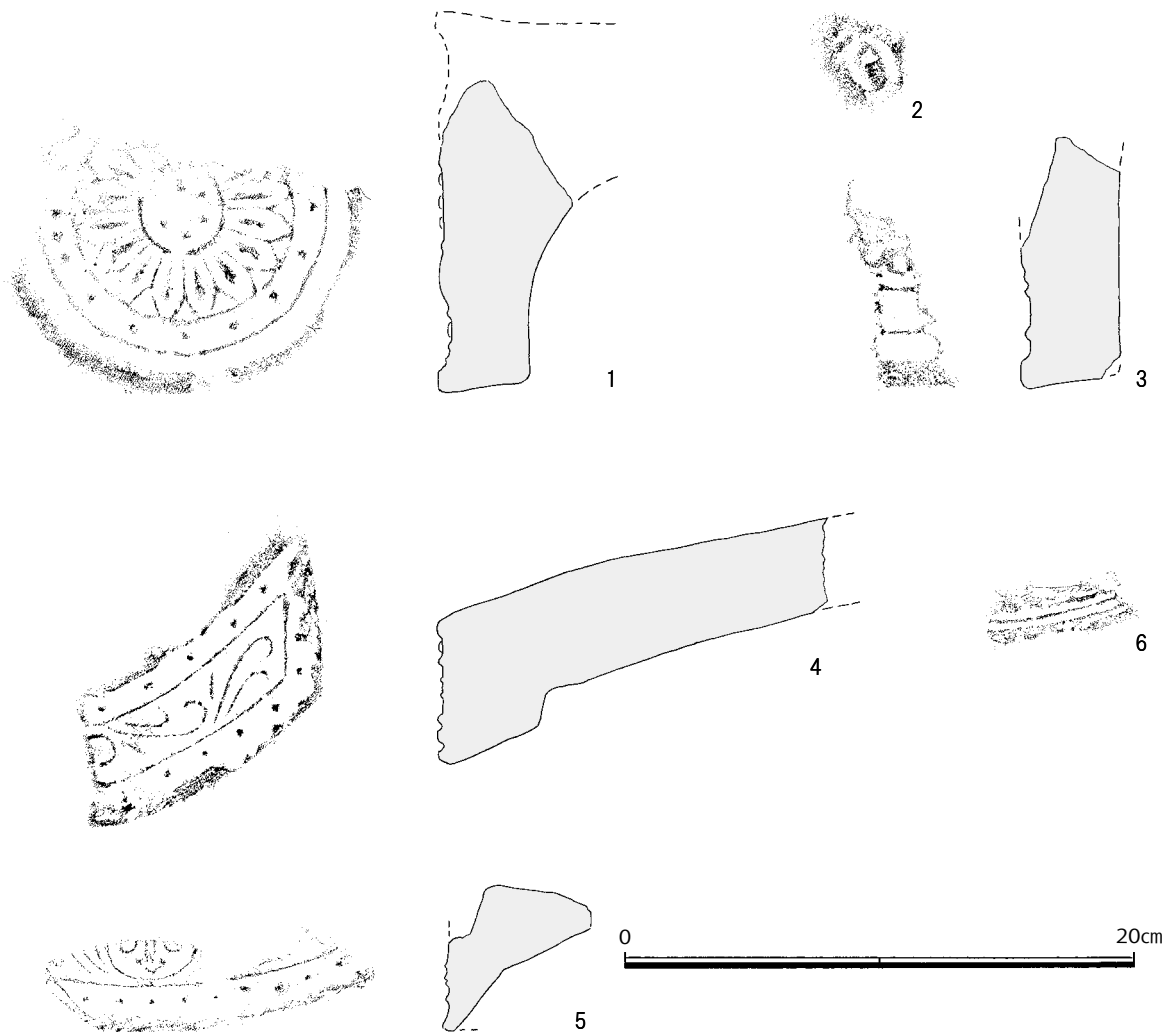
第1節 瓦塼類

A. 瓦類 (第13・14図)

瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・小型軒平瓦・小型丸瓦がある。いずれも奈良時代に属するものと思われ、新しい瓦は含まれていない。出土量は破片数で538点（総重量69.43 kg）である。内訳は破片数と重量で、軒丸瓦3点（1.15 kg）・軒平瓦3点（1.89 kg）・丸瓦59点（9.92 kg）・平瓦468点（55.01 kg）・小型軒平瓦2点（0.98 kg）・小型丸瓦3点（0.48 kg）である。丸・平瓦は細片が多いため、ここでは軒瓦及び小型瓦を中心に記す。なお、小型瓦の識別については、注意を払って行ったが、丸平瓦の細片の場合、識別が困難である。

軒丸瓦は3点、3型式が出土している。（第13図）

6140A 型式（1） 瓦当面の2/3が遺存する。一本造りで、瓦当裏面を指押さえをしている。



第13図 軒丸・軒平瓦（1：3）

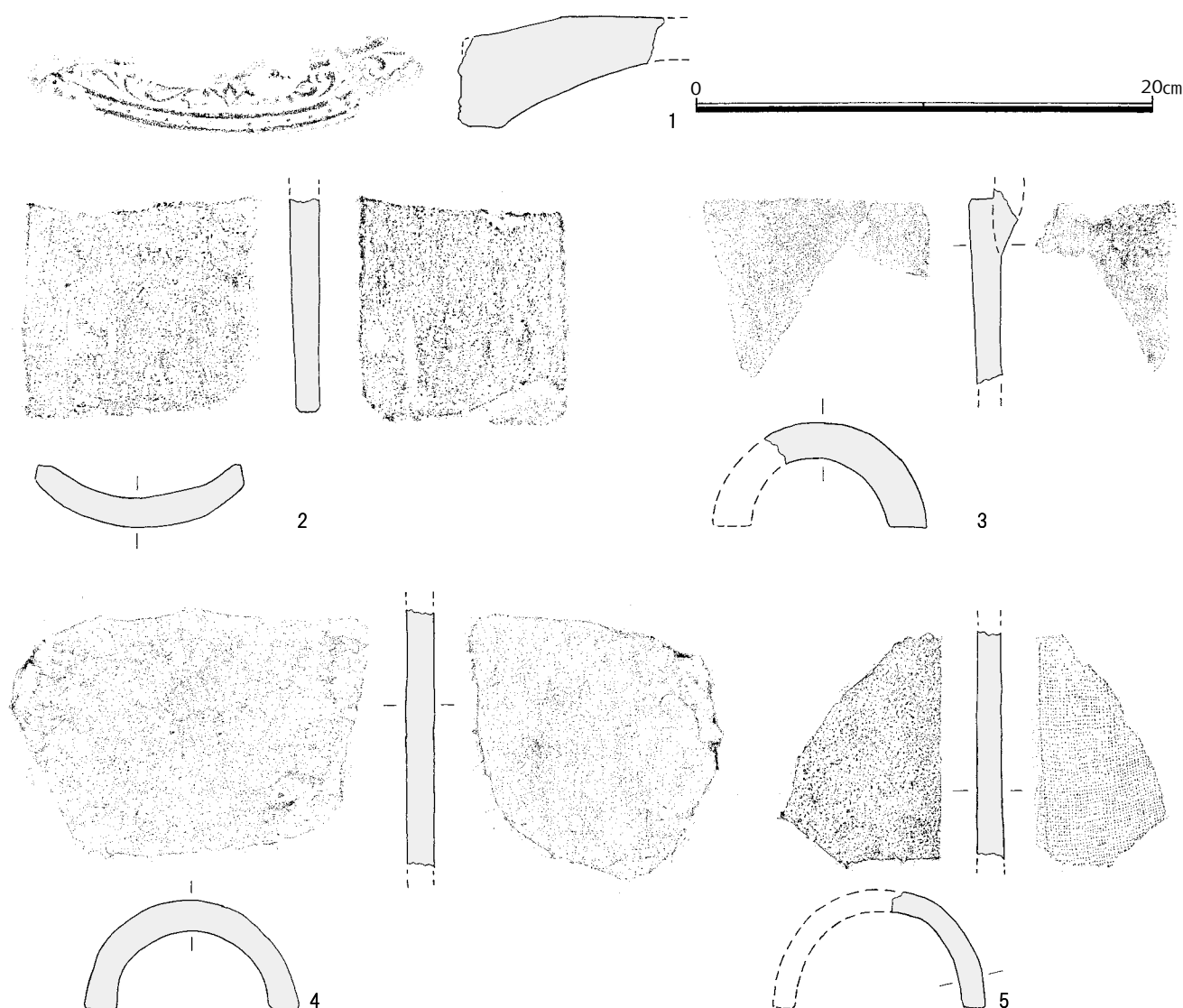
胎土は精良で、焼成は軟質で粉が付く。色調は灰白色である。Ⅲ－２期に属する。Ⅲ区 S K 302 出土。

6129A 型式（２） 瓦当面のうち、わずかに花卉一枚分のみ遺存する。胎土は精良で、焼成は軟質で粉が付く。色調は灰白色である。右京三条四坊十坪で同範瓦が出土。Ⅲ区包含層出土。

6308C 型式（３） 瓦当面のうち、わずかに花卉の一部と外区内文珠文・外区外縁の一部が遺存する。瓦当裏面が真っ直ぐで、削っていることから、丸瓦とは別に造られていることがわかる。胎土は 1 mm 以下の石英を含むが精良で、焼成は軟、色調は灰白色である。Ⅱ－２期に属する。Ⅲ区 S E 301 出土。

軒平瓦も 3 点、3 型式が出土している。（第 13 図）

6727A 型式（４） 瓦当側面から 2/3 が遺存する。瓦当は段顎になっており、接合部を撫でており、平瓦凸部は粗い縄痕跡が残る。凹部は削っている。胎土は良好で、焼成はやや軟質で粉が付く。色調は灰白色である。押熊瓦窯産。Ⅱ－２期に属する。Ⅲ区 S E 302 出土。



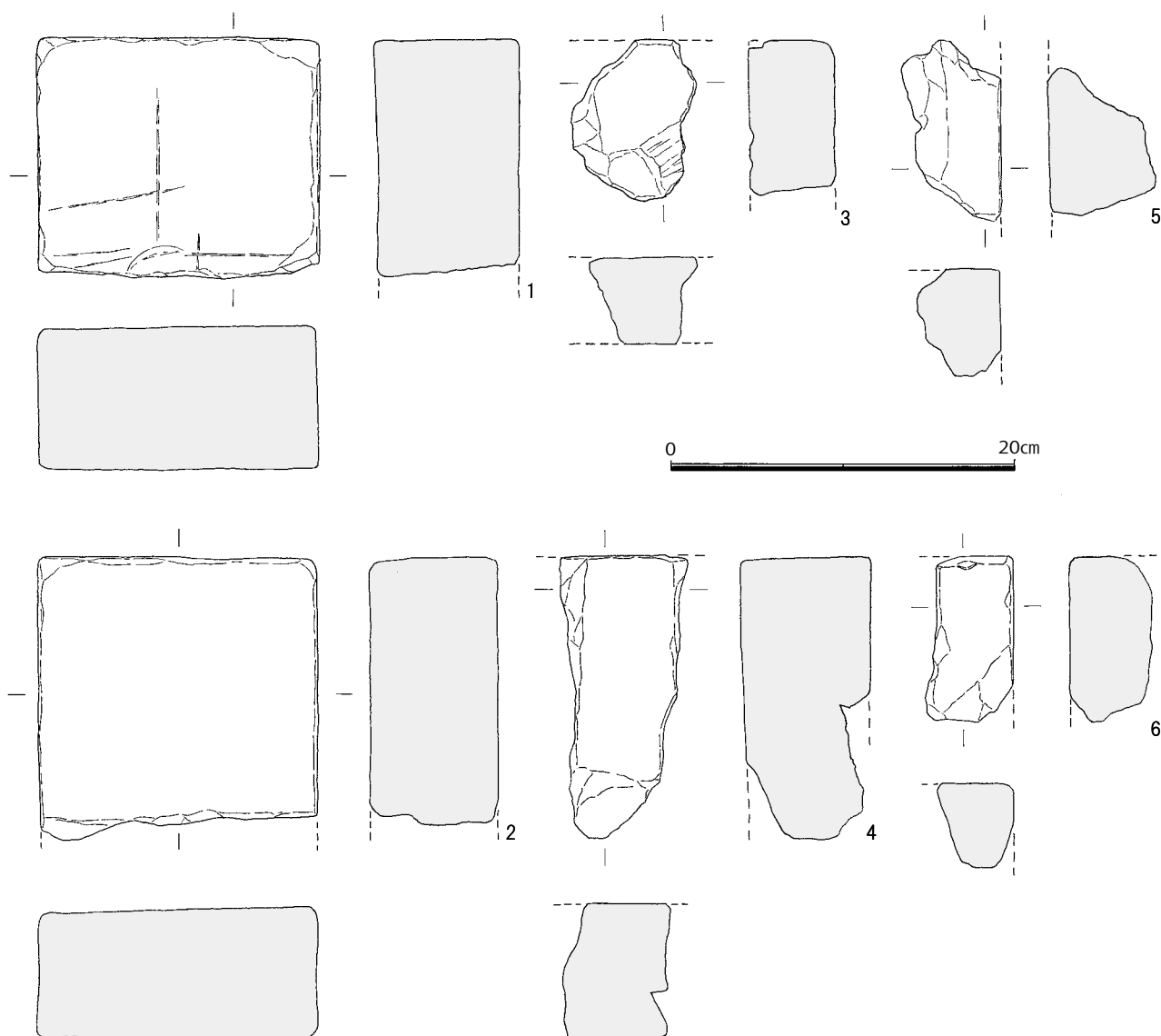
第 14 図 小型瓦（１：３）

6664H 型式（5） 瓦当幅の 1/4 が遺存するが、瓦当文様のうち内区文様の下半及び下外区が残る。顎面は破損のため遺存しないので調整不明。胎土は精良で、焼成はやや軟質。色調は灰白色である。同坪内の奈良市 222 次でも出土している。Ⅰ－Ⅰ 期に属する。Ⅲ区 S E 302 出土。

6663 型式（6） 瓦当面の細片であるため、6663A 型式か B 型式かの細別はできない。わずかに下外区文様を確認できる。胎土は精良、焼成は軟質。色調は灰白色である。6663A 型式は同坪内の奈良市 222 次でも出土している。Ⅱ－Ⅱ 期に属する。Ⅳ区出土。

小型軒瓦は 2 点、2 形式が出土している。（第 14 図）

6765A 型式（1） 瓦当から平瓦部の一部まで遺存する。瓦当面は中心飾りから両側 2/3 ほど遺存するが、上外区部分は破損している。瓦当は曲線顎で丁寧に削っている。平瓦部凹面には布目の痕跡が残る。顎部と平瓦部凸面の境にわずかに朱線が残る。胎土は良好であるが、瓦当面に 1.2 cm 程度の大型の石英が含まれる。焼成はやや軟質で粉が付く。色調は灰白色である。菅原遺



第 15 図 埴（1：4）

跡でも出土している。Ⅲ－2期に属する。Ⅲ区S D 301出土。

6681S 型式（2） 平瓦部しか遺存しないが、凹凸部が丁寧に削られている。この特徴は平瓦ではなく、軒平瓦の調整であることから、軒平瓦の平瓦部とした。側面は両側とも遺存しており、幅 10.1 cm、厚み 1.3 cm であることから、小型瓦よりも小さい超小型瓦の 6681S 型式と判断した。胎土は精良で、焼成はやや軟質。色調は凹面はオリーブ黒色、凸面は灰白色である。菅原遺跡でも出土している。Ⅲ－2期に属する。Ⅳ区S K 402 出土。

小型丸瓦は3点（3～5）出土している。（第14図）

いずれも筒部を半裁して作られており、凹部には細かな布目痕跡が残り、凸部撫で調整である。長さがわかる資料はないが筒部幅は 9.4 cm である。3のみ玉縁部との貼り付けた接合部が残る。胎土はいずれも良好で、焼成は硬く焼き締まる。色調は灰白色あるいは暗灰色である。3はⅣ区包含層出土。4はⅣ区S K 402 出土。5は出土地を特定できない。

B. 塼（第15図）

塼は7点（7.54 kg）出土している。いずれも型づくりの長方体の瓦質塼である。1は長辺 13.9 cm 以上、短辺 16.5 cm、厚み 8.4 cm で、表面に直線上の線刻が「井」形に付けられている（傷の可能性もあり）。胎土は白色砂粒を含むが精良。焼成は軟質で、色調は灰色である。Ⅰ区S E 101 上層出土。2は長辺 16.5 cm 以上、短辺 16.4 cm、厚み 7.6 cm の無紋である。胎土は精良。焼成は非常に軟質で、色調は灰白色である。Ⅲ区S D 301 出土。3は破片である。残存長 9.3 cm、残存幅 7.4 cm で、厚みは 5.0 cm である。表面の残る部分が少ないが、無紋であろう。表裏面及び側面が一面のみ残る。胎土は良好。焼成は非常に軟質で、色調は灰白色である。Ⅲ区S K 304 出土。4は長辺 16.5 cm 以上、短辺 7.5 cm、厚み 7.6 cm である。表裏及び一側面のみ残る。胎土は精良。焼成は非常に軟質で、色調は灰白色である。Ⅲ区出土。5は破片である。残存長 10.5 cm、残存幅 5.8 cm で、厚みは 6.2 cm 以上である。表面及び側面の一面のみ残る。胎土は良好。焼成は非常に軟質で、色調は灰白色である。Ⅲ区包含層出土。6は破片である。残存長 9.5 cm、残存幅 5.1 cm で、厚みは 4.9 cm 以上である。表面及び側面二面のみ残る。胎土は良好。焼成は非常に軟質で、色調は灰白色である。Ⅲ区包含層出土。この他に、Ⅲ区S K 302 灰褐色粘土出土で、図示できない1点がある。胎土は良好だが、他と異なって石英が多い。焼成は非常に軟質で、色調は浅黄橙色である。（相原）

第2節 土器類

A. 古代の土器

古代の土器には、奈良時代後半から平安時代初頭のものが多く、前半に属する遺物は少ない。ここでは、遺構の時期を検討するのに重要な出土遺物について述べる。

S E 101 出土土器（第16・17図）

掘形出土土器（1） 掘形内からは土師器杯Aが出土している。底部は平たく、口縁は斜め上にひらく。口縁上半部に向かって厚みを減らしながら外反したのち、口縁端部は丸みを持って内に入り込んでいる。口縁部はナデで成形するが、底部はナデの上から指オサエを行う。また、

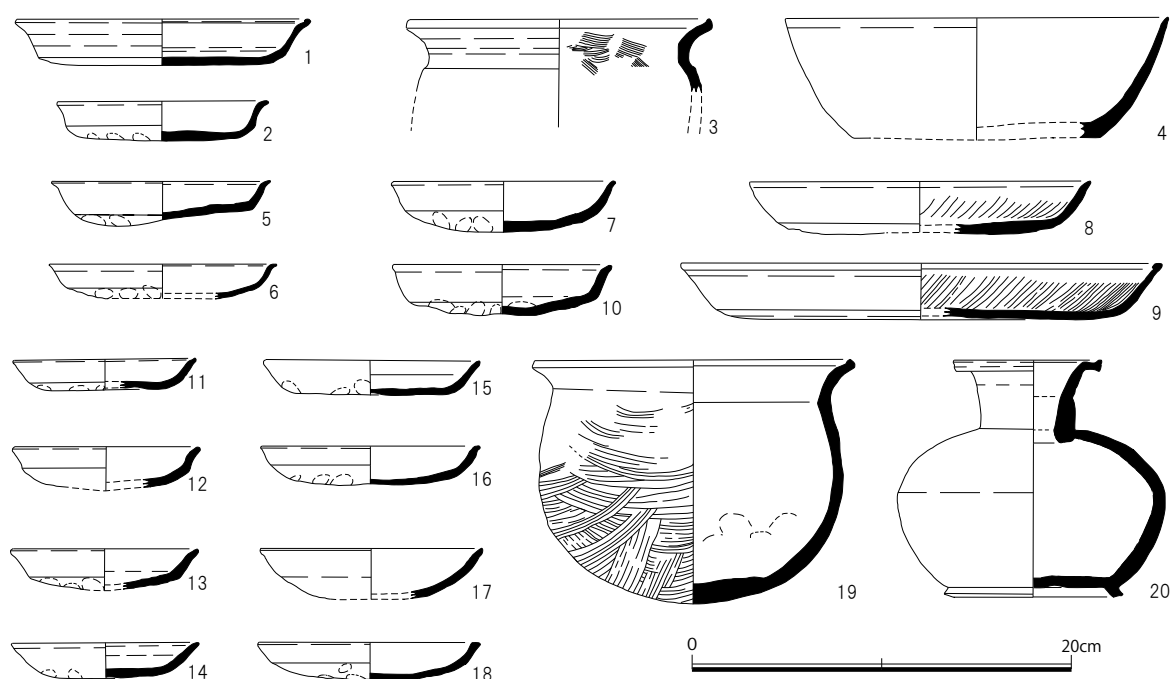
立ち上がりの部分でケズリを行った痕跡が確認できる。口径 15.4 cm、器高 2.4 cm。

井戸底出土土器（2～4） 井戸の底からは土師器皿 C・甕 A、須恵器杯 A が出土している。

土師器皿 C（2）は、内外面ともに、底部をナデしたのちに指オサエで成形する。頸部から口縁部は回転ナデによって緩く外反し、口縁端部は丸くおさまっている。口縁部に煤化がみられることから、灯明皿として用いられたと考えられる。口径 11.2 cm、器高 2.1 cm。甕 A（3）は口縁から胴上部のみが残存する。頸部で強く外反したのち、口縁端部で上につまみ上げている。内面頸部にヨコハケを施し、外面胴部にはタテハケと考えられる工具痕がみられるが、残存部が少なく明確ではない。口径 15.8 cm。

須恵器杯 A（4）は、広く平らな底部を持ち、緩やかに内湾して弧を描きながら口縁へとつながる。底部の厚みは 1.0 cm と厚く、口縁に向かって徐々に薄くなる。目立った加工痕は見当たらず、回転ナデによって全体を整える。底部未調整のまま焼成された。口径 20.4 cm。

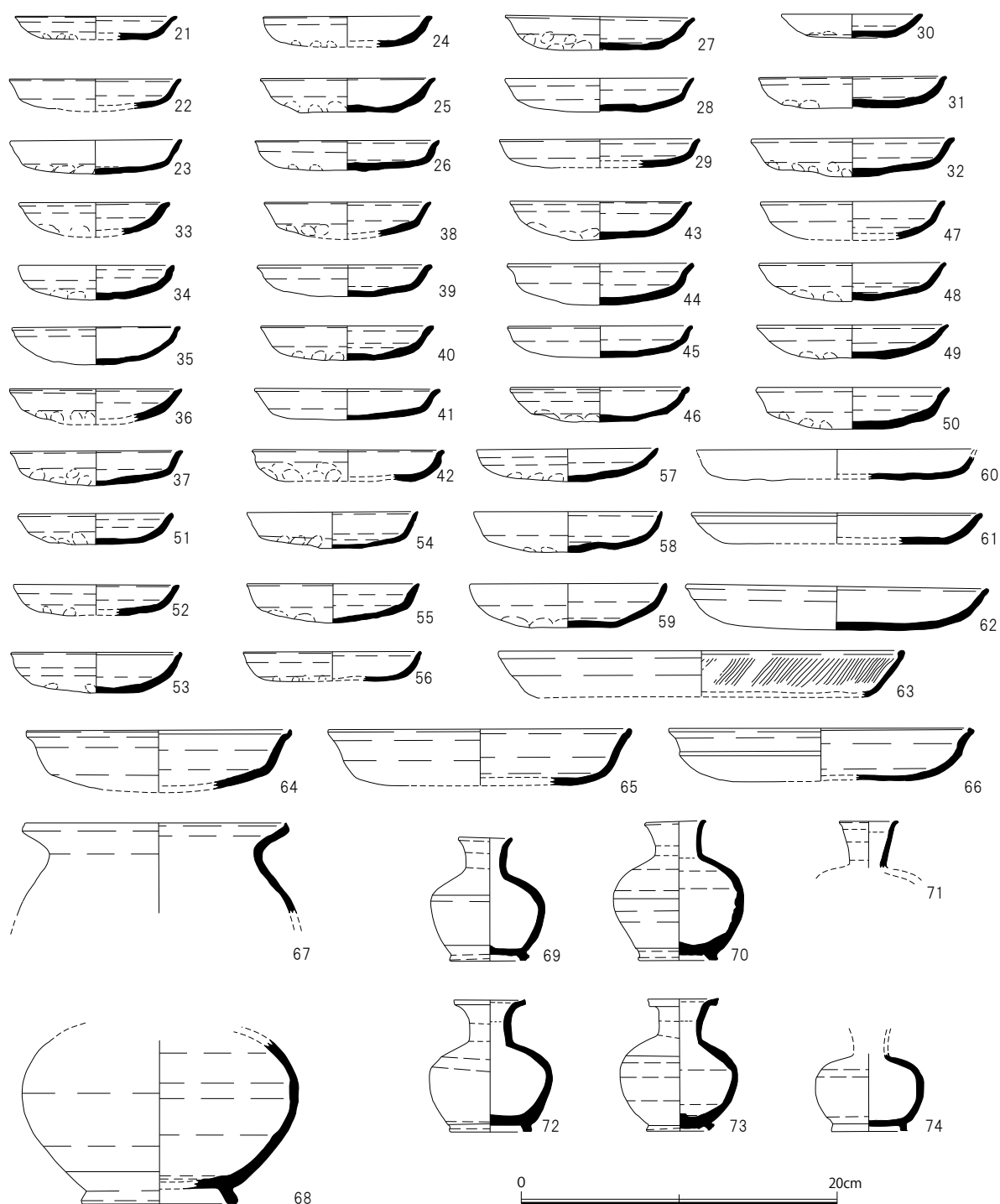
下層出土土器（5～9） 下層からは土師器皿 C・A が出土した。5・7 は、内面の底部はナデの上にオサエが行われ、外面の底部は内面よりも強くオサエを施している。5 は平底でナデによって口縁が外反しているのに対し、7 は丸底から緩く弧を描いて口縁部に向かって立ち上がっている。また、5 の外面底部には、不定方向のハケメの施工痕が確認できる。5 は口径 11.3 cm、器高 2.2 cm。7 は口径 11.6 cm、器高 2.7 cm で、いずれも灯明皿として用いられている。6 は皿 C だが、内面が全体的に黒化している。底部が丸みを帯び、薄手に製作されていた。回転ナデによって成形するが、底部にはオサエを行った後不定方向のハケメを施している。口径 12.0 cm、器高 1.8 cm。8 は皿 A である。平らな底部から口縁が立ち上がり、口縁端部は外に向かって薄く反り返る。内面には 1 段放射暗文＋ラセン暗文を施す。口径 18.2 cm、器高 2.7 cm。一方、9 は大型の皿 A である。平らな底部に、口縁立ち上がりの部分でケズリがみられる。口縁は大きく開き、端部は



第 16 図 第 I 調査区 S E 101 出土土器①（1：4）

内側に巻き込んで肥厚する。内側の底の一部に煤痕を確認することができる。口径 25.4 cm、器高 2.8 cm。

中層出土土器 (10) 中層からは土師器杯 C が出土した。斜め上に開き、口縁端部がさらに外向きに突出している。底部内面は 3～4 周に重なるオサエが確認できた。灯明皿として用いられた小型の皿であり、口縁部が炭化しているほか、外面頸部には煤化がみられる。口径 11.5 cm、器高 2.7 cm。



第 17 図 第 I 調査区 S E 101 出土土器② (1 : 4)

上層出土土器（21～74） 井戸の上層からは、土師器皿C・皿A・杯A・甕A、須恵器壺L・Mが出土した。

土師器皿C（21～59）は、その細かな形態により、いくつかに分類できる。21～30は底部が平らなものであるが、口縁形態によって、外反するものと斜め上にまっすぐ開くものに細分できる。21～27は、ナデによる口縁部の外反するもので、底部をオサエで整えている。このうち、口縁部にヨコナデを重ねたもの（24～27）があり、ナデのみでつくられたもの（21～23）と比較すると、口縁端部での外反が強くなっている。底部の厚みはほとんどが3～5mmであり、口縁に近づくにつれて薄くなっていく。一方で24のように全体的に厚みの大きな変化がみられないものもある。口径10.4～12.0cm、器高1.5～2.2cm。23は表面の剥離が激しく、調整については不確かだが、右上がりのナデによって、口縁はごく弱い外反がみられる。28～30に目立った外反は確認できず、底部から直線的に立ち上がる口縁をもつ。28は口径12.0cm、器高2.1cm。29は口径12.8cm、器高1.8cm。これに対し、30は口径9.0cm、器高1.5cmと小さい。底部から口縁部の中間で一度浅く立ち上がるもの（28、29）と、底部から直接口縁部まで延びるもの（30）がある。前者は弱いヨコナデを立ち上がり部分に施し、後者はナデとオサエのみで成形している。

31～50の皿Cは、底部が丸いものである。多くが全体をナデで成形し、底部外面をオサエによって整えたものだが、オサエを施さないものや、斜め上に強く引き上げるナデを施すものもある。口縁部はヨコナデで整えており、外反がみられる。器形の特徴としては、斜め上に立ち上がるもの、上方向に立ち上がるもの、ヨコナデによって内湾して口縁端部で強く外反するものに大きく分けることができる。また、口縁形態では外側に向かってつまみ出したもの、丸く整えたものの、内面にナデによる面がつくられたものがある。焼成に個体差が大きく、内外面に煤化がみられるものも複数確認されている（39、44、48、50）。口径9.6～12.8cm、器高2.2～2.7cm。

51～59にもヨコナデを行った形跡は確認できるが、これによる目立った外反はみられず、凹凸の少ない口縁を持つ。丸みのある底部につながるようにカーブして立ち上がる口縁が主流だが、底部から斜めにまっすぐ開く口縁を持つものもある。底部外面を強いオサエで成形したものが多い。色調は橙を帯びた灰白が最も多く、黄橙～橙が散見する。また、53は外底に黒斑が確認できる。口径9.6～12.6cm、器高1.9～2.8cmと個体差が大きい。

皿A（60～63）は、口径が大きく浅い皿である。60は底部外面のみでなく、内面にもナデの上からオサエが行われ、弱く凹凸がみられる。外面のオサエは底部の中心のみに施され、立ち上がり部分はナデが明瞭に残っている。61・62はともに皿全体の厚みの変化が少なく、ナデによって口縁端部が外に丸みを持ちながら突き出している。また、どちらも口縁部内面に煤痕が多くみられ、灯明皿として用いられたことがわかる。60～62は口径18.0～19.2cm、器高1.9～2.8cm。63は回転ナデによって成形し、内面に一段放射暗文＋ラセン暗文を施している。平底から斜め上にまっすぐ伸びた器形は、口縁端部で丸く内側に巻き込み肥厚する。口径25.8cm、器高3.0cm。

杯A（64～66）は口縁から底の一部のみ現存する。全体をナデしており、オサエはほとんど確認できない。いずれも口縁にナデによる強い外反がみられ、底部からの立ち上がりは比較的明瞭に変化する。64・65は口縁端部で厚みが減少し、真上につまみ上げるようにしている。どちらも口縁内面に煤化がある。64は胎土が黄灰色で全体的に暗いが、部分的に橙褐色の色斑が大きい。65は底部外面をナデの上からケズリで整え、口縁部を強いヨコナデで整える。66はナデの残る部分が他の上層出土土師器皿と比較して少なく、口縁のヨコナデのみである。内面はなめらかに大きく曲線を描いて立ち上がった後、口縁端部で内面に折り返すようにつまみ上げている。

口径 16.8 cm～19.0 cm、器高 3.3～3.6 cm。

土師器甕 A (67) は、口縁から胴上部までが残存する。剥離が激しく、胴部の調整は不明瞭である。口縁部の上向きに突き出るような形状に整え、頸部の強い回転ナデを施す。口径 16.6 cm。

須恵器壺 L (68) は、楕円に近い胴部を持つ。内外面ともに強い回転ナデで成形した後から、胴下部をロクロケズリで整え、底部に台を貼り付ける。焼成不良により全体の色調は灰白。胴部外面は橙を基調とする。壺 M (69～74) は、いずれもあとから貼り付けした脚、丸または弱く肩の張った胴部、回転ナデによって開いた頸部を持つ。また、70～73 は口縁部から胴上部にかけて灰降着が確認できる。69～71 は外反した頸部のまま、口縁を丸くおさめている。69・70 は胴部回転ナデの上から回転ケズリを胴下部に施して整え、その上から脚の貼り付けを行う。底部外面はロクロナデなどによって比較的平らに整えられているが、内面は回転ナデによる凹凸が残ったことで、中心部へ向かって大きく盛り上がる。72・73 は口縁端部で強く外反し、外側に面を持つ。回転ナデを施した上から、72 は胴下部にナデ、73 は胴下部全体に回転ケズリをそれぞれ行い、器面を整えている。口径 3.4 cm～4.5 cm、器高 7.9 cm～9.0 cm。

井戸出土土器 (11～20) 出土層位が記されていないが、井戸より出土した土器である。土師器の皿 C・甕 A、須恵器壺 L がある。

11～18 は土師器皿 C である。11 は、底部の中心から外周に向かう時計回りの強いオサエが外面に施されることによって、中心部が盛り上がっている。口径 9.6 cm、器高 1.6 cm。12・13 は丸みを帯びた底部に外反する口縁がつく。12 はやや強くなでているため、立ち上がりの傾きが目立つ。どちらも内外面ともにオサエが施された形跡があり、底部外面においては、立ち上がり部分の直前まで確認できる。14・15 の特徴としては、平坦な底部と外反しない口縁部が挙げられる。底部は弱くオサエが行われ、15 では内外面にもに行われる。15 は剥離が激しく表面の詳細は不明だが、他の皿と比較すると色調が明るく薄い。内外面に黒斑が現れていることから、やや焼成が甘いと考えられる。14 は口径 10.0 cm、器高 1.9 cm。15 は口径 11.3 cm、器高 1.8 cm。16 は 12・13 ほど顕著ではないが同様に丸底と外反する口縁が確認できる。底部外面に強いオサエを施し、内面はオサエに近いナデで整えられている。口径 9.8～11.4 cm、器高 2.0～2.3 cm。17・18 は、丸底から口縁部に向かってほとんど外反せず自然に立ち上がり、全体的に丸みを帯びた器形となっている。17 は他の皿と比較して口径に対する器高が高い。口縁はナデによって調整が施され、弱く外に突き出している。口径 11.8 cm、器高 2.7 cm。18 は底部から口縁部まで厚みをほとんど変化させずにつくられた。端部は平坦な部分を上に向けた状態となっており、他の皿と異なった様相を示している。口径 11.6 cm、器高 2.0 cm。これらの皿 C のうち、11・12・18 は煤の付着により、灯明皿として使用されていたことがわかる。

土師器甕 A (19) は、完形で出土した。強く外反する頸部と球体に近い胴部を持ち、上につまみ上げたような口縁端部が確認できる。全体をナデによって成形し、内面の胴部下半にはオサエ、外面の胴部にハケメをそれぞれ施す。内面の胴部上半はナデとしているが、器面の一部に規則性が確認できるためハケメの可能性も考えられる。胎土は浅黄色をしており、焼成が甘い。口径 16.6 cm、器高 12.9 cm。

須恵器壺 L (20) は丸く横に広がり、平坦な底の胴部を持つ。胴部全体を回転ナデで成形し、口縁部から頸部、底部の台は粘土を貼り付けたあとからナデている。底部外面の成形について、外側はロクロナデを施すが、中心近くは未調整のままとなっている。頸部下半は胴部からほぼ垂直に立ち上がり、その部分の厚みが目立つ一方で、頸部の中心から口縁部にかけては外側に広が

る薄いつくりに変化する。口縁部がくの字に強く外反し、口縁端部は上を向いている。口径 7.8 cm、器高 12.5 cm。

これらの井戸 S E 101 出土土器は、掘形出土土器から、上層出土土器まで、大きな年代差はみられない。須恵器壺 M がやや新しい傾向にはあるが、奈良時代中頃～後半に属する。（高橋）

S E 301 出土土器（第 18 図）

下層出土土器で図化できるものは碗 A（1）のみで、口縁部は横ナデすることにより、小さく外反させている。底部外面はケズリ調整を施す。口径 12.3 cm、器高 3.4 cm。

中層出土には、土師器碗 C・皿 A・甕 A・高杯 A、須恵器杯 A・壺 M・L がある。

土師器碗 C（2）は、1 と同様の形態であるが、口縁部はナデで調整し、底部外面にナデ調整を施す。口縁部の内外面には煤が付着。口径 11.8 cm、器高 3.5 cm。皿 A（3）は、口径 22.8 cm、器高 2.7 cm の浅い皿である。口縁端部は内側に巻き込んでいる。口縁部はナデ調整を施すが、底部外面は指圧痕が残る。甕 A（4）は、口径 15.6 cm、器高 19.5 cm（残存）で、口縁は大きく外反し、口縁端部はわずかに上につまみ上げる。胴部はやや下膨れの球形の形状を呈し、体部外面にはハケメ、内面には指オサエの痕跡が残る。高杯 A（5）は脚部のみ遺存する。脚部外面は、ラップ状に開き、斜めに下から上にタテ方向に大きく削っている。内部は中空となっており、ナデ調整されている。残存器高 19.8 cm、底径 15.4 cm。

須恵器杯 A（6）は、平らな底部から、斜め外方に真っ直ぐに伸びる口縁をもつ。底部外面はロクロケズリ。口径 12.6 cm、器高 3.6 cm。7～9 は小型の壺 M である。7 は完形で、やや肩の張った体部に、斜めにのびる口縁がつく。底部には断面方形の高台がめぐる。口径 3.8 cm、器高 8.6 cm、底部径 4.7 cm。7 のみ上層出土である。8 は頸から口縁部のみの遺存だが、7 の口縁と類似する。口径 3.8 cm。9 は頸部欠損するが、7 と類似する。壺 L（10）は、口径 7.7 cm、残存器高 10.5 cm で、胴部下半は欠損する。体部はやや扁平な球形を呈する。口縁端部は外面に面を持ち、外側に屈曲させ、端部をつまみあげる。奈良時代末～平安時代初頭に属する。

S E 302 出土土器（第 18 図）

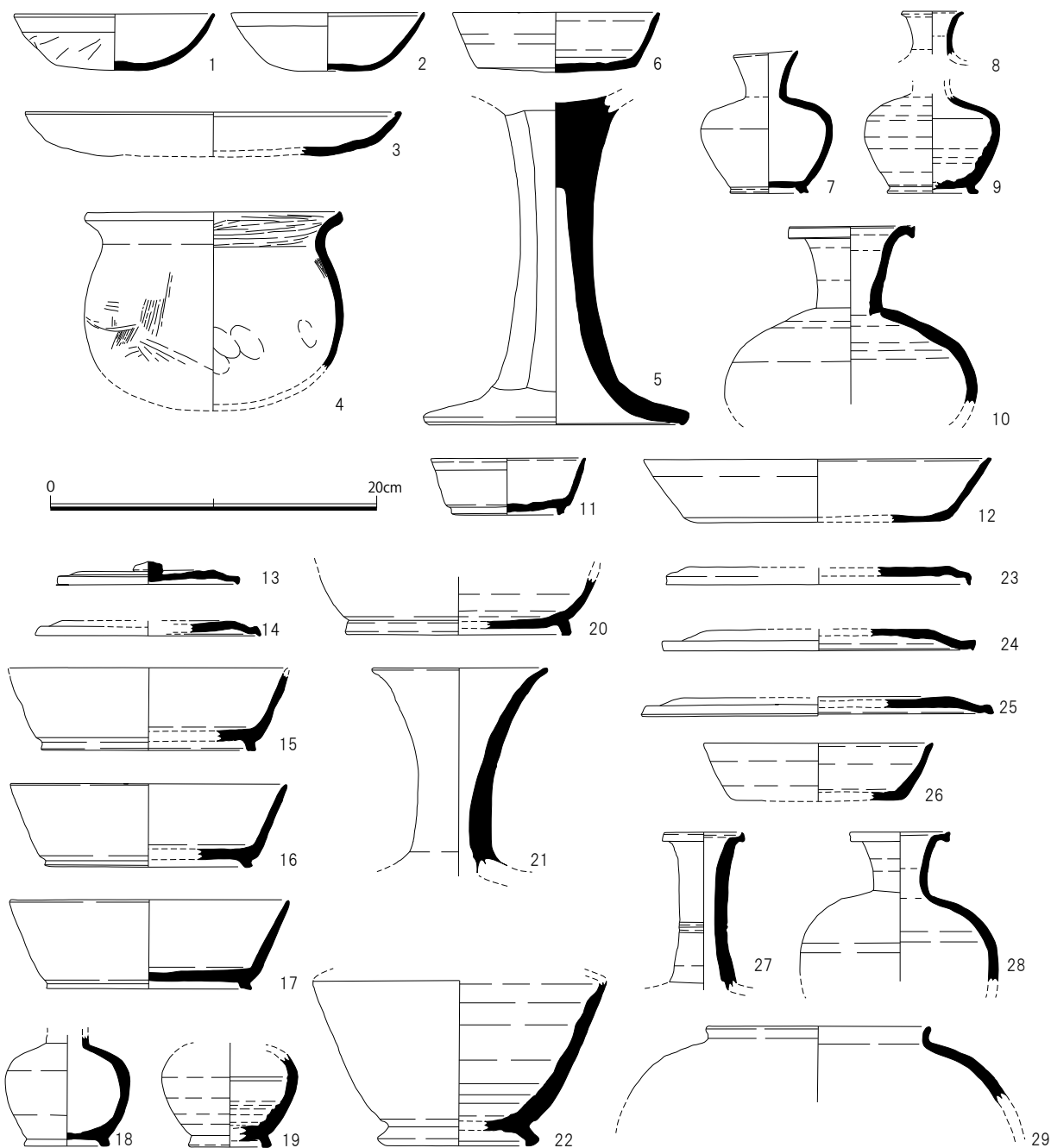
図化したものは、いずれも上層出土の土器である。須恵器杯 B（11）は、口径 9.5 cm、器高 3.3 cm の小型の杯である。平らな底部には高台がめぐり、斜め外方に真っ直ぐに口縁が伸びる。杯 C（12）は口径 21.0 cm、器高 3.8 cm の浅い杯である。底部は平らで、ここから斜め外方に口縁部がのびる。奈良時代末～平安時代初頭に属する。

S K 302 出土土器（第 18 図）

13・14 は須恵器杯 B 蓋である。いずれも器高は低く頂部は平ら、口縁部は屈曲して、端部を下方につまむ。13 は内面が研磨されており、転用硯として使用されていた。口径は 13 が 11.0 cm、14 が 13.6 cm である。15～17 は杯 B である。口径 8.4 cm、器高 5.0～5.4 cm で、ほぼ同じ法量をしている。いずれも平らな底部から、外方へ真っ直ぐに伸びる口縁をもつ。高台は底部の縁に、断面方形の高台を貼り付ける。18・19 は小型の壺 M である。いずれも頸部は残っていないが、球形の胴部がみられる。底部の端に断面方形の高台がつく。胴部径 7.6～8.3 cm。奈良時代末～平安時代初頭に属する。

S K 303 出土土器 (第 18 図)

須恵器碗C (20) は口縁部は欠損しているが、底部から内湾気味に口縁が立ち上がる。高台は、断面方形で、底部の縁にめぐる。21・22 は壺Kである。21 は壺の頸部で、細い頸部から、ラッパ状に開く口縁をもつ。ロクロナデにより整形されている。口径 10.8 cm。22 は壺の体部から底部である。肩部より上部が欠損しているが、肩の張りが明確にわかる。底部には、やや脚の長い高台がしっかりとふんばる。肩部径で 18.0 cmである。21・22 は同一個体の可能性がある。奈良時代末～平安時代初頭に属する。



第 18 図 第Ⅲ調査区 S E 301・302・S K 302～304 出土土器 (1 : 4)

S K 304 出土土器 (第 18 図)

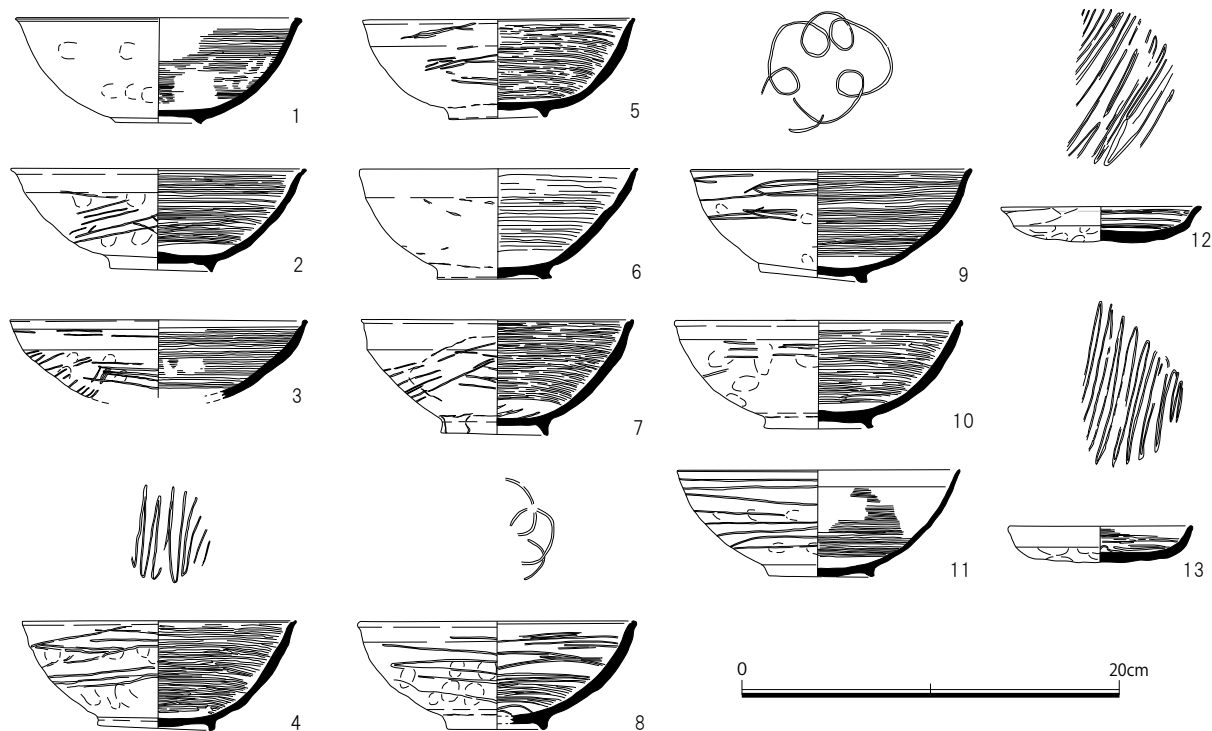
23～25 は須恵器杯B 蓋である。いずれも器高が低く、扁平な形態をしている。口縁部は屈曲するが、端部形態が異なる。23 は口縁端を屈曲させた後に、端部を下につまみだす。24・25 も同様につまみだすが小さい。口径は 23・24 は 18.4～19.0 cm、25 はやや大きく 21.0 cm である。杯A (26) は、平らな底部から、外方へと真っ直ぐにのびて、端部は尖る。口径 14.0 cm、器高 3.5 cm。27 は、水瓶の頸部である。細く真っ直ぐに伸びた頸部に、口縁は外に屈曲させ、端部は上につまみあげる。頸部には二条の沈線がめぐる。口径 4.8 cm である。壺L (28) は胴部上半から口縁まで遺存する体部は球形の形状をしており、短い頸部がつく。口縁部は外に屈曲させ、端部は上につまみあげる。口径 6.0 cm、胴部径 12.1 cm である。壺C (29) は胴部上半しか遺存しないが、やや扁平な球形の胴部と、垂直に立ち上がる 1 cm 程の短い口縁がつく。口径 14.6 cm。奈良時代末から平安時代初頭に属する。(則包)

B. 中世の土器

ここでは、比較的まとまって遺構の時期を特定できるⅡ区の土坑 S K 205 と、Ⅲ区の斜行溝 S D 301 出土土器について述べる。

S K 205 出土土器 (第 19 図)

1～11 は瓦器碗である。いずれも口縁部をヨコナデによってつまみ上げて、やや外反している。器形は体部下半に丸みを持ち、口縁部に向かって開いていく。内面のミガキは非常に密である。見込み部分には連結輪状暗文、ジグザグ状の暗文を施している。外面 2/3～全体に横方向のミガキを施している。口径は 14.3～15.8 cm、器高は 5.2～6.1 cm である。3～8・10 は器壁



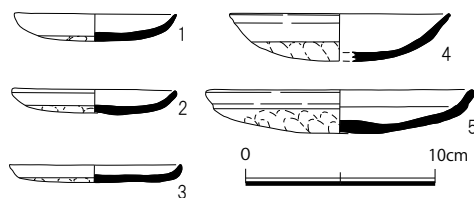
第 19 図 第Ⅱ調査区 S K 205 出土土器 (1 : 4)

が5mm程度を呈する。この他に図化できなかった小片も多く出土している。12世紀前半から中頃に属する。

12～13は瓦器皿である。外面底部は指頭圧痕が残る。口縁部は横ナデをする。内面にミガキを施し、見込み部分にはジグザグ状の暗文を施す。口径は9.6～10.6cm、器高は1.9cmである。

SD 301 出土土器 (第20図)

いずれも土師器皿(1～5)である。1～3は体部内外面をヨコナデし、口縁端部を丸くおさめる。外面底部は指頭圧痕が確認される。口径は、8.4～9.1cm、器高は0.4～1.4cmである。4は、丸底の底部と外側に真っ直ぐ開く口縁部からなる。外面は底部に指頭圧痕が確認され、体部から口縁部をヨコナデする。口縁部から口縁部直下を強くナデ、端部を丸くおさめる。内面はヨコナデである。口径は11.5cm、器高は2.5cmである。5は、広い底部からやや丸みをもって口縁部が立ち上がる。外面底部は指頭圧痕が確認され、体部から口縁部は強くヨコナデする。口縁端部は丸くおさめ、口縁部と底部の境に段をもつ。内面はヨコナデし、見込み部分にも指頭圧痕が認められる。口径は13.8cm、器高は2.3cm、器壁は0.4cm～0.6cmである。13世紀後半～14世紀前半(VII～VIII期)に属する。(森山)



第20図 第III調査区 SD 301 出土土器 (1:4)

第3節 特殊土器・土製品

A. 墨書土器 (第21図)

墨書土器は1点出土している(1)。杯Aは平らな底部から斜め外方へ真っ直ぐに口縁が伸びる。底部外面はロクロ削り。胎土は精良、焼成も良好で、色調は黄灰色をしている。外面には、焼成時に付いた鑿の痕跡が残される。墨書は底部外面に「采判」と記されている。3区SE 301出土。奈良時代末～平安時代初頭に属する。

B. 施釉陶器 (第21図)

施釉陶器には、奈良三彩の小さな壺C(2)が1点がある。体部径7.4cm、器高は推定5.5cmのやや扁平な球形をしている。胎土は精良、灰白色である。表面は剥離が激しく、詳細は不明であるが、器形・胎土及び自然科学分析結果から、奈良三彩の小壺と考えられる。I区SE 101出土。

C. 製塩土器 (第21図)

製塩土器は11点出土しているが、すべて破片である。3は口径8.6cm、直線的にひらき、口縁端部をわずかに内湾させる。器壁は5mm程度で、粘土紐の継ぎ目がみえる。内外面をナデ調整する。胎土は良好で1mm程度の灰色の安山岩砂を含む。焼成は軟質で、色調は灰白色である。紀伊地方産と推定される。III区SE 301中層出土。4は細片のため口径は不明。全体にやや湾曲する口縁をもち、鉢形を呈する。器壁は5mm程度である。内外面をナデ調整を施す。胎土は1mm以上の円磨した灰色砂粒を含む。焼成は軟質で、色調は橙色である。紀伊地方の産地である。I区SE 101出土。5は口径10.8cm、直線的にひらき、口縁端部は摘みあげる。器壁は9mmと

厚い。外面及び口縁端部はナデるが、内面には指圧痕跡がわずかに残る。胎土は1 mm以下の白色砂粒を含む。焼成は不良、外面は2次焼成によって器壁が荒れている。色調は内外面は黒色で、断面は暗赤灰色である。瀬戸内地方（播磨?）の産地である。Ⅲ区S D 301 出土。6は細片のため口径は不明。直線的にひらき、口縁端部はつまみあげる。器壁は9～10 mmと厚く、粘土紐の継ぎ目がみえる。外面調整は、器壁が荒れているので不明。内部は指圧痕がのこる。胎土は1 mm以下の白色砂粒を含む。花崗岩バイランド。焼成は不良、外面は2次焼成によって器壁が荒れている。色調は赤灰色である。瀬戸内地方（播磨?）の産地である。Ⅲ区S K 304 出土。7は細片のため口径は不明。直線的にひらき、口縁部をやや内湾させ、口縁端部は丸く納める。器壁は13 mmとかなり厚く、粘土紐の継ぎ目がわずかにみえる。外面調整はナデ、内面は指頭圧痕が残る。胎土は1 mm以下の白色砂粒を含み、焼成は軟質。色調は内外面が橙色で、断面は褐灰色である。産地は不明。Ⅱ区包含層出土。8は製塩土器の底部である。底部先端はやや丸みをもちながらも尖り、小型の砲弾形をする。外面ナデ調整で、底部内面は指圧痕跡がみられる。胎土は精良で、焼成は軟質。色調は淡橙色。Ⅰ区S E 101 の掘形出土。

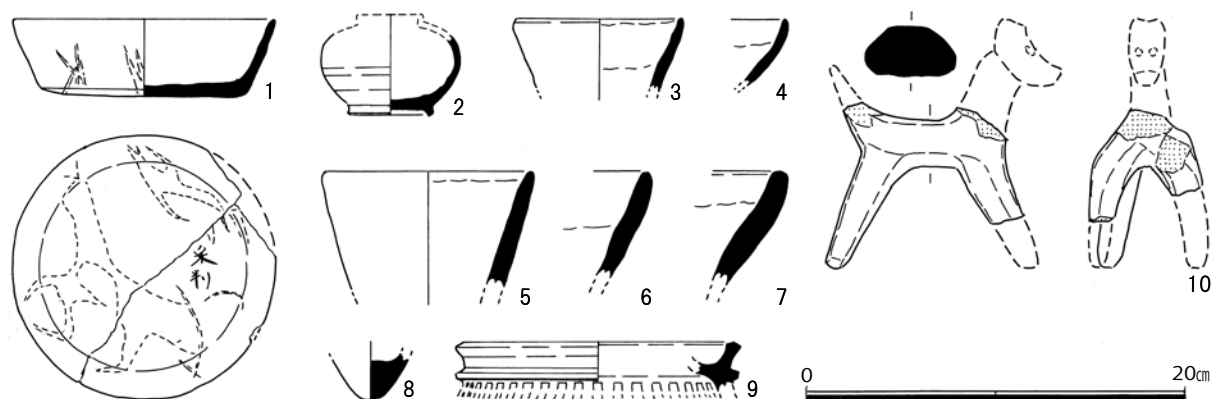
この他に、Ⅱ区S K 205 の2・3層、Ⅲ区のS K 302 灰褐色粘土・S K 304・S E 301、Ⅳ区耕作溝からも出土しているが、細片のため図化できない。

D. 陶硯（第21図）

蹄脚円面硯の破片1点がある（9）。円面硯の海部と陸部への立ち上がりが残る。スカシ孔は、長方形とみられるが、スカシ上部が残存するのみで、スカシ幅5 mmである。口径は14.2 cm。胎土は精良、焼成も良好、色調は灰色を呈する。Ⅲ区S K 302 出土。

E. 土馬（第21図）

土馬は2点出土している。図示したのは形状のわかるもの（10）で、胴部から3本の脚部までが残る。尻尾先端及び頸から頭部は欠損する。同部の断面は、蒲鉾形を呈し、鞍の表現はない。残存高（足先から胴部上面まで）8.6 cmで、残存長（足先）は10.5 cmである。胎土は精良で、焼成はやや軟質である。色調は橙色である。奈良時代後半のものであろう。図示し得なかったもう一点は、部位不明の破片である。いずれもⅢ区S K 304 出土。



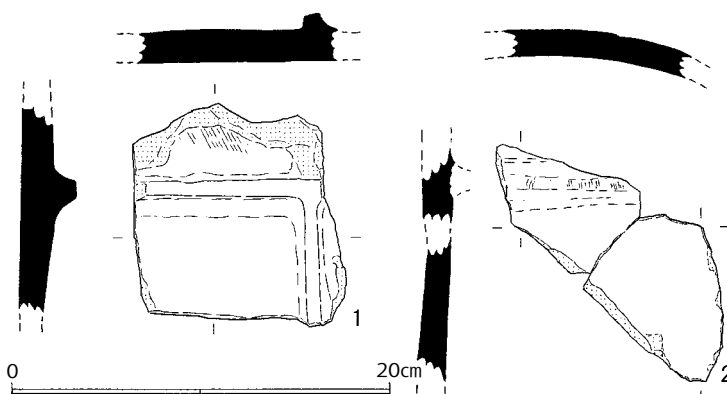
第21図 土製品（1：4）

F. 陶棺（第 22 図）

土師質亀甲形陶棺の破片と考えられものは 3 点出土しているが、このうち 2 点は接合する。いずれも II 区から出土している。

1 は残存長 11.3 × 11.7 cm のほぼ正方形の破片である。このうち 3 辺は破損しており、一面だけは直線にヘラケズリ整形されている。また、破片の中央部に、上面 1 cm の横位突帯が貼り付けられており、体部との貼り付け幅は 2.6 cm である。これと T 形にのびる縦位突帯が上面幅 1 cm、体部との貼り付け幅は 2 cm で貼り付けられている。突帯高は 0.9 ～ 1.1 cm である。この縦位突帯は横位突帯よりも上部には残存しないが、貼り付け痕跡からみて、十字形に交差することがわかる。器厚は 1.7 cm で、湾曲はしない。胎土は 1 mm 以下の白色砂を含むが良好、焼成はやや軟質である。色調は、断面が灰色だが、表面は灰白色を呈している。部分的に赤色粒子がみられるので赤色に塗布されていたと推定される。突帯・側面の状況や湾曲の有無から、棺身の長側面側中央部の分割部の破片と推定される。全体像が不明であるが、a 系列の身に属する。II 区重機掘削中に出土。

2 は 2 片が接合する。残存長は縦 12.5 cm、横 12.1 cm で、いずれの面も破損している。横方向に 2.1 cm 幅で突帯の貼り付け痕跡がみられる。1 を参考にすると、上面幅 1 cm 程度の横位突帯が貼り付けられていたと考えられる。この貼り付け位置には、突帯を着けやすくするために、刻み目の痕跡が断続的に見られる。器厚は 1.2 ～ 1.6 cm で、横方向にわずかに湾曲する。胎土は 1 mm 以下の白色砂を含むが良好、焼成はやや軟質である。色調は、断面が灰色だが、表面は灰白色を呈している。器壁の湾曲状況から、棺身の長側面側の短側面に近い部分の破片と推定される。胎土・焼成・色調や突帯状況から見て、1 と同一個体の可能性が高い。II 区重機掘削中に出土。（相原）



第 22 図 陶棺（1 : 4）

第 4 節 石製品

A. 石器（第 23 図）

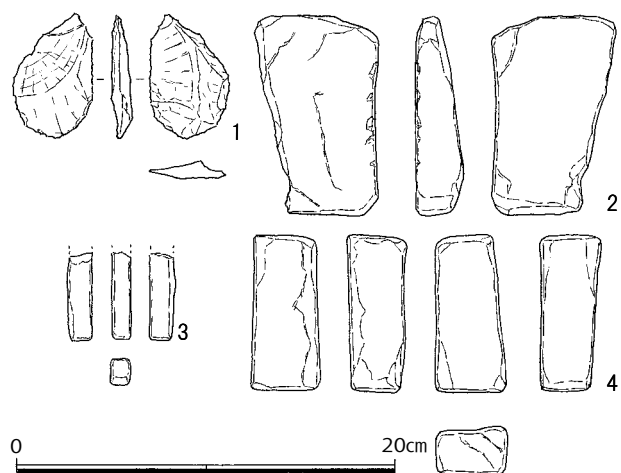
石器は 1 点だけ出土している。サヌカイト製の翼状剥片である（1）。刃先は両面を大きく打ち欠いて、刃先としている。長さ 6.6 cm、幅 4.2 cm、厚み 1.1 cm である。IV 区包含層出土。

B. 砥石（第 23 図）

砥石は 3 点出土している。2 は変輝緑岩製の砥石で、板状に加工している。表面は、打ち欠いて、板状に加工しているが、擦り面は、側面長辺の一面だけを使用している。表面と擦り面の角に 5 箇所所をのり痕跡が等間隔にならぶ。

断面形は三角形で、厚み 4 ～ 9 mm 程度で、4 ～ 8 mm 間隔で加工する。用途は不明。長さ 10.5 cm、幅 4.9 ～ 6.5 cm、厚み 2.5 cm である。4 区 S B 401 柱穴出土。3 は石灰岩系製の小さな砥石である。長さ（残存）4.6 cm、幅 1.0 cm、厚み 1.4 cm で、一部破損している。小口面と側面の 2 面で擦った痕跡がみられる。1 区 S E 101 出土。4 は砂岩製で、柱状の形状をしている。擦り面は、短辺を含めて 5 面確認されるが、残りの一面には摩滅痕跡はない。長さ 8.2 cm、幅 3.0 ～ 3.7 cm、厚み 2.8 ～ 3.1 cm である。IV 区包含層出土。

（相原）



第 23 図 石製品（1：4）

第5章 考 察

第1節 平城京右京三条四坊六坪の占地と性格

A. 隣接調査地（市222次）との関係（第24図）

今回の調査地は、平城京右京三条四坊六坪にあたる。同坪内では20 mほど東で、奈良市教育委員会が第222次調査（以下「市222次」と表記する）を行っており、奈良時代の溝や掘立柱建物などを検出している。逆L形に曲がる素掘溝の上に、掘立柱建物が建てられている。建物の重複や配置からみて、数時期の変遷が推定される。これらの遺構は、奈良時代中頃の土器を含む整地土の上面で検出しており、いずれも奈良時代中頃以降に属することがわかる（奈良市1992）。

これに対して、今回の調査区では、奈良時代の遺構は、土坑や井戸などの深い遺構のみが検出され、掘立柱遺構は、IV区S A 401のみである。I・II区は、検出段階で削り込みすぎた点はあるが、III・IV区は中世の耕作溝が検出されることから、調査段階での削り込みは考えられない。このことから、ふたつの可能性が考えられる。市222次調査区とは対称的に、今回の調査地では、建物が少ない利用であった可能性。もうひとつは、中世の掘立柱建物等が検出されることから、中世段階以前に削平された可能性である。現時点では、どちらとも判断がつかない。

両調査地では、直接繋がる遺構がみられない。市222次のS D 1 0は調査地の西端で南へと折れ曲がりS D 1 1になると報告されている。S D 1 0がそのまま西へと抜けると、今回のI・III区を通過することになるが平面・断面共に確認できない。やはり報告の通りに、S D 1 0は調査区西端で南に曲がり、S D 1 1になると考えられる。これらの溝の性格は後述する。

一方、今回のII区の東西溝S D 201はIV区並びに市222次調査地では未検出である。IV区で検出できないのは、削平された可能性もあるが、IV区の手前で折れ曲がる可能性もある。また、市222次で検出されなかったのは、ここまで伸びていなかった可能性がある。これらについても後述する。

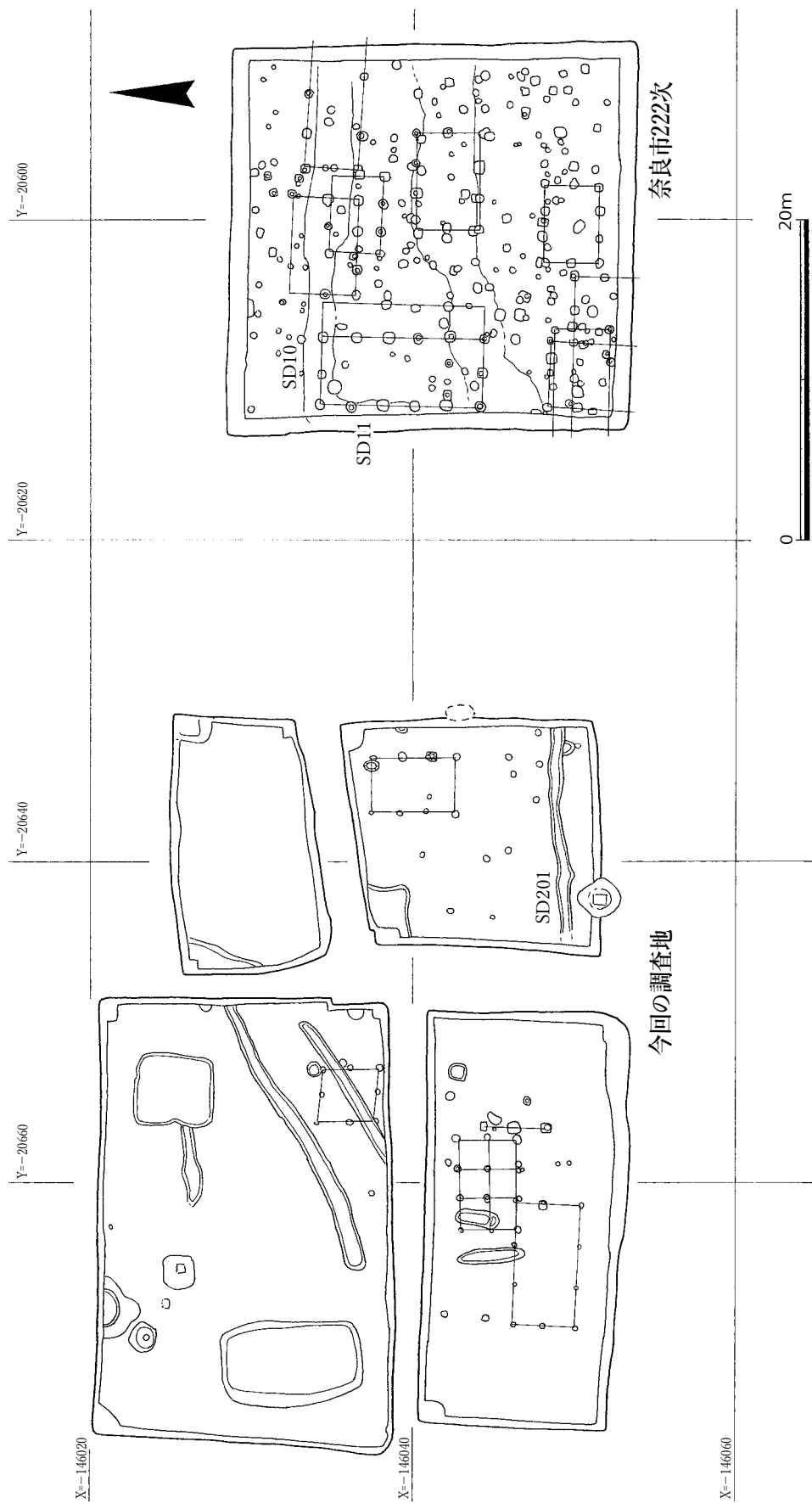
このように、今回の調査地では、掘立柱遺構は極めて少なく、削平あるいは掘立柱遺構は建てられなかった地域の可能性を考えておきたい。

B. 六坪の遺構の時期

市222次調査では、奈良時代中頃の整地土が広がっており、S D 1 0・1 1からも奈良時代中頃の土器が出土している。掘立柱建物は、整地土の上面で検出されることから、いずれも奈良時代中頃以降との報告がある。

一方、今回の調査地ではどうであろうか。IV区S A 401からは遺物の出土がないので特定できない。I区S E 101は奈良時代中頃～後半以降に掘削され、上層埋土からも、同時期の土器が出土することから、比較的短期間に使用されていたと考えている。一方、III区S E 301・302やS K 302～304は、奈良時代末～平安時代初頭の土器が出土していることから、この時期の遺構と判断される。その他の細片の土器についても、奈良時代前半に遡る土器は少なく、多くは奈良時代中頃以降のものが主体を占めている。

一方、出土瓦はどうであろうか。時期の特定できる軒瓦をみると、6664HはI－1期（奈良時



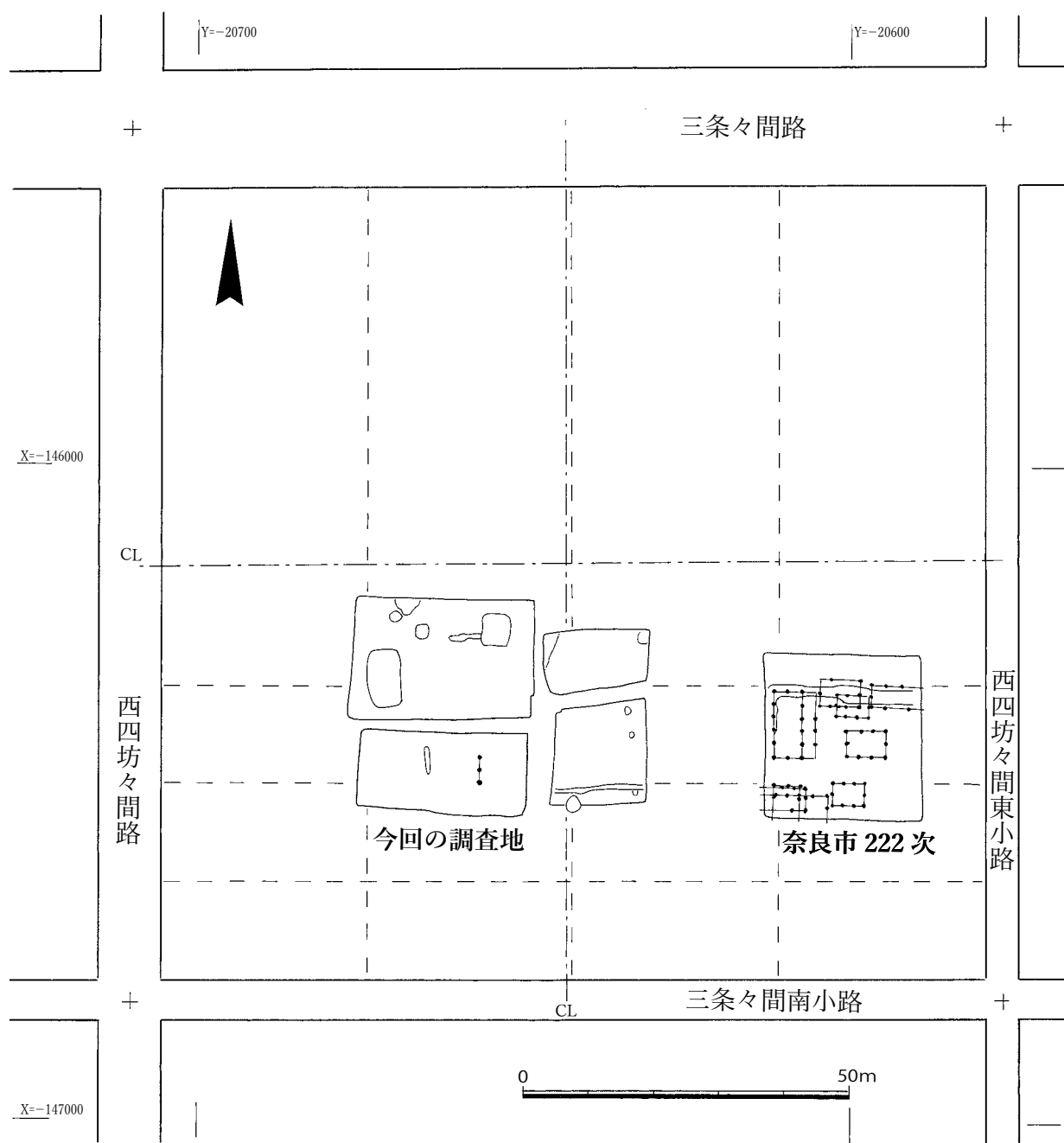
第 24 図 調査地と奈良市 222 次 (1 : 400)

代初頭)に遡るが、他はⅡ－2・Ⅲ－2期で、730・750年以降である。出土瓦からみても、奈良時代中頃以降の後半が主体を占める。出土瓦は多くはなく、瓦の帰属は明確ではないが、奈良時代後半が主体を占める。

これらのことから、六坪は、奈良時代前半には、あまり宅地利用はされておらず、中頃以降に宅地利用が活発になると考えられる。

C. 六坪の占地 (第25図)

今回の調査地は、平城京右京三条四坊六坪の南西地区にあたる⁽¹⁾。六坪は北を三条条間路、南を三条条間南小路、東を西四坊坊間東小路、西を西四坊坊間路に囲まれる。しかし、六坪を



第25図 平城京右京三条四坊六坪の占地 (1:1000)

囲む位置で、これらの条坊道路を検出していない。もう少し広く、右京三条四坊内でみると、三条大路（榎考研 1999）、西三坊大路・市 463 次（奈良市 2004）、西四坊坊間東小路・市 250 次（奈良市 1993）、西四坊坊間路（奈良大学調査）、西四坊坊間西小路・市 507 次（奈良市 2006）で両側溝あるいは片側溝を検出している。これによると、坊路（南北道路）については、大きな誤差はみられない。しかし、条路については、明確ではないことから、奈良文化財研究所作成の『平城京条坊総合地図』（奈文研 2003）による推定条坊を基に、占地について検討する。

これによると、今回の調査地は六坪の南半の、中央から西寄りに位置し、Ⅰ・Ⅱ区の西辺が東西 1/2 ラインと重なる。一方、市 222 次調査地は、六坪の南半の東寄りに位置する。

まず、市 222 次調査で検出した東西溝 S D 1 0 は、六坪を南北 8 分割したラインのうち、南から 3 本目に重なり、S D 1 1 は東西に 4 分割した東から 1 本目のラインと重なる。よって、市 222 次調査地は、六坪を南北に 2/8 あるいは 3/8 の敷地を溝によって区画する時期があった。ただし、この段階の建物は特定できない。そして、溝を埋め立て、掘立柱建物が建てられるが、建物はほぼ溝と重なること、調査区北辺には建物がみられないことから、敷地規模については、大きな変更はなかったと推定する。

今回のⅡ区の東西溝 S D 201 は、六坪を南北に四等分した南から 1 本目の位置と重なる。ただし、厳密には、六坪を東西に二分した位置をわずかに西に越えることから、そのまま西へ延びる可能性もあるが、Ⅳ区では確認出来ない。削平のため遺存しない可能性もあるが、東西 1/2 あたりで北あるいは南へ曲がる可能性を考える。東へは市 222 次調査地で検出できなかったことや、S D 1 1 が東西 1/4 ラインに位置することから、S D 201 は S D 1 1 に接続するものと考えられる。このように考えると、1/32 あるいは 2/32 町宅地と考えられる。この他については、明確な区画溝や区画塀がみられないことから、敷地規模が大きい可能性は否定できないが、掘立柱遺構がほとんどみられないので判断できない。いずれにしても六坪には、奈良時代中頃以降に小規模宅地が複数占地していたことが推定される。

D. 六坪の性格

今回の調査及び市 222 次調査成果をみる限り、六坪南半は、1/32 や 2/32 あるいは 3/32 町宅地程度の小規模宅地が占地していたと推定される。ただし、その性格を特定するまでには至っていない。特殊な遺物としては、三彩小壺や「采判」の墨書土器・土馬などが出土しているが、それほど量が多いわけではなく、これだけをもって、位階や身分を特定することはできない。瓦の出土量は破片数で 538 点（総重量 69.43 kg）出土しているが、遺構からの出土は少ない。軒丸瓦 3 点・軒平瓦 3 点・小型軒平瓦 2 点・小型丸瓦 3 点出土しているが、これらが葺かれた建物は確認されていない。現状では、公的施設が占地していたとは考えられない。

従来、五条以北に貴族（1 町以上）の邸宅が多く配置されるとされていたが、決して、小規模宅地がなかったわけではない。近年では五条以北でも三・四坊では、小規模宅地がみられることが指摘されている（家原 2023）。

いずれにしても右京三条四坊六坪では、奈良時代前半には、積極的な宅地利用はされておらず、宅地利用がなされるのは、奈良時代中頃以降である。しかも三条という平城京の北半ではあるが、京域西端に近い四坊では、小規模宅地が占地していたと考えられる。なお、『寧楽遺文』によると、右京三条四坊に居住していた住人の氏名が残る者としては、箭集宿祢石依と大宅岡田臣虫麻呂の二人があげられるが、いずれも下級官人となる。（相原）

註

(1) 今回の調査地の座標測量がなされていないため、1/2000 地図上で、調査区の位置を特定して座標に当てはめた。よって、 $\pm 1\text{ m}$ 程度の誤差がある。

参考・引用文献

家原圭太 2023『古代都城宅地の研究』雄山閣

奈良県立橿原考古学研究所 1999「平城京右京三条四坊・四条四坊」『奈良県遺跡調査概報 1998 年度（第一分冊）』

奈良市教育委員会 1992「平城京右京三条四坊六坪の調査 第 222 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 3 年度』

奈良市教育委員会 1993「平城京右京三条四坊四坪の調査 第 250 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 4 年度』

奈良市教育委員会 2004「平城京跡（西三坊大路）の調査 第 463 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 13 年度』

奈良市教育委員会 2006「平城京跡（右京三条四坊十四坪）の調査 第 507 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 15 年度』

奈良文化財研究所 2003『平城京条坊復総合地図』

第 2 節 右京三条四坊六坪出土の小型瓦について

A. はじめに

今回の調査で出土した瓦には、「小型瓦」「超小型瓦」と呼ばれる瓦が出土している。特に、菅原遺跡の所用瓦が含まれることは注目すべき点である。ここでは、出土瓦のうち小型瓦、超小型瓦の整理を行い、周辺遺跡の成果も踏まえつつ、その在り方について若干の考察を試みる。

「小型瓦」の定義

「小型」という表現は極めて感覚的な表現で、何をもって「小型」とするのかを定義付ける必要がある。しかし、瓦は製作時期や使用場所等によって、その規格が異なることから、一概に定義するのは困難である。ここでは、小型瓦が多量に出土した菅原遺跡の瓦を基準資料として、中型瓦・小型瓦・超小型瓦を定義付ける。

「中型瓦」とは、一般的な平城京系の瓦の大きさと、軒丸瓦であれば瓦当直径 15 ～ 17 cm 程度のものである。「小型瓦」は中型瓦の 3 分の 2 の規格である。軒丸瓦の瓦当直径 10 ～ 13 cm 程度である。そして「超小型瓦」は、出土量も少なく、かなり特異な一群である。瓦当直径 7 ～ 9 cm 程度で、小型瓦をさらに 3 分の 2 の規格にしたものである（菅原遺跡調査会 1982）。しかし、これらは必ずしも同じ場所で用いられているわけではないといった問題もあり、それぞれの意味合いについては今後の課題である。

B. 右京三条四坊六坪の出土小型瓦

右京三条四坊六坪からは、小型軒平瓦 6765A の 1 型式が 1 点、小型丸瓦が 3 点が出土した。また瓦当部が遺存しないものの、調整技法や法量から、6681S 型式と推定される超小型軒平瓦の平瓦部も出土した。その出土遺構はいずれも中世遺構あるいは包含層等である。

小型軒平瓦 6765A 中世の S D 301 からの出土である。6765A 型式は平城京瓦編年Ⅲ期に属し、菅原遺跡の創建瓦とされる小型軒平瓦である。平城京内の出土例はこれまで、右京三条三坊八坪のみであった。ここでは室町時代の屋敷地の井戸の構築材に転用されていたことが報告されている（奈良市 1994）。平城京内から出土したため平城京式の瓦の型式番号が付与されている

が、実際に平城京内で瓦の造営期（奈良時代）に使用された事例は確認できない。このことから、今の段階では平城京所用の瓦というよりも菅原遺跡所用瓦であり、菅原遺跡で利用されたのちに京内に持ち込まれたという認識のほうがよいと考えられる。小型軒平瓦 6765A 型式は菅原遺跡では軒平瓦 B 類として報告されており（菅原遺跡調査会 1982）、今回出土した個体は顎形態は菅原遺跡と同じ曲線顎である。胎土は緻密だが焼成は瓦質でやや軟質な点は、菅原遺跡から出土する一群とも類似する。瓦当の中央部に礫があり丁寧なつくりとはいいがたいが、平瓦部には朱線が確認できるため、当初は軒先に葺いて使用されていたのは確実である。本調査からは 1 点のみの出土であり、右京三条四坊六坪内での使用は現段階では考えにくく、搬入品が後世に廃棄されたと考えられる。

超小型軒平瓦 6681S 型式 6681S 型式と推定できる瓦が 1 点出土した。出土地は S K 402 で、こちらも中世の土坑からの出土である。平瓦部の両端が遺存しており瓦当を除き、残存状態はかなり良い。菅原遺跡でも指摘されているが、超小型の平瓦と軒平瓦では製作技法が異なり、今回出土したものは超小型軒平瓦の製作技法と類似すること、超小型軒平瓦は平城京内で 6681S 型式のみであることから、6681S 型式と認定した。その分布をみると平城京内では平城宮馬寮地区で 2 点出土するほか（奈文研 1985）、平城京右京三条三坊八坪で 2 点出土している（奈良市 1994）。馬寮地区から出土したものは不明であるが、右京三条三坊六八坪から出土した超小型軒平瓦 6681S 型式については范傷から菅原遺跡からの搬入品であることが分かっている。6681S 型式は菅原遺跡でも 3 個体しか出土しておらず、全体での出土量が非常に少ない。この超小型軒平瓦が右京三条四坊六坪からも出土した点は注目すべきである。

菅原遺跡ではこの 6681S 型式は端部をカットする個体があることが指摘されている。今回出土したものは上弦幅 9.2 cm であり、両端部をカットした一群といえる。瓦の年代観については資料の少なさから、明確に定まっていない。1982 年の報告書では、超小型軒瓦と組み合わせとされる小型軒丸瓦の 6313 型式に倣い、平城宮瓦編年第Ⅱ期のものであるとされていた。しかし、その後 6681 型式の年代は第Ⅲ期に当てはめられる点や、菅原軒丸 A 類・B 類の同范瓦が京内から出土しないことから、年代観については平城宮瓦編年第Ⅱ期からⅢ期と幅を持たせておくべきであると考えられる。菅原遺跡からは超小型軒瓦に対応する大きさの丸瓦、平瓦も少量ではあるが出土する。さらに平瓦については軒瓦と比較すると製作技法に差異が見られることが分かっている。平瓦は縄タタキを残すのに対して、軒平瓦は縄タタキを縦方向のケズリで消す点に特徴がある。この特徴からは、軒平瓦 6681 型式は平城宮式のものであるが、菅原遺跡出土の 6681S は平城宮の造瓦組織とは別の工人集団の製作である可能性を指摘できる。

小型丸瓦 次に小型丸瓦であるが、遺構からの出土は 3 点のうち 1 点のみであり、中世土坑 S K 402 からの出土である。先に述べた超小型軒平瓦 6681S 型式も同一遺構からの出土で共伴する。この調査で出土する小型瓦のうち遺構内からの出土のものはすべて中世の遺構からの出土であることが分かる。

小型瓦が多く出土する菅原遺跡では、小型丸瓦はⅠ～Ⅲ類に分類されている。これを踏まえると、1 が精良な胎土と硬質な焼成、丸瓦の厚さと径からⅡ類と考えられる。2・3 は凸面のナデや厚さ、胎土中の石英の多さや面取りの単位の大きさからⅠ類と考えられる。

このように右京三条四坊六坪で出土する小型瓦の多くは、奈良時代に生産されたものが、中世以降に廃棄された様子が推定できる。

C. 平城京内出土小型瓦の分布（第 26 図）

小型瓦の出土状況を平城京内で集成したものを第 26 図に記した（今回は出土量に関係なく、出土した坪ごとにドットを落とす）。平城宮内出土の小型瓦は含めていないが、右京三条四坊六坪出土の小型軒瓦と同范瓦については図示した。

小型瓦は平城京内の多くの地点から出土している。しかし小型瓦がまとまって出土する例は平城京内でも少なく、直接建物に伴うものがみられない。そのため、小型瓦がどのような用途で使用されていたかを見出すことは困難であった。想定できる使用法は、祠堂や厨子、井戸の覆屋、庭園の東屋等が考えられる。また、軒瓦のみの出土であると葺棟としての用途の可能性が高くなる。

平城京内出土の小型瓦の分布状況の特徴として、三条大路以北に比較的集中していることがわかる。その中でも大きく 3 地点分布していることが窺われる。

西大寺・西隆寺、右京北辺坊 1 つ目は西大寺、右京北辺坊を中心とする地域である。軒瓦だけでなく丸瓦や平瓦も小型品が出土する右京一条北辺四坊六坪（奈文研 1984）をはじめとし、複数の地点で小型瓦が出土する。小型軒瓦の型式は、Ⅱ期に相当するものが多く、西大寺や西隆寺を中心に出土する。使用用途は、まとまった出土例が少ないことに加え、小型瓦の総数も中型瓦に比べると少ないために不明な部分も多いが、西隆寺では葺棟での使用が指摘されている（奈文研 1993）。

また、京内から少し離れるが阿弥陀谷廃寺では菅原遺跡と同様に、基壇建物が東面し、小型瓦に加えて超小型瓦の存在が認められる（榎考研 1998）。さらに松林苑や右京北辺四坊六坪・東院庭園といった場所での使用例が複数確認できる（榎考研 1990・奈文研 1984・奈文研 2003）。

長屋王邸周辺 長屋王邸周辺の左京二・三条三・四坊地区からも多数の小型瓦が出土している。特に S D 5100 での出土が多くみられ、菅原遺跡と遜色ない出土量がある点が特徴的である。なかでも C 期からの出土が顕著で、これは長屋王自刃の後で、長屋王邸時代の施設がかなり改造されながらも維持されている時期である。その点から長屋王の死後大量に廃絶される様子がうかがえる（奈文研 1995）。長屋王邸の瓦を生産したことで知られる瀬後谷瓦窯産の小型瓦の存在も明らかであり（京都府埋文 1999）、今後小型瓦を解明するうえで、長屋王との関係性も課題になるだろう。

菅原寺周辺 右京三条四坊六坪の菅原寺周辺である。右京三条三坊八坪（奈良市 1994）や右京三条四坊六坪などでは、超小型瓦を含む菅原遺跡の所用瓦や小型瓦が一定数出土している。その中でも瓦の製作時期に相当する遺構からの出土例が少ないことが特徴である。遺構外からの出土も目立つが、中世以降の遺構からの出土が一定数あることが、この地区の大きな特徴である。

右京三条四坊六坪は、菅原遺跡からは 1.5 km ほどの距離であるが、製作から 500 年たった室町時代に瓦をわざわざ持ち込んだとは考えにくく、室町時代にはすでに近隣地域に菅原遺跡の所用瓦が持ち込まれており、転用可能な状態であったことが想定される。2020 年の菅原遺跡の発掘調査より黒色土器 A 類が出土しており、500 年のタイムラグが少し埋まる可能性も出てきた（元興寺 2023）。しかし現状の調査成果では根拠が乏しく、今後の周辺の調査成果に期待したい。

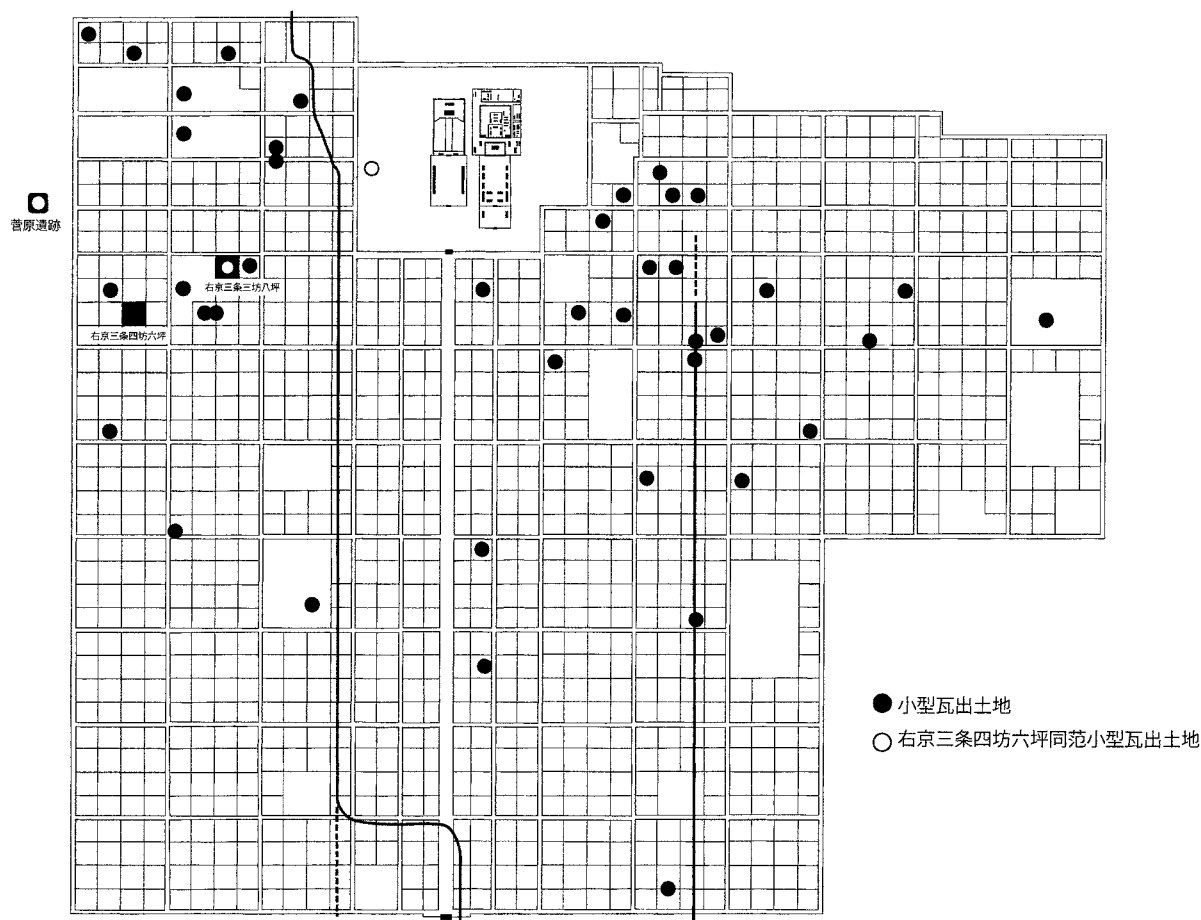
D. 右京三条四坊六坪と同范瓦の出土地

右京三条四坊六坪で出土する小型軒瓦は小型軒平瓦 6765A 型式、超小型軒平瓦の 6681S 型式の 2 型式である。両型式ともに平城京内で出土する例はこれまでの調査成果から、右京三条三坊八坪のみである。超小型軒平瓦 6681S 型式は平城宮馬寮から出土例があるが、用途などは定かでない。

平城京右京三条四坊六坪と三条三坊八坪

右京三条四坊六坪からは菅原遺跡と関係すると思われる小型瓦、超小型瓦が出土する。この状況と近い出土状況が右京三条三坊八坪で報告されている。室町時代の屋敷地内で検出された S E 206 からは、菅原遺跡出土の軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦と同范の瓦が出土している。今回は出土した小型軒瓦はすべて平瓦であり、丸瓦と組み合わせる様子は確認できない。また瓦の総数も右京三条三坊八坪に比べると少ない。資料が少なく仮定に過ぎないが、菅原遺跡から右京三条三坊八坪周辺にまとまって持ち込まれた小型瓦の一部が右京三条四坊六坪にまで及んでいる可能性が考えられる。

菅原遺跡は、本調査地から西に約 1.3km の丘陵上にある。丘陵の東斜面を造成して平坦面をつくり、そこに南北棟の瓦葺き基壇建物が建てられていたことが発掘調査によって明らかにされている。基壇建物の創建は天平末年とされ、9 世紀代までは存続していたと考えられている。



第 26 図 平城京内における小型瓦の分布

遺跡の立地などから『行基年譜』にみえる「長岡院」ではないかとされている。

一方、S E 207 の年代は先述のとおり 14 世紀後半から 15 世紀と考えられるので、両者の間には 500 年以上の開きがある。両遺跡の関係については今後の検討を待たなければならないが、注目しておくべき課題だと思われる。

右京三条四坊六坪と菅原遺跡

右京三条四坊六坪からは平城京内では出土数が極めて少ない型式の小型・超小型軒瓦、また小型瓦が一定数出土する。これらの瓦は出土遺構は分かるものの、当初の使用地に相当するものではなく、後世の遺構または包含層である。また、総数が少なく、小型丸瓦は出土するが小型軒丸瓦は見られず、反対に小型平瓦がなく、小型軒平瓦が出土する状況を踏まえて、右京三条四坊六坪から出土する小型瓦が実際にこの場で葺かれていた状況は想定しにくい。やはり別の場所から持ち込まれたと考えられる。また、これらの瓦の一部が室町時代の遺構から出土する点から、奈良時代の瓦が持ち込まれた後も 500 年以上転用可能な状態で維持されていたことを示しており、意図的に持ち込まれたと考えられる。

そうすると、この瓦はどこから持ち込まれたものなのかといった問題が上がる。候補として菅原遺跡の可能性を示したい。

菅原遺跡は奈良市疋田町に所在する。平城京外ではあるが、二条大路から二条条間小路の延長線上の丘陵上に位置する。調査の結果、基壇建物と円形建物、またそれを囲う圍繞施設が見つかり、周辺からは中型瓦、小型瓦、超小型瓦の 3 種類の規格の瓦が出土した。ここは行基四十九院にある長岡院の推定地と考えられ、円形建物は行基の供養塔と推定されている。調査成果より、菅原遺跡は 9 世紀初頭には廃絶するとわかっている。

行基に関連する遺跡の瓦がなぜ右京三条四坊六坪に持ち込まれたかについては、菅原寺の存在が考えられる。菅原寺も行基建立の四十九院の一つであるほか、行基没入の地でもある。そこで長岡院（菅原遺跡）の維持管理が困難になり、主要な施設の一部を菅原寺周辺に移した可能性が考えられる。

現状の成果のみでは根拠に乏しいが、今後周辺地区からまとまって菅原遺跡の瓦が搬入された形跡がみられるかもしれない。また今回の調査から、室町時代以前に菅原遺跡の瓦が持ち込まれ、廃棄された可能性が大きくなったことは成果といえるだろう。今後の調査成果から、さらに小型瓦の出土量が増加する可能性は大きい。しかし、小型瓦は破片であると、見分けがつきにくく見落とされることも多い。小型瓦があるかもしれないといった認識を持ち、今後も注意していくことが必要である。

(松田)

参考・引用文献

家原圭太 2023 「古代都城宅地の研究」 雄山閣

井上 薫 1959 『行基』 吉川弘文館

井上和人 2005 「平城京右京北辺坊考」 『西大寺古絵図の世界』 東京大学出版会

岩井孝次 1937 『古瓦集英』 岩井珍品屋

上村和直 1983 「南春日町遺跡の小型瓦」 『古代研究 25・26』 元興寺文化財研究所

江浦 洋 1989 「行基建立四十九院考ー長岡院推定遺跡を中心とした考古学的検討ー」 『大阪文化財論集』 大阪文化財センター

江浦 洋 2013 「行基ー考古学で探る行基建立四十九院」 『救済に携わる素晴らしい僧侶たち』 大阪府文化財センター

大橋泰夫 2004「瓦類」『古代の官衙遺跡Ⅱ 遺物遺跡編』奈良文化財研究所

近江俊秀 2015『古代都城の造営と都市計画』吉川弘文館

大野 敏 1999「古代・中世厨子の形態に関する建築的研究」(横浜国際大学提出博士論文)

小澤 毅 2018『古代宮都と関連遺跡の研究』吉川弘文館

亀田 博 1983「平城京左京三条二坊の小型瓦」『古代研究 25・26』元興寺文化財研究所

元興寺・元興寺文化財研究所 2023『令和5年度秋季特別展 菅原遺跡と大僧正行・長岡院』

元興寺文化財研究所 2023『菅原遺跡－令和2年度発掘調査報告－』

京都市埋蔵文化財研究所 1996『木村捷三郎収集瓦図録』

国立博物館 1948『法隆寺東院に於ける発掘調査報告』

近藤康司 2014『行基と知識集団の考古学』清文堂

近藤康司 2015「行基建立四十九院」『最新研究 行基の考古学』帝塚山大学考古学研究所

佐藤亜聖・村田祐介 2022「菅原遺跡発掘調査概要」『ヒストリア 第90号』大阪歴史学会

菅原遺跡調査会 1982『菅原遺跡－平城京西方丘陵基壇建物跡の調査－』菅原遺跡調査会・奈良大学考古学研究室

高田貫太 2010「本薬師寺の創建軒瓦」『古代瓦研究Ⅴ』奈良文化財研究所

京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999『奈良山瓦窯跡群』

坪之内徹 1980「平城宮系軒瓦と行基建立寺院」『ヒストリア 第86号』大阪歴史学会

奈良県立橿原考古学研究所 1975『平城京左京三条二坊十三坪』

奈良県立橿原考古学研究所 1990『松林苑跡』

奈良県立橿原考古学研究所 1997「阿弥陀谷廃寺」『奈良県遺跡調査概報 1997年度』

奈良県立橿原考古学研究所 2002「平城京右京三条三坊六・十一坪」『奈良県遺跡調査概報 2021年度(第一分冊)』

奈良県立橿原考古学研究所 2003「平城京右京三条三坊十一坪」『奈良県遺跡調査概報 2022年度(第一分冊)』

奈良県教育委員会 1972『国宝唐招提寺講堂他二棟修理工事報告書』

奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会 1978『平城宮出土軒瓦型式一覧』奈良国立文化財研究所

奈良国立文化財研究所 1975『基準資料Ⅱ 瓦編2解説』

奈良国立文化財研究所 1978『平城宮発掘調査報告Ⅸ－宮城門・大垣の調査－』

奈良国立文化財研究所 1979「唐招提寺階段の調査」『昭和53年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』

奈良国立文化財研究所 1980『平城京左京三条四坊八坪発掘調査報告』

奈良国立文化財研究所 1984『平城京右京一条北辺四坊六坪発掘調査報告』

奈良国立文化財研究所 1984『平城京左京二条二坊十三坪の発掘調査』

奈良国立文化財研究所 1984『平城京右京一条北辺四坊六坪発掘調査報告』

奈良国立文化財研究所 1985『平城宮発掘調査報告Ⅻ－馬寮地域の調査－』

奈良国立文化財研究所 1985『平城京左京四条二坊十五坪発掘調査報告 藤原仲麻呂田村第推定地の調査』奈良県教育委員会

奈良国立文化財研究所 1987『平城京左京四条二坊一坪発掘調査報告』

奈良国立文化財研究所 1989「西大寺境内の調査」『昭和63年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』

奈良国立文化財研究所 1991『平城宮発掘調査報告Ⅶ』

奈良国立文化財研究所 1991「西隆寺旧境内の調査(2)第219次」『1990年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』

奈良国立文化財研究所 1995『平城京左京三条一坊十四坪発掘調査報告』

奈良国立文化財研究所 1995『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告－長屋王邸・藤原麻呂邸の調査』奈良県教育委員会

奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会 1996『平城京・藤原京軒瓦型式一覧』

奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1984『小建築の世界 埴輪から瓦塔まで』

奈良市教育委員会 1985『平城京左京三条二坊 奈良市庁舎建設地発掘調査報告書』
 奈良市教育委員会 1991「平城京右京三条三坊八坪の調査 第 196-1・2・3 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 2 年度』
 奈良市教育委員会 1992「平城京右京三条三坊六坪の調査 第 226-1 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 3 年度』
 奈良市教育委員会 1994「平城京右京三条三坊八坪・菅原東遺跡の調査 第 257-1 次」
 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 5 年度』
 奈良市教育委員会 2010「平城京跡(右京北辺四坊二坪)の調査 第 584 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成 19(2007) 年度』
 奈良市教育委員会 2017「平城京跡(右京二条二坊三坪)の調査 第 686 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成 26(2014) 年度』
 奈良市教育委員会 2017『平成 29 年度秋季特別展 平城の薨—奈良市所蔵瓦展—』
 奈良市教育委員会 2019「菅原遺跡の調査 試掘 2016—5・2017—2 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成 28(2016) 年度』
 奈良文化財研究所 2001「西隆寺の調査—第 320・324 次—」『奈良文化財研究所紀要 2001』
 奈良文化財研究所 2001「左京三条一坊の調査—第 314-7 次—」『奈良文化財研究所紀要 2001』
 奈良文化財研究所 2003『平城宮発掘調査報告 X V—東院庭園地区の調査—』
 奈良文化財研究所 2007『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』
 橋本義則 1984「西大寺古図と「称徳天皇御山荘」」『平城京右京一条北辺四坊六坪発掘調査報告』奈良国立文化財研究所
 原田憲二郎 2017「平城京内出土の 6225・6663 系軒瓦」『古代瓦研究Ⅶ』奈良文化財研究所
 原田憲二郎 2023「菅原遺跡出土瓦について一瓦から見た菅原遺跡の造営—」
 『令和 5 年度 山陵の丘研究会 菅原遺跡から行基の供養塔を考える』
 菱田哲郎 2021 「行基菩薩の考古学」『東大寺と行基菩薩』東大寺
 平安博物館 1977『平安京古瓦図録』
 平城宮発掘調査部 1976「平城宮跡発見の殿堂雛形部材」『奈良国立文化財研究所年報 1976』奈良国立文化財研究所
 毛利光・花谷浩 1991「平城宮・京出土軒瓦編年の再検討」『平城宮発掘調査報告 X III—内裏野調査Ⅱ—』
 保井芳太郎 1928『大和古瓦図録』大和史学会
 吉川真司 1999「行基寺院菩提院とその寺田」『日本古代社会の史的展開』塙書房
 吉田靖雄 2013『行基』ミネルヴァ書房

第 3 節 右京三条四坊六坪出土の陶棺について

A. はじめに

陶棺とは、6 世紀中葉以降に突如出現した焼物の棺である。土師質亀甲形陶棺は、棺蓋と棺身の全体に縦横方向へ突帯が張り巡らされており、棺蓋と脚部には丸形か四角の透孔が開けられる。さらに、蓋と身は長側面のほぼ真ん中で二分割されている。また、陶棺は全国約 700 例の報告があるが、そのうちの 7 割近くを吉備地域に、残りの約 2 割が畿内地域へ分布しており、奈良市内ではこれまで少なくとも 49 基以上の土師質陶棺が出土している。

本稿では奈良市赤田横穴墓群出土陶棺赤田編年（鐘方 2015）から平城京右京三条四坊六坪の年代的位置づけについて検討し、類例を挙げる。

B. 平城京右京三条四坊六坪出土陶棺片の特徴

II 区から出土した土師質亀甲型陶棺の破片と思われる遺物は、3 点出土しており、そのうち 2 点は接合できる。また、胎土・色調・凸帯の形状からみて、同一個体の可能性が高い。

陶器棺片の概要については、第 4 章第 3 節を参照していただきたいが、本資料の特徴として、

奈良市で出土した他の陶棺と比べても突帯の幅がやや狭く、器壁も薄めである。焼成も軟質であることから、全長は最大 150cm ～ 160cm のものであると推測される。

C. 年代的位置づけ

次に陶棺の製作年代について考察する。年代は、赤田編年を参考にする。

赤田編年では陶棺が出現する 6 世紀中頃から 7 世紀中頃までを赤田 1 期～赤田 4 期に分け、その過程で大きさの体系的な縮小についても言及している。第 1 期（6 世紀中頃～後半）には全長 200 cm を大きく超える大型品が主流で、遺骸を伸展状態で納棺する葬送形態に十分対応していた。第 2 期（6 世紀後半～7 世紀初頭）になると、小型化傾向が顕在化するとともに、棺体構造の簡略化や製作工程の省力化が進行する。第 3 期（7 世紀初頭～前半）には縮小の進行が加速し、伸展葬が可能な限界に近い全長約 150cm の陶棺が一般化する。さらに第 4 期（7 世紀中頃）には、遺骸を伸展状態で収めることが困難な全長 100cm ～ 120cm の陶棺が主となり、再葬容器としての機能が前面に現れる。

以上のことを踏まえて、平城京右京三条四坊六坪出土陶棺片は、最大全長がおおよそ 150 ～ 160 cm と推定されることから、第 2 期以降に進行する小型化傾向と整合的であり、特に伸展葬が可能な限界に近い規格が一般化する第 2 期後半から第 3 期に位置づけられる可能性が高い。

D. 類例

周辺で出土した陶棺の事例から以下の類例を挙げることができる。突帯の薄さと形態から秋篠阿弥陀谷遺跡出土 1 号墓陶棺に近いだろう。赤田型式では、短側面における縦位突帯の有無を基準として a 系列・b 系列の区分が行われている。1 は横位突帯と縦位突帯のどちらも確認できるため a 系列である可能性が高い。阿弥陀谷遺跡 1 号墓陶棺の棺身も横位突帯と縦位突帯が張り巡らされており、a 系列である。時期についても、秋篠阿弥陀谷 1 号横穴墓出土陶棺は赤田 3 期に当てはまる。ただし、阿弥陀谷 1 号墓陶棺は全長 189cm であり、小型棺とは言えない。

E. まとめ

本稿では、平城京右京三条四坊六坪出土の土師質亀甲形陶棺片について、その形態的特徴と赤田編年に基づく年代的位置づけを検討した。突帯幅の狭さや器壁の薄さ、軟質焼成といった特徴から、全長 150 ～ 160cm 程度の小型品と推定される。これは陶棺の体系的縮小が進行する赤田第 2 期後半から第 3 期の 7 世紀初頭から前半に相当する可能性が高い。本資料は破片資料に限られ、かつ比較可能な新資料の追加が困難であるため、詳細情報を汲み取ることができないが、奈良市内で出土した陶棺資料の一例として位置づけ、今後の検討に委ねたい。（植木）

参考・引用文献

鐘方正樹 2015 「第 VI 章 総括 第 2 節陶棺」『奈良市歌姫・赤田 1 号墳』奈良市教育委員会

奈良市埋蔵文化財調査センター 2016 『赤田横穴墓群・赤田 1 号墳』奈良市教育委員会

奈良市埋蔵文化財調査センター 2019 「秋篠阿弥陀谷遺跡・横穴墓群の調査 AAM 第 1 次」

『奈良市埋蔵文化財調査年報 令和元（2019）年度』

奈良市埋蔵文化財調査センター 2023 『令和 5 年度秋季特別展 亀甲形陶棺－変化と地域性－』奈良市教育委員会

第6章 自然科学分析

平城京右京三条四坊六坪から出土した陶棺破片の赤色顔料と思われる部分のデジタルマイクロスコープによる観察、及び奈良三彩の材質を推定することを目的とした蛍光X線分析による非破壊の定性分析をおこなったので報告する。

【陶棺破片のデジタルマイクロスコープによる観察】

写真5のデジタルマイクロスコープ画像が示すとおり、陶棺の破片には、一部に赤色から赤褐色を呈する部分が目視でも確認できる。これが意図的または偶然に付着した赤色顔料であるのか、または胎土中に混入した物質が赤色を呈しているのかはデジタルマイクロスコープによる観察でも不明である。

【奈良三彩破片】

写真6に奈良三彩破片の蛍光X線分析結果を示す。

分析の条件は次のとおりである。

分析装置装：エネルギー分散型蛍光X線分析装置 EDAX Eagle III XXL（奈良大学に設置）

X線管電圧：40kV 測定時間：100秒

X線管電流：500 μ A 測定雰囲気：大気

X線管球：Cr（クロム） 測定範囲：直径100 μ m

胎土に含まれていると考えられるFe（鉄）、Ca（カルシウム）、Ti（チタン）の他に、Cu（銅）とPb（鉛）が検出された。Cuは緑色の発色の基になっているものと考えられる。一方、Pbは三彩に特徴的な物質であることから、この破片は間違いなく奈良三彩の破片であると考えられる。（魚島）

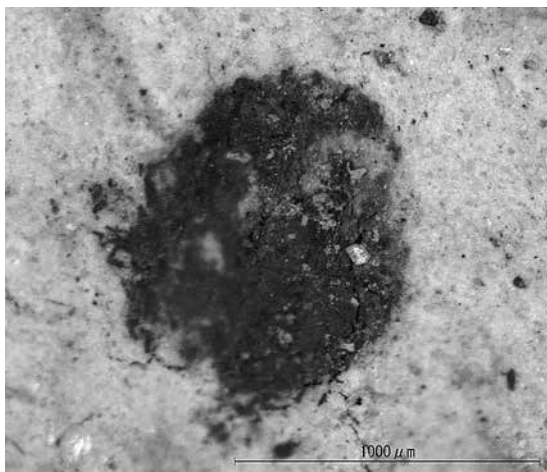


写真5 陶棺のデジタルマイクロスコープ画像

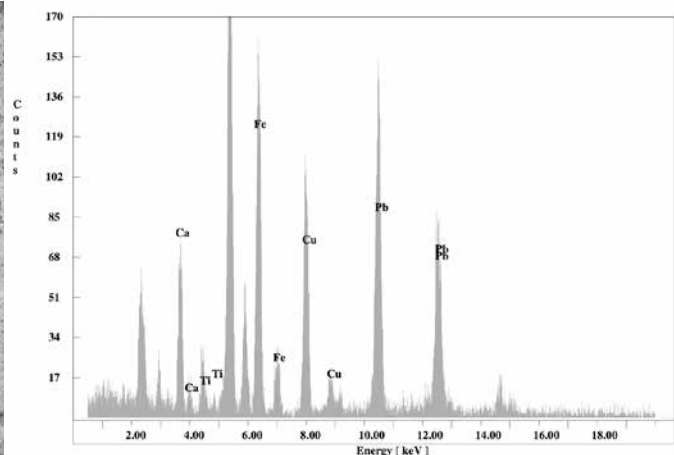


写真6 奈良三彩の蛍光X線分析結果

第7章 総 括

本書は、平城京右京三条四坊六坪で行った発掘調査の報告書である。ここでは、調査で検出した遺構や出土した遺物を基に、調査成果を時代順に記していく。

古墳時代 今回の調査では、古墳時代の土器は出土していない。しかし、重機掘削中ではあるが、陶棺の破片が出土している。その型式から7世紀初頭から前半のものであるが、当地の西方及び北方の丘陵地には横穴墓が多く築かれており、陶棺出土集中地域でもある。当地周辺でも陶棺片の出土はあるが、いずれも包含層や後世の遺構から出土した混入品である。

奈良時代 奈良時代になると平城京の造営がはじまる。当地は、右京三条四坊六坪の南半西寄りに位置するが、確実な奈良時代前半の遺構はない。これは東隣接地の奈良市222次調査でも同様である。遺物をみても前半に遡る土器は少なく、当概期の瓦もわずかである。これに対して、奈良時代中頃になると、土坑・井戸・溝などがみられる。ただし、掘立柱建物は確認出来ない。222次調査地では、多くの建物遺構が見つかったこととは対称的である。検出状況からみて、建物が建てられていなかったか、中世以前に削平されたかが考えられる。しかし、検討の結果、六坪は小規模宅地であることが判明しているので、222次とは別の宅地と考えられる。これらの遺構も、平安時代初頭には廃絶している。

中 世 12世紀になると、数棟の掘立柱建物や土坑などが検出されることから、小規模な集落が展開していたことがわかる。しかし、この建物も長くは続かない。その後、南北・東西の耕作小溝が掘削されていることから、耕地になっていたと推定される。さらに13世紀後半から14世紀前半には、斜行する溝が2条掘削される。

このように、今回の調査をまとめることができるが、調査が実施されたのは昭和63(1988)年であり、本書でも記したように、調査後に遺物整理を行い、報告書の刊行も目指されたが、未刊行で現在に至っていた。

令和3(2021)年より、奈良大学が実施していた過去の調査の再整理作業を開始し、本書はその成果の一部である。調査から40年ちかくを経ており、調査資料の散逸などもあることから、不明な点も多い。当時の調査参加者にも協力をいただいたが、不明確な点も残された。また、現在の調査精度からみると、不備な点も散見される。しかしながら発掘調査の成果を公開すること第一と考え、残された資料による事実報告を中心とした報告書を作成した。これにより、平城京研究の進展の一助になることを願う。

また、今回の再整理並びに報告書作成にあたっては、多くの学生諸氏の参加を得た。この考古学調査の整理・報告書作成を作業を通して、将来に文化財専門職を目指す学生は、知識・技術の習得することができた。

奈良大学が実施している発掘調査は、平城京の研究という学術成果と、文化財専門職を目指す学生の資質向上という教育的意義があると考え。

今後も引き続き、平城京調査の再整理を継続して、報告書という形でその成果を公開していきたいと考える。

(相原)



I区 調査区全景（南西より）



I区 調査区全景（北東より）



S D 101 (南東より)



S E 101 検出状況 (南より)



S E 101 遺物出土状況（西より）



S E 101（南西より）



Ⅱ区 調査区全景（南より）



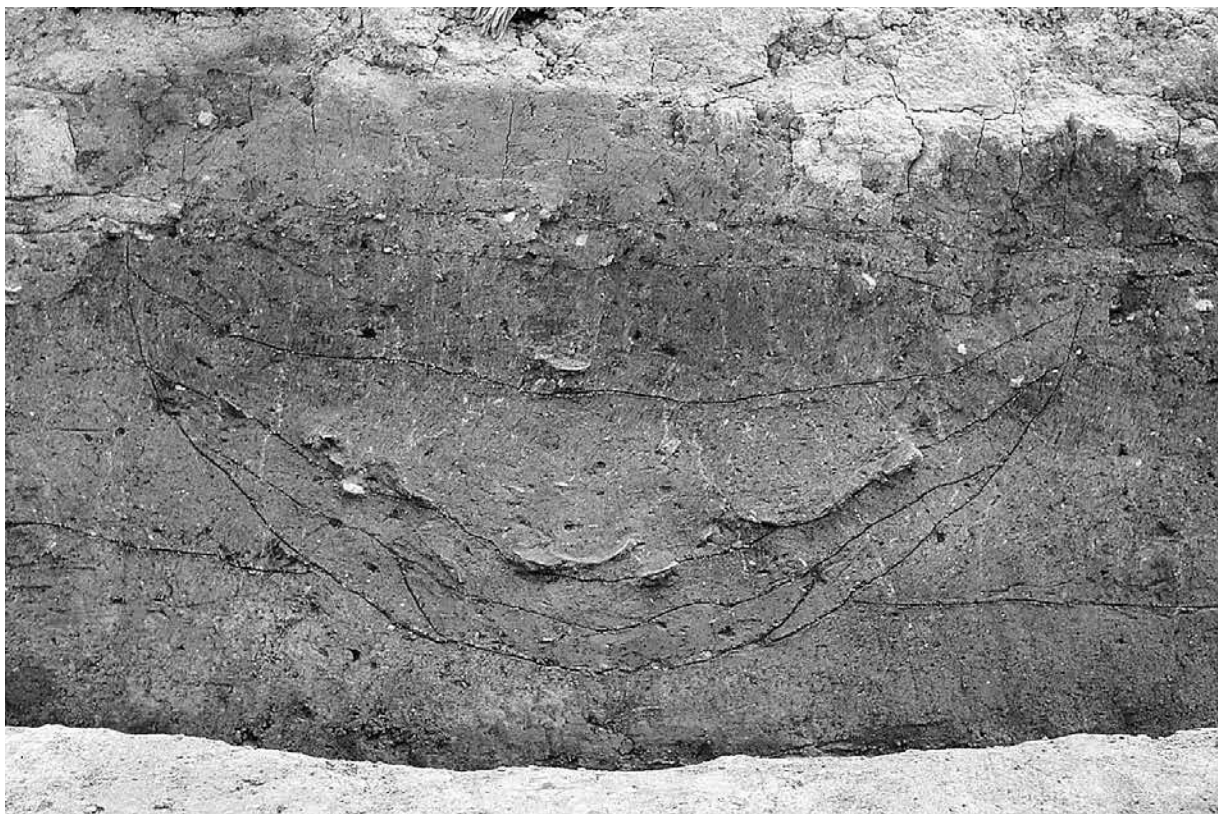
Ⅱ区 調査区全景（東より）



S E 201 完掘状況（北より）



S E 201 底部曲物（北より）



S K 205 堆積状況（西より）



S K 205 遺物出土状況（西より）



Ⅲ区 調査区全景（北西より）



Ⅲ区 調査区全景（南西より）



S E 301 断割状況（南より）



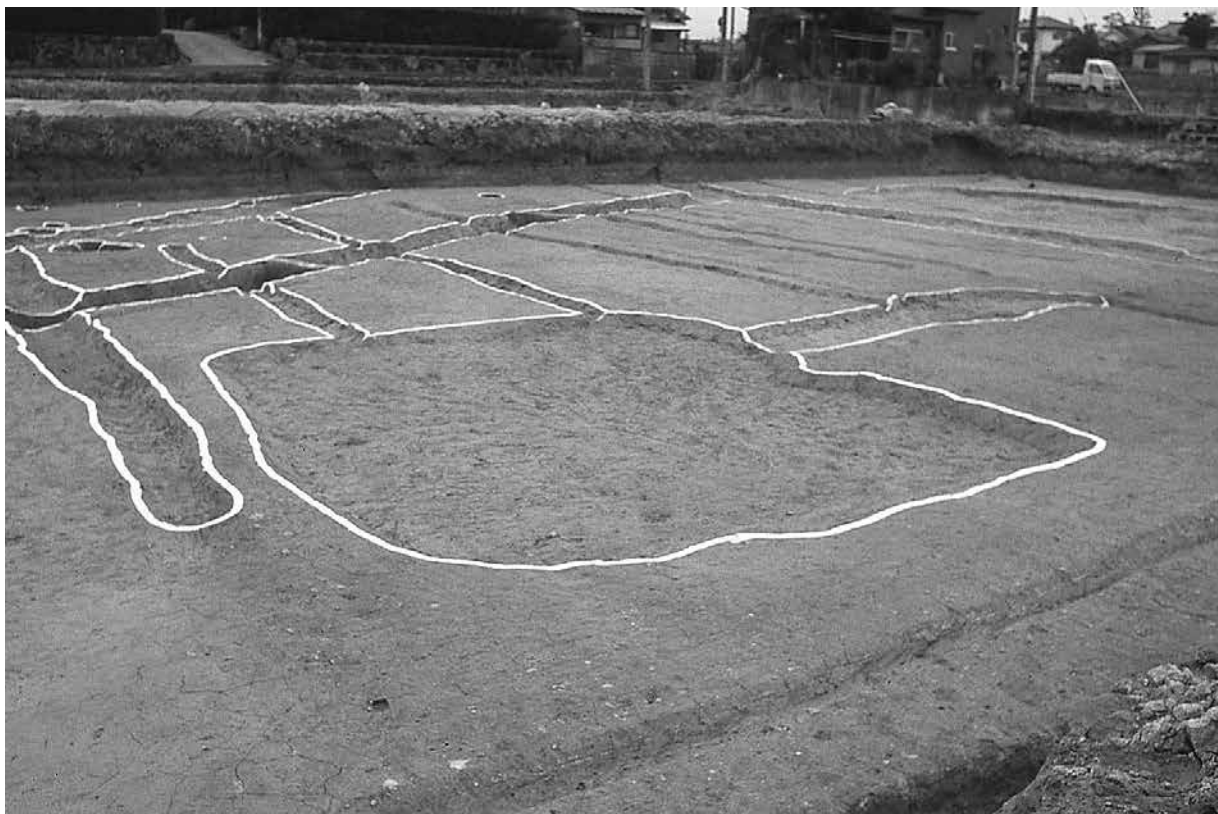
S E 301 枠内断割状況（南より）



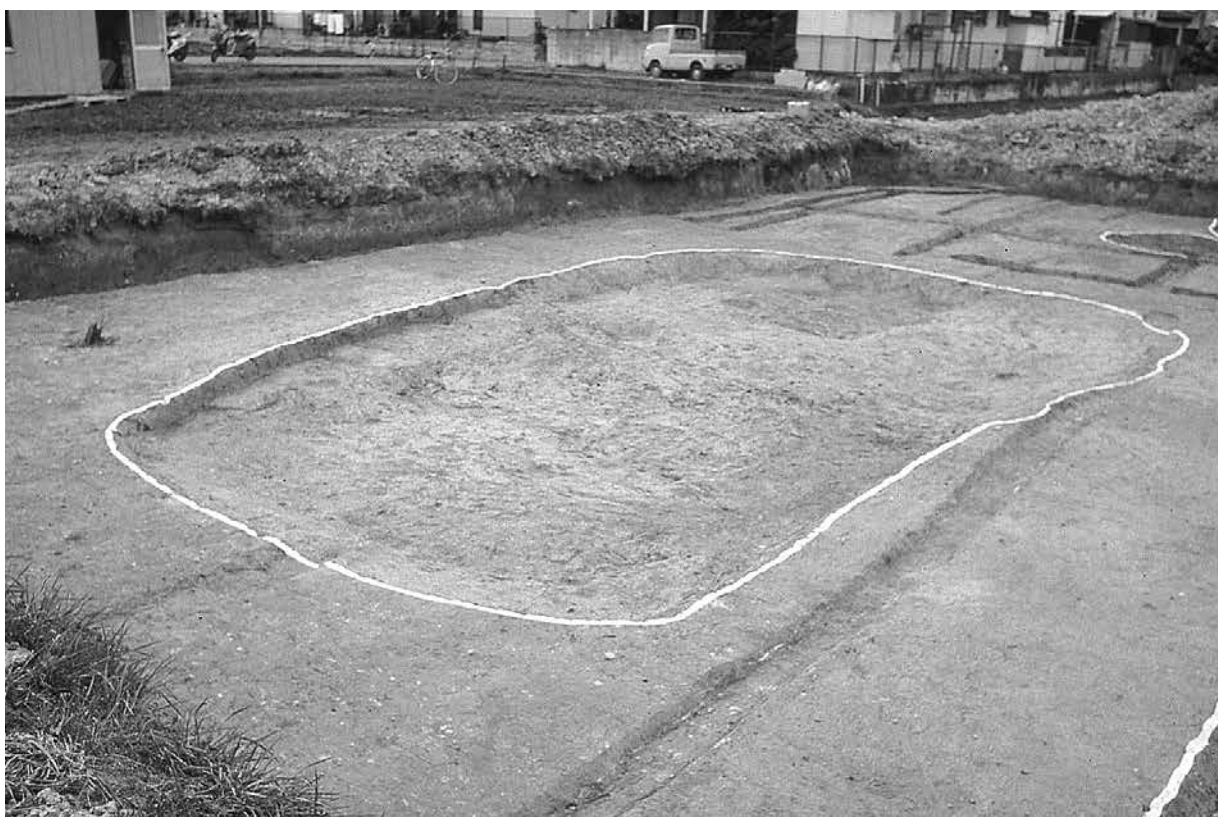
S E 301 枠内底部（南より）



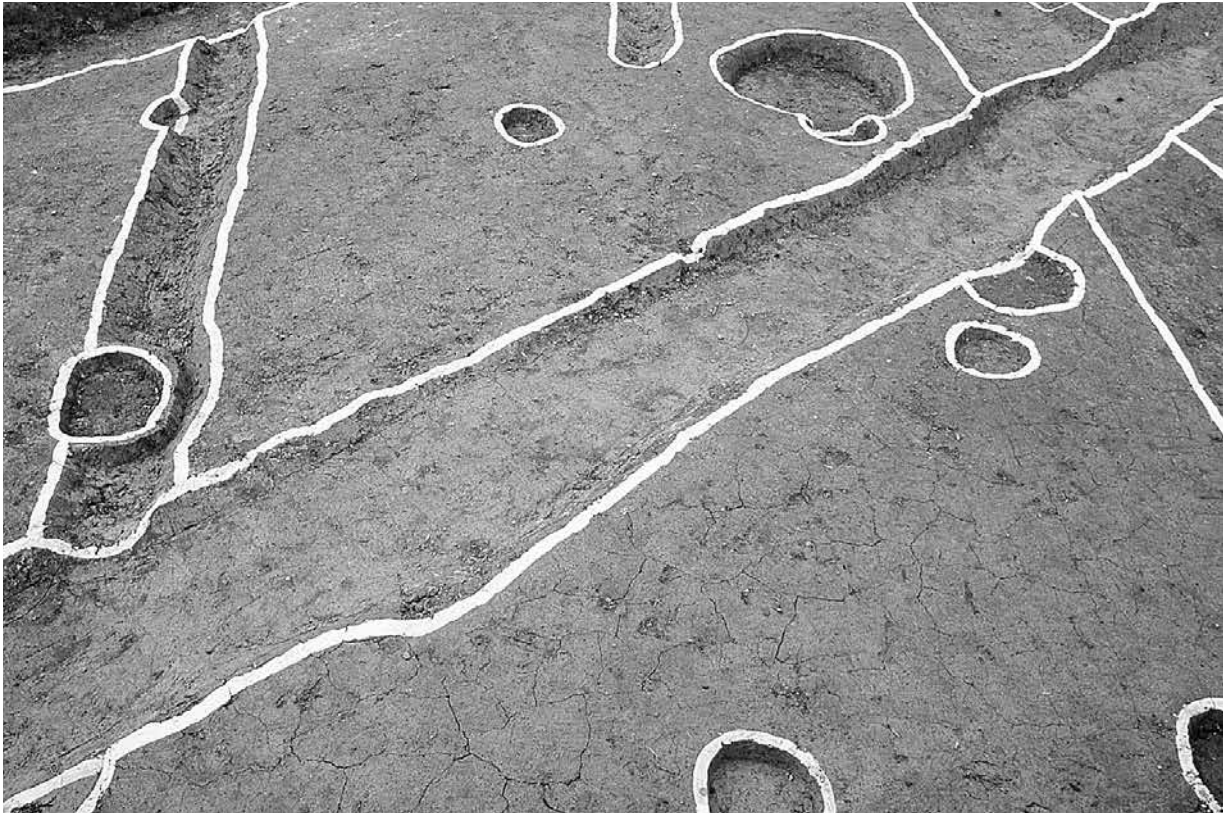
S E 301 遺物出土状況（南より）



S K 302 (北東より)



S K 304 (南東より)



S B 301 (南より)



S D 301・302 (西より)



IV区 調査区全景（東より）



IV区 調査区全景（北東より）



S B 401 (東より)



S X 401 (北より)



1(6140A)



4(6727A)



2(6129A)



5(6664H)



3(6308C)



6(6663)



1(6765A)
小型

軒丸・軒平瓦



4



3



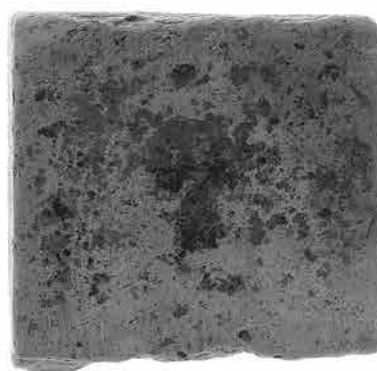
5



6



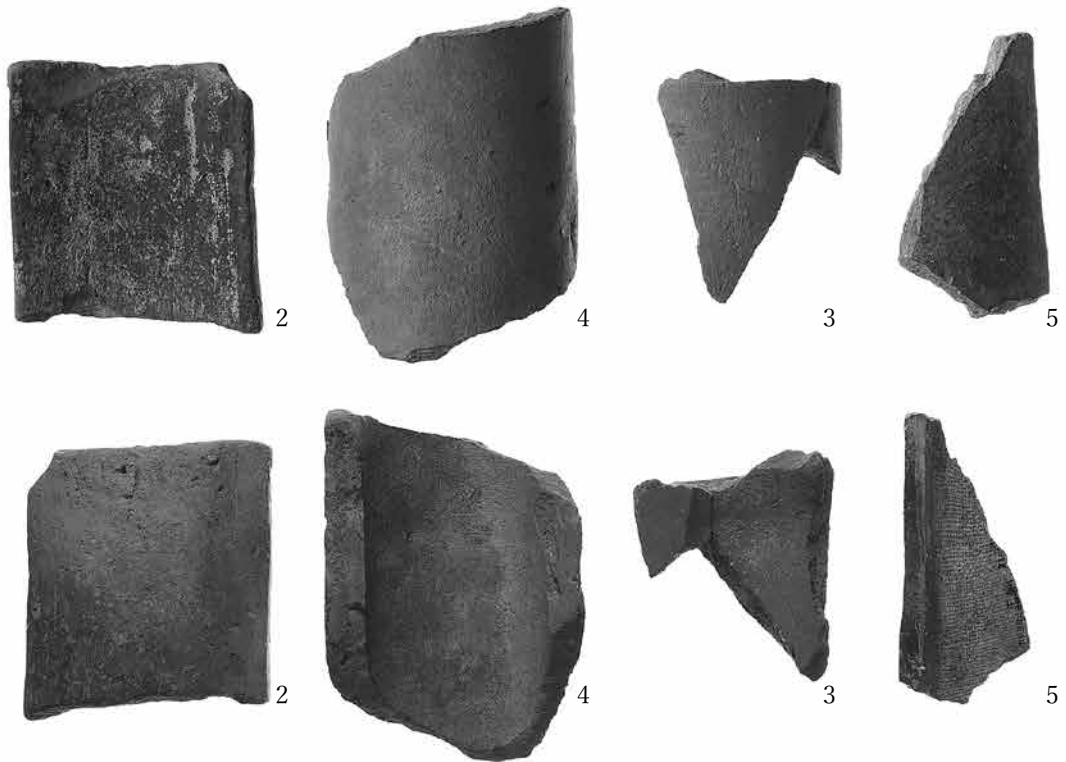
1
磚



2



小型瓦



小型丸瓦



S E 01 出土土器



S E 301・302 出土土器



S K 302 ~ 304 出土土器



S K 205 出土土器



S D 301 出土土器



|



赤外線写真



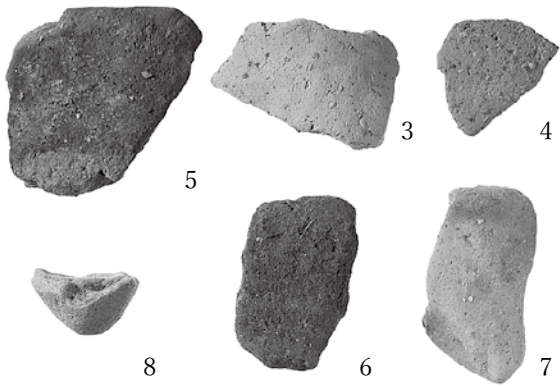
1

墨書土器



2

施釉陶器



5

3

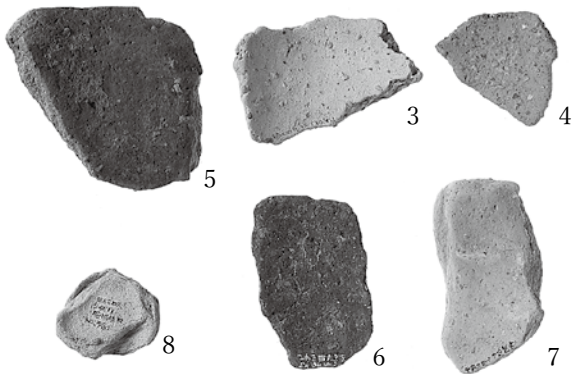
4

8

6

7

|



5

3

4

8

6

7

製塩土器



10

土馬

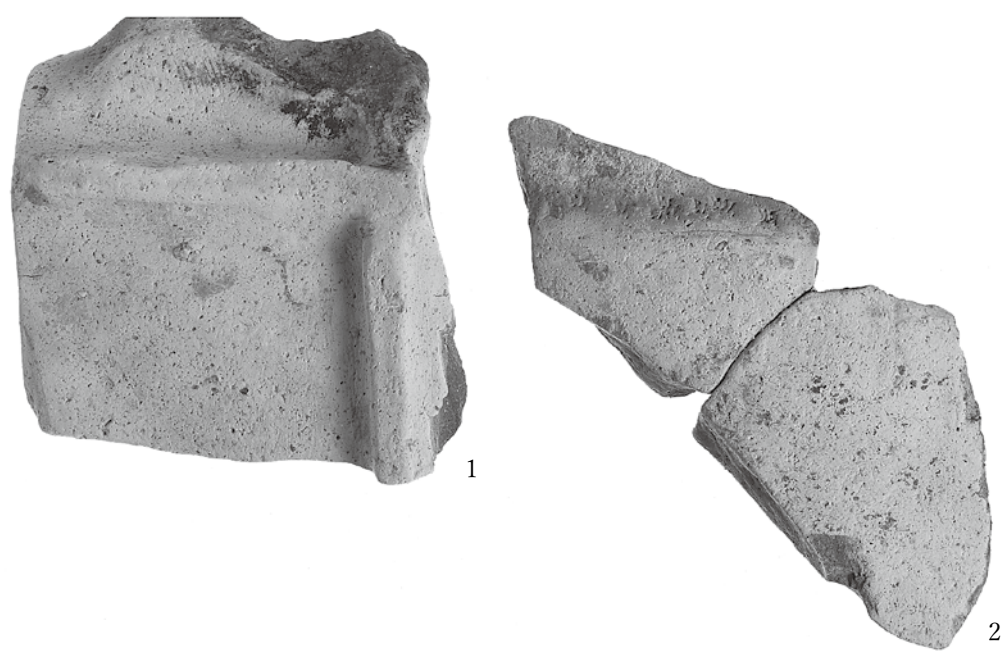


|

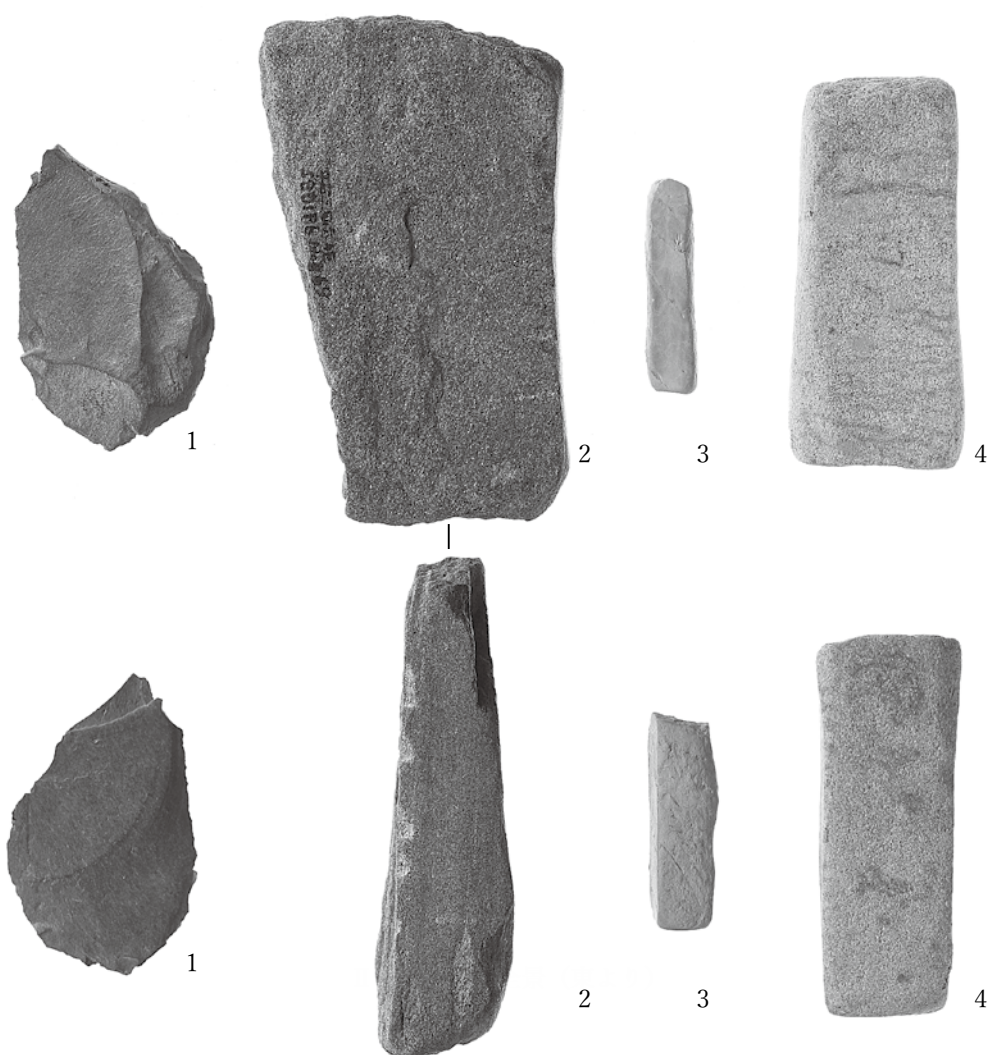


9

陶硯



陶棺



石製品（石器・砥石）

報告書抄録

ふりがな 書名	へいじょうきょう はくくつちようさほうこくしょ 平 城 京 発 掘 調 査 報 告 書						
副 書 名	平城京右京三条四坊六坪の調査						
巻 次	I						
シリーズ名	奈良大学考古学研究調査報告書						
シリーズ番号	第 33 冊						
編 著 者 名	相原嘉之、魚島純一、森山そらの、松田青空、植木実果子、則包遥菜、中田優菜、高橋夏樹						
調 査 機 関	奈良大学 文学部 文化財学科						
所 在 地	〒 631-8502 奈良県奈良市山陵町 1500 T E L 0742-44-1251						
発行年月日	2026（令和8）年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調 査 原 因
平 城 京 跡	奈良県奈良市 宝来3-11- 9 ほか	奈良 402 29201 05C-0094	34° 40′ 59″	135° 46′ 28″	1988. 3. 7 ～ 1988. 4. 27	1136㎡	大型量販店建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
平 城 京 跡	都城跡	奈良時代 中 世	掘立柱塀 井戸 土坑 溝 掘立柱建物 土坑	土器 瓦類 墨書土器 硯 土馬 陶棺 砥石 瓦器	平城京右京三条四坊六坪において奈良時代後半から平安時代初めの小規模宅地を確認した。 中世になると、数棟の建物が建てられるが、その後の宅地利用はない。 また、古墳時代の遺物として、陶棺片が出土している。		

平 城 京 発 掘 調 査 報 告 書 I
—平城京右京三条四坊六坪の調査—

編集・発行 奈良大学文学部文化財学科
〒 634 - 0103
奈良県奈良市山陵町 1500
TEL 0742-44-1251
発行年月日 令和 8 年（2026）3 月 31 日
印 刷 共同精版印刷株式会社

EXCAVATION REPORT
OF
HEIJO-KYO (NARA CAPITAL) SITE
(Excavation on the 6 Block
in West 4 Ward on 3 Street)
Vol. I

2026

PUBLISHED BY
DEPARTMENT OF STUDY OF CULTURAL PROPERTIES
FACULTY OF LETTERS
NARA UNIVERSITY